
いちばんうしろの
大魔王
ACT3
水城正太郎

HJ BUNKO


いちばんうしろの
大魔王
ACT3


海だ！


夏だ!
水着だ!
そして
ナマコだ!?


「待ってくれ、なんの説明もなく行ってしまうって、どういうことだよ？」
「さようなら」

いちばんうしろの大魔王
ACT 3

水城正太郎

HJ文庫

口絵・本文イラスト　伊藤宗一

目次


登場人物紹介
紗伊阿九斗
将来「魔王」になると予言された「善良な」主人公。
服部絢子
阿九斗が気になる一途で純情なクラス委員長。
江藤不二子
阿九斗に忠誠を誓った黒魔術師。
曽我けーな
落ちこぼれな天然少女。阿九斗に懐いている。
三輪寛
阿九斗の弟分を名乗るトラブルメイカー。
ころね
阿九斗の監視と護衛を行なう人造人間。

その少女の美しさは人形じみていた。目に付くのは緑色の髪(かみ)の毛と、同じ色の瞳(ひとみ)。整った顔立ちは美しいが、そこには表情というものが窺(うかが)えない。
人造人間(リラダン)。
魔術(まじゅつ)文明の粋(すい)を集めた思考する人工物。それが彼女だ。人形じみているというよりは人形そのものなのである。だから、ころねという奇妙(きみょう)な名前も彼女には似合っていたし、現在、彼女が置かれている奇妙な状況(じょうきょう)も、とても彼女にふさわしいものだと言えた。
夕暮れの野原の中で背筋を伸(の)ばして立っているころねの周囲をぐるりと取り囲んでいるのは、映像を投影(とうえい)したスクリーンだ。大気中の微小(びしょう)な粒子(りゅうし)であるマナを集めて作られたそれは、半透明(はんとうめい)のプラスチックを円筒形(えんとうけい)に丸めたかのようであり、離(はな)れたところから見れば筒状(つつじょう)のパッケージに収められた人形と見えた。
スクリーンに映し出されているのは顔の部分に映像処理が施(ほどこ)されたスーツ姿の男達(たち)が十人ほど。全員が椅子(いす)に座(すわ)った格好でいるが、その椅子も背後の壁(かべ)もまちまちで、別々の場所から同じスクリーンに映し出されているものと思えた。
「報告はデータでお送りしているはずですが」
ころねが聞き心地(ごこち)の良い声をあげた。もっともその口調は一本調子で、そこにはあまり感情は見られない。

それが純粋な問いなのか苦情なのかわかりかねたのか、スクリーンの中の一人が口を開いた。やはりその声は個性を消すための音声処理がなされていた。

「定期的に顔を見て声を聞かなければ安心できないのが人間なのだよ」

すると、もう一人がころねの反応を待たずに答えた。

「もちろんころね君の顔を見たいわけじゃないよ。私たち同士のことさ。意見の統一のためにはこうして君を介して話し合ったほうがいいのさ」

「皆さんは顔も声も隠していますが?」

ころねが言った。皮肉なのかどうかその場の誰も判断ができなかったらしく、舌打ちと苦笑が同時に聞こえた。

「人造人間がシステムに不満かね?　我々同士では把握しているからいいのだ」

「まぁ、そういきり立たないで。人造人間もシステムですよ。彼女らは人間に完全に従順にならないように作られていることをお忘れ無く。完全に従順な奴隷は人間を凶暴にしてしまう。だからこそ皮肉を口にする」

「知っているさ。講義は結構。人造人間にも感情はある。そして、本来は存在しないはずの自我も製作されてから年月が経つと芽生えはじめる。原理は知らんが」

「失礼したならお詫びしますが、まぁ、事実を言っただけなので」

ころねは淡々と告げた。そしてこう続ける。

「ところで内閣官房(かんぼう)の皆様(みなさま)が人造人間の知能について話し合うために集まったわけでないと思いますが」

「それだよ。つまりは紗伊阿九斗(さいあくと)のことだ」

「彼がコードネーム黒龍(こくりゅう)を目覚めさせたことが問題になっている」

「それをもって、彼がすでに魔王(まおう)となったと主張する者がいるわけだ」

「いわゆる強硬派(きょうこうは)だ」

「知っての通り、内閣は各宗派の教会を統括(とうかつ)してはいるが、実際には神がシステム化されすぎているために、末端(まったん)の信者のコントロールは完全ではない」

「国会ではシステムにすぎぬ神を本当に信仰(しんこう)している馬鹿者(ばかもの)たちが自分たちの信者の生活のみを豊かにしようと汲々(きゅうきゅう)としている」

「余談が過ぎるが、人造人間である君には理解しにくいだろうから説明したのだ。つまり、人間は魔王というのがなんであるか確かめもせずに騒(さわ)ぎ立(た)てるわけだ」

「それでは、魔王とはなんなのですか？」

　ころねが聞いた。

「それは機密なのだ。君にも教えられない」

「人造人間にも？」

「その通りだ。いや、正確には我々も知らない。一般に発表できないことは知らないのと同じことなんだ、我々にとっては。ただ、今の紗伊阿九斗が魔王ではないということだけは確実にわかっている」
「それは矛盾してはいませんか？　魔王でないことを知っていて発表できないとは」
「その程度のねじれはどこにでもある」
「気にしないことだね」
「さて、しかし本題は別だ。私が調べたところでは、強硬派の主張にも根拠はある。彼がコードネーム黒龍を目覚めさせたときから、各地で魔獣が活発に活動を開始した」
「無知蒙昧な者でなくとも、紗伊阿九斗を葬るべしという意見はあって当然だ」
「我々の間でも意見は割れている。最悪、暗殺という手すら打てる者がこの中にも何人かはいる」
「だが、君の所属するマークトの大司教は、当然ながら紗伊阿九斗も一市民であるとして法の下の庇護を訴えている」
「この対立は話し合いでは決着がつきそうにない」
「そこで我々は根本的な解決策を提示したい」
「紗伊阿九斗の自由を奪ってしまえばいいわけだ」
「罪状のはっきりしない逮捕は暗殺と同じ意味合いですが？」
　ころねがそう聞くと、内閣府の面々は笑い声をあげた。
「我々も男だからね。自由意志から自由をなくすこともあるわけだ」

「はっきりとおっしゃってください」
「ははは、つまり、だ」
「紗伊阿九斗は女性に興味があるだろう？」
「一般的（いっぱんてき）な意味においてそうでしょうね」
ころねはうなずいた。
またもスクリーンの男達が笑う。
「わからないかね？　彼は女性で自由を失う。彼が女に手を出せばいいわけだ。女で人生が狂（くる）う。よくある話だ。我々は女によって彼をコントロールする」
「下品なことですね」
ころねが淡々と言った。
すると、男達は咳払（せきばら）いをする。
「下品は承知だ」
「しかし犯罪を彼に犯（おか）させるわけではない」
「そそのかしたのが我々だという記録がマークト神に残るからね。我々は司祭ではない。記録を消す権限はない」
「ただし、恋愛（れんあい）となれば話は別だ。彼が自分の意志で行動するのだから。たとえ背後に我々がいるとわかったところで、女性を裏切ることはしまい。手を出した後ならね」

「そうだ。彼はそういう性格らしいじゃないか」
「となれば、そのような工作を行う。それは自然なことだ。争いも避(さ)けられる」
「理解はできます」
　ころねが平坦(へいたん)な声で言ってうなずく。
「他人事のように言わないでくれたまえ。これは工作活動だよ。ということは、そもそもこれは君への命令なんだよ、ころね」
「自分はマークト教会の所属です。その命令には従えません」
　ころねが拒否(きょひ)すると、スクリーンの中の一人が手をあげた。その手の中に一枚の紙があった。
「マークト教会から承認(しょうにん)はもらっている。電子認証(にんしょう)書は君の頭脳に転送されるだろう」
「すると、自分は内閣府の工作にマークト教会として協力するわけですね」
「そういうことだ」
「それならば拒否はできませんね」
　ころねの瞳の奥(おく)が鈍(にぶ)く光る。
「認証書を確認(かくにん)しました。確かに。詳(くわ)しい工作内容も転送されてきました」
　ころねがそう言い終わるのを確認してから、男達は全員が口々にほっとしたような言葉を発する。
「懸案(けんあん)は解決しそうですな」
「前の戦争のときはこのような事前の解決策はありませんでしたからね」

「この案が一番の落としどころでしたからね」
「彼はカタブツのようですが、やはり一人の少年。上手(うま)くいくでしょう」
「そのためにころねが努力してくれればね。というわけだ、ころね。工作をよろしく頼(たの)む」
　そう言われたころねは表情を変えずにうなずく。
「紗伊阿九斗を誘惑(ゆうわく)するように尽力(じんりょく)します」
「よろしい。ただし、この工作活動、失敗の場合、残念だが責任をとってもらうことになる。そのことを忘れぬように」
「責任というと、解任ですか？」
「今答える必要はない」
　ころねの返事を待たずにスクリーンは消えた。
　後には夕暮れの野原に立つころねだけが残された。
　その光景を見ている者がいたら、彼女の表情は悲しげに見えたことだろう。
「人間は私たちにも感情があると口では言いながらも、本質的にはそのことを理解していないのでしょうね。まったく不思議なことです」
　ころねは風の吹(ふ)く中で、そうぽつりとつぶやいた。
　彼女をよく知っている者ならば、驚(おどろ)いたはずである。その言葉は淡々とはしていたが、そこには強い感情がこもっていたからだ。その証拠(しょうこ)に、ころねは誰も聞いていないというのに、愚痴(ぐち)を漏らしはじめた。

「色仕掛けなんて、私にとってはつらいことです。それほどうまくはできないでしょうし、第一……」
　ころねは何かをあきらめたようにとぼとぼと歩きはじめた。
「私だって人間を好きになることくらいあるんです。当人にもわかってもらえないでしょうけれど」

1　臨海学校へ行こう

　紗伊阿九斗は悩んでいた。
　もっとも、将来は魔王になるという予言をされて以来、彼が悩んでいないときはない。『コンスタン魔術学院』のクラスメイトからは常時恐れられ、毎日のようにトラブルに巻き込まれている。おまけに最近は〝大きな龍〟という友達としては不適当としか思えない存在までも友達にしてしまい、着々と魔王化への道を歩んでいる気がする。
　今も寮の自室のベッドで悶々としているところである。というのも、放課後に担任の鳥井美津子先生に呼び出され、このような宣告を受けていたからだ。
「あのさー、今度、臨海学校があるんだけど、紗伊君はお留守番なの。ごめんね」
　いつもサバサバした態度の美津子先生だが、今回ばかりはやや申し訳なさそうな顔をしていた。
「それは決定ですか？」
　阿九斗は聞いた。
「うーん、どういうのかなぁ……。なんというか、こういろいろあるのよ。ほら、皇帝が亡くなったら運動会を自粛するじゃない？　ああいう感じかなぁ……あれ？　違うかしらねぇ？」

美津子先生が口をもごもごさせているのを見て、阿九斗は大体の事情を覚(さと)った。
「つまり、僕が校外に出ると、いろいろと軋轢(あつれき)がありそうだから、学校の自主的な判断としてそうしたということですね」
阿九斗がきっぱりと言うと、美津子先生が、ぽん、と手を叩(たた)いた。
「そう、それよ。そういうことなの。紗伊君、頭良いわねぇ。助かるわ。うん」
「あまり嬉(うれ)しくない褒(ほ)められ方ですが」
「まぁ、贅沢(ぜいたく)言わないでよ。一年生だけなんだから。ほら、二年生以上は学院に残ってるから寂(さび)しくはないわ。あなたはしばらく授業は休みになっちゃうけど、自由に遊んでいなさいな」
美津子先生は阿九斗の肩(かた)を無責任にパンパンと叩く。
「まぁ仕方ないです。それに臨海学校に行けない程度でどうこうは言いませんよ」
阿九斗は肩をすくめた。
すると安心したように美津子先生が笑う。
「いや、よかった。ほらさ、女の子の水着姿とか見られないって怒(おこ)り出すかと思って」
「僕がそういう性格に見えますか？」
阿九斗は眉(まゆ)をひそめた。

彼は絵に描いたような美形であるが、生まれつき目つきが悪い。まるっきり切れ者の悪人といった顔立ちだ。その彼の顔を美津子先生は改めて覗き込んだ。
「……確かに普段から半裸の女の子をはべらせているタイプにしか見えないわね。水着の女なんて見飽きたって感じ。ま、女の子に不自由していないなら、それこそ我慢も簡単だわね」
「その分析はともかく……。我慢が簡単なのは確かです。ともかく了解しました」
阿九斗はそう言って、教員室を辞した。

……のだが。

――ああ、やっぱり僕は普通の学園生活は送れない身なのか……。
阿九斗はしっかりと落ち込んでいた。ベッドに転がって目の上に右手を当てている。
本当は外見に似合わぬ性格をしているのだが、どうにも人前では格好をつけてしまうところがあるのだった。まさか臨海学校のような行事に憧れていたとは言えない。
――水着とかじゃない。普通の生活があればいいだけなんだが……。泳ぐとか。いや、そもそも臨海学校って何をするんだ？　それすらわからないのか、僕は……。
「臨海学校は女の子と近しく触れあうためのイベントです」
唐突に至近距離で声がした。
「わ！」

阿九斗は驚いて飛び起きる。いつの間にやら、ころねが阿九斗の顔を覗き込んでいた。

寮は男子寮の上に一人部屋であるが、ころねが入ってきているのはいつものことだった。阿九斗の監視員をしているころねは、常時阿九斗と一緒にいる必要があるため、夜はこの部屋の天井近くにある収納棚に入り込んで寝ている。そんなわけで、ころねが阿九斗の近くにいるのは当たり前のことにはなっているのだが、今日は不自然なところがあった。

ころねの雰囲気がどうも説明しにくいのだが、少し違うような気が阿九斗にはした。

「ど、どうしたのさ」

「女の子と近しく触れあうイベントなんです」

そう繰り返したころねは、なぜか阿九斗の横に添い寝をしていた。

「どうして横に寝てるのさ?」

「そうしたいからです。嫌ですか?」

ころねは阿九斗の胸に腕を回し、半身を起こしている彼の身体を引き寄せるようにして再びベッドに寝かせる。そして阿九斗の顔のすぐ近くに自らの顔を寄せた。

人間の理想のひとつであるその顔を間近で見るのは、慣れていても緊張する。阿九斗は心臓が跳ね上がるのを感じた。人造人間も発音のために呼吸はしている。その吐息が阿九斗の鼻をくすぐった。人間のそれとは違う不思議な香りがした。

「あ、あのさ、またからかってるわけ?」

阿九斗は平静を装った声で聞いた。
これまで何度もころねにはこのようなからかいを受けてきた。阿九斗としても警戒せざるを得ない。
「いいえ。からかっているわけではありません。恥ずかしいなら秘密は厳守します。ここであなたが何をしても、誰にも口外しません。報告のための記録も感情的な部分をぼかして行います」
ころねは逮捕前に容疑者の権利を読み上げる刑事のような口調で言った。そう言いながらも、手は阿九斗の身体の上を滑っていく。胸から腹、そしてさらにその下へと……。
「ちょ、ちょっと待った！」
阿九斗はころねの手を掴んで止めた。
「どうしました？」
「どうしました、じゃなくて、本当にからかうのはやめてくれ」
阿九斗はころねの腕から逃れて半身を起こすと、あぐらをかいてベッドの上に座り込んだ。ころねに正対して真面目な顔をする。
ころねも身体を起こしてベッドに座る。ただし膝を抱えた格好だ。短いスカートの制服姿のままだから、阿九斗に堂々と下着を見せつけるような格好になっている。
「……どうしました？」
思わず無言になっていた阿九斗に、ころねが聞いた。

阿九斗は首を振って斜め上を見る。
「と、ともかく……。というか、話があるのはそっちじゃなかったのか？　臨海学校は女の子と触れあうイベントだとかなんとか言ってたけど」
「それなんですが。臨海学校に行けることになりました」
ころねは足を開いたり閉じたりしながら上目遣いで阿九斗を見る。
「え？」
一瞬、ころねが何を言っているのかわからず、阿九斗は顔を正面に戻したが、ころねの目に気圧されて再び顔を逸らした。だが、ころねの言葉を思い出し、驚きの声をあげる。
「え？　臨海学校に行けるって？」
「そうです。臨海学校に行けることになりました」
「だって、あれは学校が自粛するってことになって……」
「そこを自分が責任を持つことになりました」
「いや、そこまでしてくれなくてもいいのに……。だって、外にも僕の噂は伝わっているみたいじゃないか。だったら問題を起こすような行動はしないのが普通だ。大体、たかが僕が臨海学校に行くために……」
阿九斗がぐずぐずと言っていると、ころねが小さく言った。
「迷惑でしたか？」
その声がどういうわけか悲しげに聞こえたので、阿九斗は思わずころねの顔を見た。

珍(めずら)しいほどに感情のこもった緑色の瞳(ひとみ)が阿九斗を見据(みす)えていた。潤(うる)んで悲しげな瞳だと阿九斗は思った。いや、そう考えるより早く、阿九斗は動揺(どうよう)していた。

「そうじゃないんだ。いや、君がそうしてくれる理由が見あたらないから困惑(こんわく)しただけなんだ。そうだよ、どうしてわざわざそんなことを……」

しどろもどろになっていると、ころねは膝の間に顎(あご)を埋(う)めるようにして、阿九斗を盗(ぬす)み見るような格好をした。

「だから、臨海学校が女の子と近しく触れあうイベントだと聞いたからです。そこに行けば、あなたもこういうことに大胆(だいたん)になるかと思って……」

ころねが下の方を指さした。阿九斗はそちらを目で追うことはしなかった。ころねは相変わらず膝を立てていたから、膝の間の下の方を指さされればそれが何を指しているかは誰でも想像できる。

「だ、だからからかうのはよしてくれ。そもそも僕はコ＝ロの信者なんだよ。そういうことをすると僕の司祭への道が遠のく」

阿九斗はころねから離(はな)れようとベッドから降りた。

ころねが足を伸(の)ばして、ごろりとベッドに横になる。

「自分は今日はここで寝ます」

「いや、困るよ」

阿九斗は首を横に振る。ころねはじっとその顔を見る。

「女の子に興味を持てないのは病気の一種かもしれません」
「そ、そんなことはないよ」
「それならば一緒に寝てください」
ころねは目線を阿九斗から外さずに言う。だが、口調にも表情にもまったく変化がないので、阿九斗としてもどう反応したものか本気で困りはじめた。
――や、やっぱり、ころねの様子がいつもと違うぞ……。からかっている風でもないし、かといって彼女には僕を誘惑(ゆうわく)する理由なんてないはずだし……。
「そ、それは遠慮(えんりょ)したい」
「どうしてですか?」
「どうしてって……。な、なにか変だよ、ころね」
「変というのは、この行動には女としての魅力(みりょく)を感じないという意味ですか?」
「い、いや、微妙(びみょう)に違うけど……」
「違うならばなんです?」
「いや……違……違わないな。君の行動では確かにその気にはならない……と思う」
どう反論したものかわからなくなっていた阿九斗は、思い切って話の流れるままに任せた。どう反応されるものかと心配したが、ころねはあっさりとあきらめたらしい。
「そうですか」

と言うと立ち上がり、いつもの定位置である収納棚の上へと戻っていった。
――落ち込んだりとかしていないよな……？　いや、でもそんな性格はしてそうにないし……。
阿九斗は悩んだが、ともかくもベッドは空いたので、眠ってしまうことに決めた。
――そういえば、臨海学校に行けるようになったお礼を言っていないな。妙な話の流れになったからとはいえ、そこはちゃんとしておかないと……。
そんなことを考えているうちに、まぶたが重くなった。
しかし、阿九斗は気づいていなかった。ころねは阿九斗が眠ったのを確認してから、阿九斗の寝顔を見つつ、こうつぶやいていたのである。
「私がからかっているのでないと気づいたら、その気になってくれるのでしょうか？　いや、阿九斗さんの言う通り、迫り方が悪いのだとしましょう……」
そしてころねは、過去の物語のデータから、男性の趣味嗜好を検索しはじめた。

「朝だぞ。起きろ。起きないとエルボードロップしちゃうぞ」
その妙な言葉と同時に、身体にどすんという衝撃を受けて阿九斗は目覚めた。
「うわ、なんだ、なんだ」
目に飛び込んできたのは、自分の身体の上にまたがっているころねだった。相変わらずの無表情で阿九斗を見下ろしている。

「……ど、どうしたのさ?」

「お兄ちゃんが起きないから悪いんだよ。こうして起こしてあげないといつまでも寝ているんだから。駄目なお兄ちゃんだな」

ころねは毎度の抑揚のない声で言った。

「…………………」

阿九斗はいつも朝は早い。大体五時くらいには起きて軽い運動とシャワーをとる習慣になっている。机の時計を見ると、今は朝の四時四十分だ。

――どうして僕は早く起こされて文句を言われているんだ？　いや、そもそもおかしいのはそこじゃなくてお兄ちゃん、か。

まだ頭のはっきりしない阿九斗は、ぼんやりとそんなことを思った。が、おかしいのはそこだけではなかった。ころねは子供っぽいワンピース姿だった。そんな格好ははじめて見る。スレンダーな身体にそのワンピースはそれなりに似合っていたが、どうにもスカートが短すぎて、阿九斗にまたがっている彼女の下半身はほとんど丸見えも同然だった。

「いや、ちょっと……。なんなんだ、いったい?」

「そこまで言っても起きないつもりだな、お兄ちゃん。それなら電気あんましちゃうぞ」

ころねは淡々と凄まじいことを言い、阿九斗にまたがったまま身体をずらすと、ソックスに包まれた足を阿九斗の股間にあてがった。

「うわ！　待った！　そもそも起きてるじゃないか！」
「起きないお兄ちゃんが悪いんだぞー。ぐりぐり」
「ひっ！　わ、わ、わ！」
　阿九斗は必死にもがいてなんとかころねの身体の下から脱出した。
「ど、どうしたんだよ。変だよ、ころね」
　阿九斗は荒(あら)い息を吐きながらベッドの端(はし)で小さく身体を丸めた。
「変じゃないですよ？　お兄ちゃん」
　かくん、ところねは首をかしげた。その仕草はどう見ても壊(こわ)れて首がとれかかった人形のようにしか見えなかった。
「だから、それが変だと言ってる！」
「お兄ちゃん、より、お兄様、のほうがいいですか？」
「そういうことじゃない！」
「じゃあ隣(となり)の幼なじみの方がいいですか？」
「そういうことでもないよ！」
「じゃあどんな女の子が起こしに来たら、ついついそのままベッドに引き込んでしまいますか？」



「わかるか！」

「勝手なことですね。年頃の男の子というのは難しいです。でも嘘をついているわけでもなさそうですね。さきほど足で確認しましたが、朝だというのに陰茎は硬化していませんでした」

「さらっとそういうことを言わないでくれよ……」

　阿九斗は呆れたが、一方でいつものころねの口調に戻ったことで安心もしていた。

——よかった。どうやら本格的におかしくなったってわけじゃないらしい。でも、ということは、ころねは本気で僕を興奮させようとしているわけだ……。それはそれでおかしいな……。何か裏があるんじゃあ……。

　そんな考えに至ってころねを見返したが、ころねは机の上に置いていたポシェットを開けて、中から白いエプロンを取りだしているところだった。

「では、総当たりでやりましょう。裸にエプロンを試してみます」

「だから、そういうことはしなくていい！　そもそもなんでそんなことを……」

　阿九斗がそう聞くと、ころねは、ふと手を止めた。

「あなたはそういうことが嫌いなのですか？」

「好きじゃないよ！」

　反射的に阿九斗は言い返した。

　だが、ころねがそれにはすぐに答えなかったので、阿九斗は不安になる。

——あれ？　言い過ぎたかな？

と、ようやくころねが口を開いた。

「それは困ります。好きな人からそういうことを言われては、自分に魅力がないのかと思ってしまうじゃないですか」

ころねがゆっくりと言った。

いつも淡々とした口調のころねである。そんな風に感情を込めた言葉が出てきたことで阿九斗の不安はさらに増大する。

——いや、待てよ。そういえば、人造人間は感情がないわけじゃないって言っていたよな。そうすると、まさかころねは僕がころねを嫌っているんじゃないかと心配になってこういうことをしているのか？　なら傷つけるわけにもいかないけれど、やっぱり僕だって軽薄なことはできない。なら、こちらも素直に自分の気持ちを言うしかないか……。

こういうときに政治的に正しい判断をしたあげくに格好をつけてしまうのが阿九斗である。ころねの肩に両手を置いて、ころねの目をまっすぐ見つめると、諭すように言う。

「僕は女性に対しては真面目に接したいから、そういうことはできないんだ。でも、それだからといって本当の意味で興味がないわけじゃない。ただ、そういうことを抜きにした純粋な好意は素直に持っていたいし、事実、君にはそういう気持ちを持っているんだ。だから、どういうつもりでそういうことをしているのかわからないけれど、もし僕が君を嫌っているんじゃないかって不安になったのなら、そういうことはないか

ら心配しないで欲しい。それに僕は昨日は言いそびれたけど、臨海学校に行けるように取りはからってくれたことには感謝しているんだ。ありがとう」

　すると、ころねは、ぴたりと動きを止めた。どう反応していいのか戸惑っているようでもあり、いつもの単なる無表情のようでもあった。それでも、ややあってから、ころねは答えた。

「そんな困らせるようなことを言わないでください。自分は身体だけの関係でいいんですから」

「ちょ……」

　さすがにそう言われると阿九斗も完全に硬直してしまう。

と、そのとき五時になったらしい。机の上の時計が電子音を立て始めた。

　その瞬間、ころねは阿九斗の腕をすり抜けて、何事もなかったかのように手に持ったエプロンを再びポシェットにしまいはじめた。

「ほら、早くいつもの運動とシャワーをこなさないと朝食に間に合いませんよ」

「あ、ああ……」

　阿九斗は不自然にカクカクとうなずいて時計の音を止めると、すぐさま部屋を出て行った。部屋に残ったころねは、阿九斗を見送りながら、両手の人差し指を両方の頬に当てて、むにゅ、と押し上げた。そうすると笑顔に見えなくもなかった。目は笑っていなかったが。

「身体だけでも駄目となると、やはり私が人造人間だからでしょうか？　笑顔を身につければなんとかなるのかも……。いや、人間は分析できないからわかりません。それなら人間以外の魅力で迫ってみると

か……」

　ころねは珍しく悩んでいるかのようにつぶやいた。

○

　ころねの態度の変化への疑問は阿九斗の中で深まるばかりだった。寮から学院への道すがら、後ろをついてくるころねのことを妙に意識してしまう。というのも、ころねはいつのまにかメイド服に着替えており、おまけにネコ耳まで生やしている。どうやらまだ阿九斗を興奮させようとしているらしい。

「今日は可愛いっすね、ころねちゃん」

　そう話しかけてきたのは、ヒロシだった。

「そうか、そういうのが好きだったんだ」

　阿九斗は妙に納得してうなずく。

「イヤだなぁ、アニキ、そういう意味じゃないっすよ。素直に可愛いじゃないっすか」

　ヒロシが、いかにも少年らしいいたずらっぽい表情で、照れたように頭をかく。

　三輪ヒロシ。年齢が同じ阿九斗を兄貴と慕うクラスメイトである。魔王と恐れられる自分に普通に接してくれる、阿九斗にとっては貴重な友人である。

「自分は今日もというより、いつも可愛いのです」

平然ところねは言い放った。

「あはは、そうっすね。うん」

ヒロシは素直にその言葉に笑ったが、ころねはこうつけ加えた。

「阿九斗さんはその魅力を無視しますが」

「…………」

一気に空気が気まずくなる。阿九斗が盗み見たヒロシの顔もころねの異常に気づきはじめた表情をしている。

「そ、そうだ、臨海学校、行けることになったそうなんだ」

阿九斗は裏返った声でヒロシに言う。

当然、ヒロシならばとても喜んでくれるだろうし、それで話題も変わると思ってのことだったが、それを聞いたヒロシは、一瞬、暗い顔をした。それだけならまだしも、阿九斗の顔を見ると、誤魔化すように笑顔を作った。

「そ、それはよかったっすね、アニキ!」

「あ、ああ……」

阿九斗はさらに表情を強ばらせた。それから校舎までは無言でとぼとぼと歩く羽目になった。しかし、朝のホームルームで阿九斗はとりあえずヒロシの行動の意味だけは理解することになった。

「臨海学校についての注意をしておきます。えー、紗伊阿九斗君が参加することになりました」

美津子先生がそう宣言すると、クラスがざわつく。すでにお馴染みとなった反応だが、阿九斗はそれでも軽く心がざわめく。そこに追い打ちをかけるような言葉が美津子先生から発せられた。

「臨海学校は学院の専用施設ですから、本来ならそこに誰が行こうとそう問題にはなりません。ですが、施設のある島は、魔王についての伝説があるところです。島の住民の皆さんの間に伝わっているのは、こんな話です。魔王が復活するとき、前兆として島の中心の湖から魔獣が出現する。しかし、そのとき勇者が現れて、魔獣を倒す。その後、勇者は魔王をも倒す」

クラスが静まりかえった。ざわつきを通り越すとこのような反応になるらしい。全員が一斉に教室の一番後ろの席の阿九斗の方を振り返った。

阿九斗は反応に困ったが、うろたえるのも格好が悪いと、つい声をあげてしまう。

「無知蒙昧な島民の伝説にすぎないもので騒ぐなんて馬鹿馬鹿しい。そもそも魔王の戦争は百年前のこと。その頃には現在の国家体制があったわけだ。それならば正確な記録も残っていてしかるべきで、そのような伝説の誕生する余地などまったくない！　ましてこれまで未来の予測が正確だったことなどないのだから、そのような伝説はまさに妄言。そんなことでいちいち狼狽しないで欲しいものです！」

阿九斗は机を叩いた。

どうにも口調や態度が堂々としすぎていてかえって説得力はないが、内容は確かに正論だったので、クラスメイトたちは戸惑いつつも阿九斗から視線をそらした。

しかし、思わぬところからまったく別種の反応があった。それは阿九斗にとっては衝撃的なものだった。

「すんません、アニキ。その島って、あっしの実家なんすよ」
ヒロシが振り返って申し訳なさそうに言った。
——そうか、登校中の反応はそういう……！
阿九斗は慌(あわ)てた。
「いや、それは悪かった。決してご家族を馬鹿(ばか)にするような意味で言ったんじゃあ……」
「いや、いいんすよ。だって、家族が無知蒙昧なのは本当なんすから」
ヒロシは吐(は)き捨(す)てるように言った。
それは謙虚(けんきょ)な態度というわけでも、自己卑下(ひげ)というわけでもないようだった。どうやら本当にヒロシは実家を嫌っているらしい。
阿九斗はそこが気になったが、美津子先生が話を続けるべく大きな声で注意したので、その場の話はお流れとなった。だが、昼休みに食堂でヒロシと話をしてみると、背後には複雑な感情がありそうだった。
「大体が本当に田舎(いなか)なんすよ。アニキの言う通り、百年前じゃ伝説もなにもあり得ないわけっす。そもそも長生きな人は大戦時から生きているわけっすからね。当然、事実を知っているはずなんすよ。そもそも魔王は勇者に倒されたなんて歴史はないわけっすから、もうなんのためにそんな伝説を残しているのかっていえば、もう島民の自己満足としかいえないわけっす。なんにもない田舎だから、せめて魔王を倒す勇者が出て欲しいっていう浅ましい願望なんすよ」

ヒロシが苦々しい表情で言う。阿九斗に話しているというより、自らの過去を確認するかのような口調だった。

阿九斗には、どうしてヒロシがそのような話し方をするのかよくわからなかった。

「だけど、その島には家族がいるんだろう？　あまり浅ましいとか、そういうのはどうかと思うよ」

「そりゃあそうっすけど、あっしの問題ですからね」

ヒロシは口を尖らせた。阿九斗としては、それに腹を立てなかったと言ったら嘘になる。

「そういう言い方は嫌いだな」

「いや、そうは言いやすけどね、アニキにはわからない問題なんすよ。だってアニキは強いじゃないっすか」

「それとは何も関係ないだろうに」

「そうじゃないんすよ。そうじゃないんすよ！」

もう話をしたくない、というようにヒロシは口を閉ざしてしまった。阿九斗が再び話しかけようとすると、ヒロシはさっさと食器を片づけに立ってしまった。

——なんだってんだ、いったい？　家族を嫌うなんて気持ちは強い弱いと関係ないだろうに。

阿九斗は不快に思ったが、明日になったらまたけろっとして話もできるだろうと、今は気にしないことに決めた。

○

放課後になって寮に戻った阿九斗は、まず机の引き出しを開けた。椅子に登って開け放した引き出しの中に慎重に足を入れる。傍から見たら机をひっくり返そうとしているか、引き出しを壊そうとしているようにしか見えないが、実は引き出しの中には転送の魔法陣が描かれている。黒龍のピーターハウゼンがいちいち歩いて地下にまで来るのは面倒だろうと仕込んでくれたものだ。そのおかげで引き出しに潜り込むと、学院の地下にある魔王の地下宮殿に行けるようになっている。

ピーターハウゼンは、前の大戦で魔王の騎龍だった黒龍である。殺されることもなく封印されていたが、最近になって復活したのだ。そして今は阿九斗の騎龍となっているのだが、阿九斗にその気がないために、互いに微妙な関係ではある。

「そろそろ戦争でもやってみたまえ。良い経験になる」

犬か何かみたいに身体を丸くして寝ころんでいるピーターハウゼンがいかにも平和そうに言った。だがその言葉の内容が物騒である上に、彼は体長が十五メートルはあり、全身を黒く輝く鱗に包まれている。その堂々たる口調とあいまって、傍から見ればまさしく悪魔の使いが暇つぶしに世界を滅ぼそうとしているとしか思えない。

地下宮殿の中心にピーターハウゼンのベッドがある。広くて天井も恐ろしく高い地下宮殿にはピーターハウゼンが動き回れるスペースが十分にある。実際、阿九斗とピーターハウゼンが殴り合ったのはまさに

この場所だ。だが、その丸く積まれたクッションの上からピーターハウゼンはあまり動こうとしなかった。どうやら気に入っているらしい。

　阿九斗はピーターハウゼンの前に立ち、苦笑いを浮かべていた。

「毎度の答えで申し訳ないけれど、僕は魔王じゃないし、なる気もないさ」

「いずれそうするのが最良の判断だと気づく時が来る」

　ピーターハウゼンが鼻を鳴らした。

「さて、用事もなく私のところに来るとも思えないが？」

　ピーターハウゼンが水を向けると、阿九斗はうなずいた。

「実は馬鹿な質問と思うだろうが聞いて欲しいんだ」

　阿九斗は先ほど聞いた島の伝説について話した。ピーターハウゼンは馬鹿にするかと思いきや、その話を真剣に聞いていた。

「ほう、それは確かに妙だ。ヒロシの言う通り願望なのかもしれないが、興味深いところもある」

「興味深いって？」

「我々にとり、予言というのは予測にすぎない。つまり過去のデータがあってはじめて未来予測が可能になるわけだ。君が魔王であるというのも、過去のデータからの予測だと言ってよい。ところが勇者というのは過去に存在したことがない」

「じゃあ、僕のことも間違いかもしれないじゃないか」

「それとこれとは話が別だ。過去にいたかどうかということならば、少なくとも私が生まれてから勇者とやらと戦ったことはない」

ピーターハウゼンがからかうように目を見開いた。

「なるほどね。それならやっぱり迷信の可能性は高いのか」

阿九斗は腕を組んだ。

現在の帝国社会はそれこそ千年も前からシステム化されている。神は人造の記録装置にすぎず、プログラム化された良識に従えば、それに応じた社会サービスを享受できる。そのシステムは崩れたことがない。だが、その神秘性のまったくないシステムを認識できない人々にとっては、神とは文字通り信仰すべき神であり、それが迷信とシステムとが同時に共存できる遠因となっている。

「いや、私が興味深いと思ったのは、いい加減な割りには本物の予言めいていることだ。予測でなく、予言、だね。普通、あの島——三輪島という名か——には魔王は出かけていかない。先代の主も行かなかった。南の孤島なのだからね」

「不気味なことを言わないで欲しいな。それより、どうして先代の魔王のことを詳しく語ってくれないんだ？」

阿九斗は聞いたが、ピーターハウゼンは片目を見開いて不思議な表情を作った。眉を動かしている仕草のつもりらしい。

「それは君が魔王になってくれないからだ」

「だから、僕はならないと言っている」

阿九斗はため息とともに腰に手を当てた。

「私としても荒っぽいことはしたくないからおとなしくしているが、なんらかの不都合があれば即座に外に出て周辺を破壊するかもしれんぞ。そうなったら、君は後には引けまい。そのとき、君は正式に私の主になるわけだ」

ハハハ、とピーターハウゼンは笑った。その息が周囲につむじ風を巻き起こす。阿九斗は手で顔を覆って渋面を作った。

「そいつは困る。それに僕らはしばらくここを空けるんだ」

「臨海学校とやらでその島に行くのか。予言のことを気にしているなら行くべきではないと思うが？」

「だから迷信だとわかったからいいのさ」

「そうかね。とはいえ危なくなったら私を呼び給え。馳せ参じる。そうなったら戦争だ。たぎるものがあるな」

ピーターハウゼンは凶悪な顔で笑う。阿九斗はため息をついた。

「平和に行こうよ」

「君も戦人だろうに」

「腹の中に昼寝人を入れている龍のセリフじゃないね」

阿九斗は丸まったピーターハウゼンの横腹のあたりに、すっぽりと埋まるようにして転がっている物体を見つけ、そちらに向かって顎を振った。

黒光りする鱗の間から、真っ赤な毛がまとまって何房か突き出している。それが一定のリズムで揺らいでいた。人間の寝息のリズムだ。ピーターハウゼンの身体を枕に、曽我けーなが昼寝を決め込んでいるのである。普段から緊張感のない顔は、安心しきってさらにゆるんでいる。起きていてさえ見ていると眠くなってくるような顔立ちだ。そうしているとまさに催眠術としか言いようのない効果を生み出しているように感じられる。

「私に怖がらずに触れてくる人間は、この子が初めてだ。我が主といえど、私との関係には一定の緊張感を維持していたからな」

ピーターハウゼンが感心したように言った。

「彼女は特別すごい性格をしているからね」

阿九斗は肩をすくめた。けーなの顔を眺めていると、不思議な気分になってくる。けーなとは小さいときに出会っていたように思うのだが、けーな本人はどうも忘れているようだ。もしかしたら自分の記憶が間違っているのかもしれない。

そんな奇妙な感覚が、けーなを阿九斗にとって気になる存在にしていた。他の友人たちとは違う特別ななにかがあるようにも思える。

――いったいけーなは何者なのやら……。真面目に聞いてみようと思っても、彼女と話していると、いつの間にか別の方向に話がいっちゃうんだよなぁ……。

　阿九斗がそんなことを考えていると、不意に後ろから頭を殴られた。

「痛っ!」

「こら、嫌らしい目をしていたぞ。そんな女に色目を使っちゃ駄目だからね」

　棒読みのような言葉が後ろから響いてくる。振り返ると、ころねがやってきていた。どういうわけか別の学校の制服姿である。腰に手を当てて怒ったポーズをとっているが、顔が無表情のままなので、いささか何をしているのか判別がつきかねる。

「えーっと……？　何?」

　阿九斗が聞くと、ころねは首をかくん、とかしげた。

「わかりませんか？　彼女でもないのに嫉妬するクラスメイトというものをイメージしてみました。ぐっときませんか?」

「……別段」

「それは困ります。ともかく、けーなさんを嫌らしい目で見るのはやめてください」

「そもそもそんな目で見てないよ!」

　阿九斗は否定する。

「それならばいいのです。あまり仲良くされても困ります」

　ころねが阿九斗とけーなの間に割って入ってきた。それをピーターハウゼンが見ながら不思議そうに声をあげる。
「何をしているのかね？　監視員(かんしいん)の人造人間と魔王の会話とも思えないが」
　するところねが即座に答える。
「放っておいてください。こちらの問題です。というか、男女の問題です」
「だからそういう言い方はやめてくれって……」
　阿九斗が否定するように言ったが、ピーターハウゼンはにやにやと笑う。
「魔王たる者、女にはもてるものさ。うらやましい限りだ」
「それなら、ピーターハウゼンさん、けーなさんをもらってあげてください」
　ころねは言った。真顔で。
　ピーターハウゼンも真顔でうなずく。
「それはいい。私も気に入っていた。このベッドを作ってくれたのも彼女だしな。私と家庭を築こうということに違いない」
「何を馬鹿(ばか)なことを言ってるんだ、二人とも……！」
　阿九斗がそれを遮(さえぎ)って声をあげた。
　と、阿九斗が声をあげた瞬間(しゅんかん)に、ころねとピーターハウゼンが、彼に顔を向けて動きを止めた。ころねは無表情だが、ピーターハウゼンは軽く驚(おどろ)いた顔をしている。それで阿九斗は自分が思いがけず大きな声

をあげていたのではないか、と思った。
「……い、いや、けーなの意見も聞かずに勝手に何を言っているんだ、ってことだよ」
阿九斗はしどろもどろになって否定するように手を振る。
「君、冗談に決まっているじゃあないか」
ピーターハウゼンは困ったように言った。
阿九斗はばつが悪くなって笑う。
「そ、そりゃあ冗談だろうさ。不謹慎だと言っているんだよ。あはは……」
「その態度、つまり阿九斗さんはけーなさんが好きなのですか?」
ぬっ、と阿九斗の目の前に顔を突き出し、ころねが詰問するように言った。
「そ、それはどういう意味で聞いているんだい?」
阿九斗はひるむ。
「そのままの意味です。性的な関係を結んだ後に結婚したいとか、ひたすら淫行を繰り返す淫蕩な生活に突入したいとか」
「ばっ、馬鹿なことを言うもんじゃないって……」
「いいえ、はぐらかしてはいけません。実行するかどうかはともかく、本心を聞いているのです」
ころねが、ずい、と前に出る。
「な、なんで本心を言わなくちゃいけないのさ?」

「是非ともあなたの性的な嗜好を知りたいのです。そして私があなたの性に奉仕しようとしているからです」

「な…………！」

　さすがに阿九斗は絶句した。

――な、なんとかしないと……。

　全身から汗が噴き出てくるのを感じながら硬直していると、そこに救いの女神が現れた。

「なに……？　なんかうるさいよ？」

　寝ぼけた声をあげて、けーなが起きだしてきたのだ。

「あ、あーちゃんもころねちゃんも来てたんだね。だけど、騒いじゃ駄目だよ。ピーちゃんも寝てたんだから」

　けーなは笑顔でピーターハウゼンの頭を撫でた。

　どうやらピーターハウゼンを「ピーちゃん」と呼んでいるらしい。恐ろしい顔をしているピーターハウゼンにはそぐわない名だが、ピーターハウゼンは気に入っているらしい。おとなしく頭を撫でられているどころか、目まで細めている。言葉が通じるとはいえ、十五メートル級の獣である。いや、ピーターハウゼンの場合、言葉が通じる方が質が悪いかもしれない。彼の気性は荒く、誇り高い。言葉がわからない方がまだ恐ろしくないだろう。けーながどこか規格外の存在であることを阿九斗は嫌でも感じざるを得ない。

「あー、起こしてごめん。そうだ、臨海学校、僕も行くことになったから」

阿九斗が言うと、けーなは、ぱっ、と表情を明るくした。
「ホント？　良かった。あーちゃん行かないならあたしも行かないつもりだったんだ。でも行くんなら、一緒(いっしょ)に行けるね。楽しみだね」
けーなが笑う。
「あ、ああ……」
曖昧(あいまい)に阿九斗はうなずいた。いつもなら一緒に喜べたところだが、ころねにあんなことを言われた後では、その笑顔が奇妙にまぶしいものに感じられる。
「なにをデレデレしているのですか」
ころねが阿九斗の背中を肘(ひじ)で突いた。
「ちょ、ちょっと待ってくれ。昨日から何か変だよ、ころね」
阿九斗は振り向いてころねに問いただそうとしたが、ころねは即座に首を振った。
「いいえ、問題ありません。自分はいつもの職務遂行(すいこう)中です」
「…………」
そう言われては阿九斗も黙(だま)るしかないが、ころねが本格的におかしくなっているのが阿九斗には心配になってきた。
――いくらなんでも、そろそろおかしいぞ。何か妙(みょう)なことにならなければいいんだけれど……。

今回の臨海学校が段々と心配になってきた阿九斗だったが、さらに頭の痛いことがあるのを、けーなが指摘してきた。

「ねぇ、でも、あたしたちが行っちゃうと、しばらくピーちゃん独りになっちゃうよ」

「ああ、そうか」

それまで深く考えていなかったが、このまだわからぬところの多いピーターハウゼンと会話できるのは、阿九斗とけーなくらいしかいない。彼の気性を考えれば、阿九斗に義理立てできぬようなことはしないだろうが、例えば見知らぬ者が寝床に近づくようなことでもあれば、躊躇無くそいつを殺すだろうし、加えて周囲のモノを巻き込んだ大破壊くらいのことはやっても不思議ではない。

「少なくとも、ここに誰かがやってこないようにはしておかないと」

阿九斗は言った。

ここは一応、学院の地下であり、相当深い位置にあるものの、学院の校舎と繋がっている場所でもある。困難なことではあるが、歩いて地下迷宮を抜けてここまで来られないわけではない。

「大丈夫。あたしに良い考えがあるよ！」

と、自信満々にけーなが言った。

「本当に？」

「うん、大丈夫、任せて！」

けーなは胸をどんと叩いた。

阿九斗はその態度を見て、ピーターハウゼンのことはけーなに任せることにした。それに彼のことは、けーなの方がどうやら対処がうまいようだと思ったからだ。

しかし、後に判明した、けーなの言うその対処とやらは、至極単純なものだった。

江藤不二子に留守番を頼んだのである。

不二子は学院の先輩であり、確かに臨海学校には行かない。そして、先だっての事件以降、阿九斗に忠誠を誓うほどにベタ惚れしており、阿九斗の利益になるようなことならば、率先して行うようにしている。

それだけならば問題はないのだが、唯一の問題が、先だっての事件において、不二子がピーターハウゼンに殺されかけているということである。

「ひぃいいやぁあああ！」

不二子はピーターハウゼンの眼前で腰を抜かしていた。「阿九斗からのお願いがあるので来てください」との内容の手紙をけーなから受け取り、それに従って魔法陣を踏んでみたら黒龍の眼前に立っていたというわけだ。

「しばらく世話をしてくれる者を遣わすと聞いていたが、この間の小娘か」

ピーターハウゼンは不機嫌そうになった。けーなを気に入るような龍である。長い黒髪の美女である不二子はそもそもが好みのタイプではないらしい。

一方、不二子は生きた心地（ここち）がしていない。肉食の野生動物と一緒の檻（おり）に入れられる方がまだマシという状況（じょうきょう）はなかなか体験できるものではない。

「きゃあああ！　嫌ぁあああ！」

当然ながら不二子は腰を抜かしたまま足をばたばたさせて騒ぎまくった。が、ピーターハウゼンの一言で動きはぴたりと止まる。

「……うるさい女だ。騒ぐと殺すぞ」

「ひぃいい……わ、わかりましたわ……」

　不二子は腰を抜かしたままで後退をはじめた。

「じゃ、じゃあ、わたくしは、これで……」

「待て。誰が帰って良いと言った？」

「ひ！」

「私のせめてもの退屈（たいくつ）しのぎとなるように、阿九斗とけーながお前を遣（つか）わしたのだろう？」

　ピーターハウゼンにそう呼び止められ、不二子は極限まで硬直した作り笑いを浮（う）かべつつ、おずおずと切り出した。

「あ、あの……わたくしはそれを聞いていませんでしたが……。とはいえ、何をすればいいのでしょうかしら？」

「そうだな、けーなは私と一緒に昼寝（ひるね）をしてくれて、面白（おもしろ）い話をしてくれた。お前にもできるだろう？」

「は？」
不二子にとっては意外すぎる依頼だった。その不二子の間抜けな表情を気にもせず、ピーターハウゼンは続けた。
「だが、お前とは昼寝をしたくはないな。面白い話でもしてみせろ」
「は、はい……わかりましたわ」
つまり話し相手になれというだけのことらしいが、元々プライドが高く、お嬢様育ちの不二子であるから、今回のことが面白いはずはなかった。
――こ、この恨み……いつか晴らさせていただきますわ……。
不二子はピーターハウゼンから見えないように密かに秘蔵の『うらみ手帳』にメモをつけた。
「おい、どうした？」
「は、はい、ただいま！　……ええ、冬来たりなば春遠からじなんてことを言いますけれども、これの原典はなぜだか英語でして、これがどうして落語っぽく聞こえるかは少々謎が多いと言わざるを……」
「面白くないぞ」
「は、はい。今までのものは余談でして、夫婦生活の相談に来たハリネズミの男が……」
――こ、殺す……いつか絶対に殺してやりますわ……！
血の涙を隠す不二子であったが、ともかくも阿九斗達は明日、臨海学校へと出発することとなった。

2　海辺のアルバム

飛行バスの車内は緊張に満ちていた。大型のバスは阿九斗のクラス全員と美津子先生をちょうど全員乗せるだけの余裕があるが、それでも教室よりは狭い。つまり、そこで二、三人が妙な雰囲気になれば、中にいる誰もがそのことに気づかずにはいられないということになる。

この場合、妙な雰囲気の原因になっているのは、もちろん阿九斗とその周辺だった。

「だ、だから、そういうみだらなことはやめろと言っているのだ、私は！」

大声でそう騒いでいるのはクラス委員の服部絢子である。凛としたという形容が似合う美少女だが、今は顔を真っ赤にしてころねに文句を言っている。顔を赤くしているのは、怒っているというよりも恥ずかしがっているためであるのは、その照れを隠して必死に冷静でいようとしている表情からもよくわかる。

ころねは阿九斗の膝の上に乗っかるような格好でいる。向かい合わせに四人座れるボックス席なのだが、そこに座っているのは、阿九斗、ヒロシ、けーな、絢子、そして、ころねだ。一人多いのは、ころねが阿九斗の膝の上に座っているからだが、それをころね以外が歓迎するはずもない。ころねは映画の悪役の情婦よろしく阿九斗にしがみついていた。

ころねの今日の格好は水着である。しかも布面積小さめのビキニだ。しかもボトムは腰上の部分がほとんど紐で、下から股間の部分に絆創膏を貼りつけているかのように見える。人造人間に特有の尻尾の部

分が阿九斗の太ももをくすぐっていた。胸の部分は、やはりころねのスレンダーな体形のせいで三角形の小さな布をふたつ貼りつけているとしか見えない。

いきりたつ絢子にころねは毎度の冷静さで答える。

「嫉妬しているのですね。わかります。でも大丈夫です。あなたもこれを着ればいいのです。阿九斗さんはイチコロです」

ころねは水着をシートの脇においていたポシェットから取り出し、それを絢子の顔の前にかざした。それは一本の紐がY字形になっただけのもので、着ると裸同然と言うよりは裸になるであろうものである。

当然ながら絢子はさらに顔を真っ赤にして、錯乱した目をしながらがたりと立ち上がると、制服の腰に吊した短刀に手をかける。

「そんなものが着られるか！　そもそもなんでこいつを水着でイチコロにしないとならないんだ！　そうか、イチコロということはこいつを斬れということだな！　それならば、こいつが死ぬか私が死ぬかだ！いや、こいつを殺して私も死ぬ！」



なぜか絢子は阿九斗に斬りかかろうとする。完全にわけがわからなくなっている。

「そ、そういうことじゃないだろ！　服部さん、やめて、落ち着いて！　ほら、ころねが悪いんだから、ちゃんと謝って！」

阿九斗は絢子の短刀にかけた手を押さえつつ、ころねに目をやる。

ころねは無表情ながらも頭を下げた。

「すいませんでした。しかし、これは親切心からの行為です。あなたも水着を着て阿九斗さんの膝に座れば、あっという間に阿九斗さんもカチンコチンになるということでお勧めしたのですが」

これには阿九斗が慌てる。

「何を言ってるんだよ、僕がその程度でそんなことになるはずがない」

絢子もさらに錯乱して叫ぶ。

「な、なんというみだらなことを！」

しかし、ころねは平然としていた。

「緊張しているという意味です。何を誤解しましたか？」

「ちょっ……！」

阿九斗も絢子もこれには一瞬動きを止める。

そこにころねが追い打ちをかけるがごとくにこう続ける。

「想像しただけで錯乱なさるということは、絢子さんはまさに初々(ういうい)しい感じですね。しかし、ご安心ください。私と阿九斗さんがあなたを性的に開発しますから」

　バスの中の緊張がその一言で一気に高まる。クラスメイトたちがざわめく。

「水着の女を膝に乗せて硬(かた)くならず……」

「おまけに委員長をこれから二人で開発……」

「魔王(まおう)とはいえ、とどまるところを知らないな……」

「今回の臨海学校は性的に荒(あ)れそうな予感が……」

　これにはさすがに阿九斗もなんとかしなければ、と思う。立ち上がってクラスメイトたちに向かって声をあげようとしたが、慌てていたせいでころねが膝の上に乗っているのを忘れていた。膝からずり落ちそうになったころねが阿九斗にしがみつく。阿九斗も反射的にころねの身体を抱(だ)きかかえていた。そのせいでころねの水着の紐がほどけ、ころねと阿九斗の身体の間に挟(はさ)まれてかろうじてぶら下がっているかたちになってしまった小さな布きれは、大事な部分をぎりぎり隠す役にしか立たなくなった。

　立ち上がってみれば、全裸(ぜんら)よりも扇情的(せんじょうてき)と言える姿のころねを周囲に見せびらかす結果になっていただけだった。それでも阿九斗はかろうじて声をあげる。

「みんな、静かにして欲(ほ)しい。これはそもそも大したことじゃない。いつものちょっとした騒(さわ)ぎさ。委員長だって本当はどうとも思っていないだろうし」

阿九斗はそれだけ言うところねの水着を直させるために再度椅子に座ったが、絢子の表情とさらにざわついた周囲の声を聞いて、自分が何を言ったかに気づいた。

「そうか、日常的にアレなことをしているんだから大したことじゃないわけだ……」

「委員長も嫉妬しているだけなんだな。公開プレイか……」

阿九斗はもはや何を言っていいかわからずに黙り込む。

——しまった……。せっかく楽しい臨海学校だというのに……。ああ、僕はどうしてこうも間抜けなことをしてしまうのか……。

絢子の顔を確認すると、彼女は顔をそむけて窓の外を見たまま微動だにしていない。

ちらりと横のヒロシを見る。こういう時に助けてくれると思ってのことではない。逆にこういう時に騒ぎ立てるのがヒロシだったが、今日は妙に静かなので気になったのだ。

ヒロシは考え込んでいるような顔で阿九斗の方を見てもいなかった。

——やっぱり、あの伝説のことは気になっているわけか。どんな臨海学校になることやら……。

唯一、暗い顔をしていないのは、けーなくらいのものだった。

「あーちゃん、あんまり女の子いじめちゃ駄目だからね」

などと今までの事態の意味がわかっているのかいないのかわからないようなことを言いながら、お菓子を阿九斗に勧めてくる。

「このおせんべいは、特にお米を厳選して、一枚一枚手焼きで仕上げたものなんだよ」

「そりゃすごい」
阿九斗はせんべいに興味はなかったが、他(ほか)の三人とはまともに会話になりそうもないので、けーなのせんべいを受け取って食べようとした。
と、口に入れようとしたせんべいを横合いからころねが奪(うば)い取(と)った。それをひょいと自分の口に入れ、バリバリとやりはじめる。
――い、いったいどういうつもりなのだろう……？
阿九斗は、このころねの奇行(きこう)に、さらに深い謎を感じずにはいられなかった。
しかし、やがて、この苦痛の空間から脱出(だっしゅつ)できる時がやってきた。
「島が見えたぞ」
誰かが声をあげた。
阿九斗も反射的に窓の外を見る。
コバルト色の海の中央に、やや緑がかった大きな輪が浮かんでいる。珊瑚礁(さんごしょう)だ。その中央には白い砂浜(すなはま)を周囲に持つ小さな島がある。南海の楽園を絵に描(か)いたような光景だ。
「綺麗(きれい)ね」
先ほどまでの不機嫌(ふきげん)を忘れたのか、絢子がつぶやく。
「本当に綺麗だ」

阿九斗も本心からそう言った。元々が苦労続きの生い立ちである。生で南の島を見る機会はなかったのだから感慨深いものがあった。

ところが、それを聞いたヒロシが、窓の外を見もしないで、つまらなそうな声をあげる。

「百年ちょっと前の地殻変動で出来た島っす。珊瑚も林も移植っすよ。どこも計画通りに作られた下らないものっす」

そう言われてしまうと、妙に白けた空気が流れる。

「そういう言い方はないだろう」

阿九斗が怒っているように聞こえないように慎重に声を小さくして言うと、ヒロシははっとしたように首を振った。

「すんません。そんなつもりで言ったんじゃないんですよ」

ヒロシはそう素直に謝ったが、逆に阿九斗としてもそれ以上話しづらくなってしまう。

それでも静まったのは阿九斗のいるボックス席だけで、他のクラスメイトたちは期待感に大いに騒いでいる。

やがて飛行バスは島の砂浜に滑り込んだ。ドアが開いて美津子先生が指示を出すやいなや、クラスメイトたちは先を争うように砂浜に出て行く。

阿九斗は一番最後に砂浜に降り立った。明るい陽光による強いコントラストの光景が目に飛び込んでくる。椰子の木の影が落ちる砂浜に静かに打ち寄せる波。上空から見たのと違い、降り立ってみると普段

とは異なる場所に来たのだという実感がわいてくる。
――人工だろうがなんだろうが良い場所じゃないか。
そう思ってヒロシの方を見るが、やはり彼は暗い顔をしていた。阿九斗としては、不快になると言うよりは、光景を一緒に喜べないことが残念になる。けーなはもちろんはしゃぎ回っていたし、絢子も笑顔になっているというのに、ヒロシだけが気持ちを共有できないのは悲しいことだった。
「なぁ……」
ヒロシに声をかけようとしたが、その時、ふと悪意のある視線を感じたように思った。
反射的にそちらに目をやる。砂浜の奥、林になっている部分から視線を感じたように思ったが、そちらに目をこらしても誰かがいるようには思えなかった。
――気のせいかな……。僕たち歓迎されていないなんてことないよな……。臨海学校なんて毎年のことなんだろうし……。
そんなことを考えていると、美津子先生から集合の声がかかった。
「宿舎に移動しますよ。諸注意とかあるからちゃんと聞いてね！」
結局、ヒロシにも話しかけそびれてしまった。阿九斗たちはその声で美津子先生について移動をはじめる。
砂浜から延びる小道は、三階建ての小さな建物に向かっていた。旅館のような作りの外見だが、『コンスタン魔術学院宿舎』の文字があり、そこが臨海学校やサークルの合宿用施設だとわかる。小道を歩い

ているとき、阿九斗は脇の方を見ていたのだが、少し離れたところに瓦葺きの屋根のある家がいくつか見えた。どうやらそちらに村があるらしい。

――あれがヒロシの故郷なのかな。

阿九斗はそう思ったが、ヒロシには直接聞きにくかった。なにより、住居があるわりにはまるっきり人気が無く、上空から見たときも誰もそこにいなかったということも、さらに聞きにくさを増す原因になっている。

宿舎に入ると、美津子先生が阿九斗を呼びつけた。阿九斗が不思議に思いながらもついていくと、阿九斗だけに独り部屋が用意されていた。

「他の皆は大部屋だったと思いますが」

阿九斗が文句を言うと、美津子先生は「しかたないじゃない」と笑う。

「まぁ、来れただけいいじゃないの。それにあなただけ女の子連れ込めるわよ。頑張りなさいな」

「何を頑張れって言うんですか……」

阿九斗はぼやいたが、そういえば美津子先生ならヒロシのことを知っているのではないかと思った。

「そういえば先生、ヒロシの故郷がここだって話でしたけど……」

すると美津子先生は、なにやら含みのある表情になった。

「そうよ。まぁ、だけど、本人はあんまり好きじゃないみたいね。よくある若者らしい反感っていうのかしらねぇ」

「僕には故郷を嫌(きら)うという感覚はよくわかりませんが」
「そりゃ、あなたは故郷というものがないからねぇ。でも、向こうからすればあなたの気持ちがわからないんだから、まぁ、その辺、気を遣(つか)いなさいな」
　美津子先生はそう言って笑った。
「そんなものですか」
　阿九斗は、そうは言ったが、本当のところは美津子先生が何を言っているのかよくわからなかった。
「ま、せっかく来たんだから、いろんなことを気にせずに遊んできなさいな」
　美津子先生がウィンクをしながら言った。

○

　生徒は一クラスで三十人程度。クラスはF組まで。一学年で百八十人が島に来ていることになる。それだけの人数が来ているわけだが、ビーチは十分に広く、生徒達(たち)は思い思いの場所で楽しんでいる。
　阿九斗も皆からは少し離れた岩場の陰(かげ)にシートを敷(し)いて、その上に座(すわ)り込んでいた。横にはけーながいて、パラソルの下で寝(ね)ころんでいる。
　けーなはセパレートの水着姿で、うつぶせになって楽しそうに足をばたばたさせている。
「なんか、こうしているだけでも楽しいね」

けーなは阿九斗に微笑みかける。

阿九斗はどういう顔をしていいかわからずに困った。けーなが姿を消す魔法を使っているときは裸にならなければならないため、どちらかと言えばけーなの裸を見慣れている阿九斗だったが、こうして近くて身体のラインが出る格好で微笑みかけられると、どうしても視線をどこにやっていいか困る。曖昧な顔をしていると、けーなが水着姿の阿九斗のむき出しの膝をくすぐる。

「うわっ」

「こら、楽しそうな顔しなきゃ駄目なんだからね。それとも、あたしの水着姿に見とれちゃったとかそういうこと?」

ふふふ、とけーなが笑う。ころねでそういう冗談は聞き飽きていたが、けーなが言うと、またニュアンスが違って照れてしまう。

「そういうことを言うには顔も身体も子供っぽいよ」

阿九斗が少し格好をつけて言うと、けーなが頬を膨らませた。

「いーもーん、顔も身体も成長の余地があるんだから」

「精神も成長してもらわないと困る」

笑いながら阿九斗が言うと、けーなも笑う。

「いいの?　成長したら、あーちゃんなんか手玉に取っちゃうよ」

いたずらっぽい言い方だったが、阿九斗はどういうわけかどきりとした。どうも、他の誰がそう口にするよりも真実らしい気がしたからだ。

――やっぱり、けーなは他の子と違う気がするな……。

そんなことを考えていると、突然、後ろから何かがのしかかってきた。

「な、なんだ？」

素肌が触れあう感覚に驚いて振り返る。ころねが背中におぶさるようにしていた。

「サンオイルを塗ってくれませんか？」

「は？」

あまりに唐突なことを言われたので、阿九斗は聞き返した。

ころねは水着を替えていた。どういうわけか中等部で使うスクール水着である。ころねの体形にはすごく似合っていたが、この場では違和感がある。しかも胸の位置には、『ころね』とネームまで入っている。

阿九斗が戸惑っていると、ころねはけーなとの間に割って入って寝転がる。

「サンオイルを塗ってくれませんか？」

ころねは繰り返すと、肩から外したポシェットからサンオイルを取り出し、阿九斗に手渡した。

「……人造人間は日焼けするのかい？」

「よくパッケージを見てください」

その言葉に手渡されたサンオイルのパッケージを見てみると、《人造人間用サンオイル。激しい太陽光によるコーティング剥離を防ぎ、海に入っても塩分がボディに残らない！》とある。
「車のワックスみたいだな……。いや、それ以前に、君のその水着だと塗れないように思うんだけど……」
阿九斗が言うと、ころねは大丈夫だと請け合った。
「水着を着ている部分の肌にも塗る必要があるんですが、水着に手を突っ込んでくれれば大丈夫ですよ。ほら、この水着、ここの部分が開くんです。手を入れやすいでしょう？」
ころねは仰向けに寝転がり、下腹部の布をつまんで持ち上げた。確かに水着の前の部分が開き、その下から白磁のように美しい肌がちらりと覗いた。
「いや、ちょっと待ってよ。そ、そんな、手なんて入れるわけにいかないだろうに」
阿九斗は当然ながら断る。けーなの顔を見てみると、珍しく不機嫌そうな顔をしていた。
――そうだよな、やっぱりころねの様子が変なのは気づいているよな。
戸惑っていると、いきなりころねがその身体を起こした。そして水着の肩をずらして水着を腰まで降ろした。
「うわっ、と！」
阿九斗は一瞬だがころねの胸を見てしまう。慌てて目をそらしたが、ころねは身体を隠そうともしない。

「裸ごときにひるむなんて可愛(かわい)いですね。塗りやすいように脱(ぬ)いでみました。さぁ、この胸を触(さわ)ってください」

　ころねは阿九斗の手を握(にぎ)って、自らの胸に導こうとする。

「ちょ、ちょっと……」

　阿九斗は抵抗(ていこう)した。それでもころねを突(つ)き飛(と)ばしたり乱暴なことはできないので、目をそらして腕(うで)を硬直(こうちょく)させることしかできない。

「ちょ、ちょ……」

　阿九斗は困り果てたが、その瞬間、今回ばかりは幸いなことに、激しく後頭部を殴打(おうだ)された。

「な、何をしている、この変態！」

　阿九斗が振(ふ)り返ると、顔を赤くして拳(こぶし)を握りしめているのは絢子だった。競泳用とも思えるあまり飾(かざ)り気のないワンピースの水着姿だ。

「あ、ありがとう。今度ばかりは助かった」

　阿九斗はころねから離れる。

「な、何がありがとう……だ？」

　絢子は、その阿九斗の妙(みょう)な反応に戸惑ったようだったが、ともかくころねの前にかがみ込んでころねに水着を着せる。ころねはおとなしく着せられていた。

「まったく、一体、けーなが見てる前で何を……。いや、そうだ。三輪(みわ)が里帰りをしていることを伝えに来たんだった」

水着を着せ終わった絢子が立ち上がり、阿九斗に言った。

「そうか、だから見なかったのか。様子がおかしかったけど、大丈夫かな」

「美津子先生が気を遣っていたな。だから伝えてくれと言われたのだろう。さて、それでは私はこれで……」

絢子はその場を離れようとする。阿九斗はその絢子の腕を掴(つか)んで止めた。

「待って。一緒(いっしょ)に泳がないか」

ころねからひとまず逃(に)げておきたかったし、バスでのことを謝(あやま)るにはいいタイミングだ、と阿九斗は思っていた。

「え……」

絢子は一瞬だけ顔をほころばせたが、すぐに顔を引き締(し)め、顔をそらした。

「貴様が誘(さそ)えた義理か。大体が女たらしみたいな行動をしていて、それで都合の良いときだけ遊んでもらおうなどと……」

「バスでのことを怒(おこ)っているんだったら、もちろん僕が悪かったよ。ころねが妙なことを言っているんだと言い訳もしたいけれど、やっぱり僕も普段(ふだん)から身を慎(つつし)んでいないとね。反省している」

阿九斗は素直に頭を下げた。
と、絢子は笑みがこぼれるのをこらえきれないといった表情になる。
「し、仕方ない。反省しているのなら、多少はつきあってやらんこともない。三輪もいなくて友達のいない貴様は寂しかろう」
「ありがとう。僕は本当にまともに遊んだことってないんだ。こういうときにどうしたらいいのか教えてくれると嬉しい」
真顔で阿九斗は言った。その態度のせいで、絢子は阿九斗が本気でそんなことを言っているのだということに気づいたらしかった。思わず吹き出してまじまじと阿九斗の顔を見つめる。
「君はまったくどういう性格をしているんだ？　素直に楽しめばいいだけだ。って、何を言わせる。私だってそれほどはしゃぐのは得意じゃない」
絢子は、それまでのやり取りを面白そうに見ていたけーなの手を掴んで立たせる。
「君も来い。ここまで来て海に浸からないわけにもいくまい」
「うん」
けーなは元気よくうなずいた。けーなは歩き出す前にころねの方を気にしたが、ころねはどうやら三人を見送ることに決めたらしい。シートの上に座り込んで動かなかった。
波打ち際まで来た三人だったが、波が足を洗うあたりで立ち止まり、誰が先に海に入るか牽制しあっているような格好になった。

「最初に海に入るのって」
「なんか思い切りがいるんだよねぇ」
　絢子とけーなが笑い合う。
「濡(ぬ)れるのに心理的な抵抗があるのかな」
　そう納得(なっとく)しつつも、阿九斗が先に海に入る。腰まで入ったあたりで振り返ると、絢子とけーなはまだ波打ち際に立ったままだった。
「どうしたの？　来ないのかい？」
　阿九斗が聞くと、けーなの笑い声が返ってきた。
「あーちゃん、これ、くすぐったくて面白いよ！」
　けーなは足下(あしもと)を指さしている。
「砂が波で持っていかれるんだが、足の裏の下の砂がずれる感覚が……」
　絢子もそう言って足をもぞもぞさせている。
　それを見て阿九斗は笑う。
「服部さんがそんな風にしているのって、なんか意外だな」
「ば、馬鹿(ばか)、何を言うか。はしゃいでいるわけではない！」
　絢子は首を横に振り、大股(おおまた)にざぶざぶと海に入っていく。
「あー、絢子ちゃん、待ってよー」

けーなもそれに続いて海に入ってきた。
「大体、貴様もその仏頂面で〝一緒に泳がないか〟なんて……」
絢子は阿九斗に近寄ってくると、海水を両手ですくい上げて阿九斗の顔にはじきかける。
「……十分にはしゃいでいるぞ！」
「うわっ！」
阿九斗は濡れていなかった顔に水を浴び、顔を振って飛沫を飛ばす。
「確かに、僕は水の掛け合いなんて子供っぽいこと、子供のときだってやったことがなかった……よっ！」
阿九斗も水をかけ返す。絢子も頭から水をかぶってずぶぬれになった。
二人は顔を見あわせて笑う。
「あー、楽しそうでずるい！」
けーなが阿九斗と絢子にとびかかり、海の中に二人を倒れ込ませる。
「うわっ！」
悲鳴をあげながらも、阿九斗はこれまでにない充実感を胸に抱いていた。
——これまでこんな風に普通の学園生活ができるなんて考えたこともなかったな……。不慮の事故やらなんやらで死ななくて良かった……。
「貴様、何をにやにやしている、嫌らしい！」

絢子が冗談めかして言い、海に浮(う)かぶに任せていた阿九斗の身体を押さえつけて海に沈(しず)める。絢子がそんな風に言う時には、本気のパンチやらなにやらが飛んできたものだが、今は珍しく手にこもる力が優(やさ)しい。阿九斗も適当に抵抗しつつ、タイミングを見計らって逆に海に潜(もぐ)り、絢子の足をひょいとすくい上げる。絢子も悲鳴を上げてから海に沈んだ。

そうしてじゃれあっていると、横合いからけーなが「ねぇ、ねぇ」と声をかけてきた。

阿九斗と絢子は動きを止めてそちらを見た。

「ねぇ、これなに？　海の底にいっぱい落ちてるんだよ！」

けーなは笑顔(えがお)で手に持ったものを二人に向かって突き出してきた。

焦(こ)げ茶色(ちゃいろ)で円筒形(えんとうけい)。手で握るのにちょうどいいサイズ。表面がぬめっていて、よく見るとニシキヘビのような紋様(もんよう)が全体に散らばっている。

「これはジャノメナマコじゃないかな。図鑑(ずかん)とかでは見たことあるな」

阿九斗はそう言ってうなずいた。

「そうか、これがナマコなんだ！　ぬるぬるこりこりして面白い感触(かんしょく)だよ！」

けーなは無邪気(むじゃき)に笑って、円筒形のそれを手の中で上下にしごくように弄(もてあそ)びはじめた。

「そ、そんな風に遊ぶのはどうかと思うんだけど……ねぇ？」

阿九斗が苦笑いを浮かべながら絢子の方を見ると、絢子はけーなが手に持ったナマコに怯(おび)えているように後ずさっていた。

「そ、それを近づけるなよ」
「服部さん、そういうの苦手なの？」
阿九斗が聞くと、絢子は阿九斗の方を見もしないでうなずく。
「そ、そうだ。大体が私はカエルとかぬるぬるしたものは苦手なんだ」
絢子の視線はけーなが持っているナマコに釘付けのままだ。けーなが、まさかそれを放り投げたりはしないかと不安なのだろう。それを察した阿九斗は、けーなに注意する。
「ほら、服部さん、苦手だって言ってるんだから、あんまり突き出しちゃだめだよ」
けーなは素直にうなずいた。
「うん、わかった！」
しかし、その瞬間、けーなの手に力が入ったらしい。ナマコの身体の先端部から、びゅるり、と白いものが飛び出してくる。線状にまとまった粘液のように見える。
――あ、そういえば、ナマコは簡単に内臓が飛び出すって聞いたことがあるけど、これか……。
阿九斗はそう感心したが、内臓の飛んだ先を見て、そんなことを考えている場合じゃないと覚った。
白いねばついたものは絢子の顔にべとりと貼りついた。
「ひぃいい！　きゃああ！」
絢子は悲鳴をあげ、じゃれていたときとは違う忍者の跳躍力で海から一気に空中に跳び出すと、あっという間に砂浜に駆け戻っていく。

「ああ、もう、駄目じゃないか」
阿九斗はけーなに注意する。
「ごめーん」
けーなは素直に詫びたが、ナマコをどうしたものかわからずに手の中でぐにぐにとやっている。
「ちょっと追いかけてくる」
阿九斗はそう言ってから自分も砂浜にあがった。
足跡を追って絢子を追いかける。それほど時間はかからなかった。岩場の陰で絢子は顔から貼りついた白いものを落とそうと躍起になっていた。
「服部さん、大丈夫？」
阿九斗が歩み寄ると、絢子が泣き顔で阿九斗に駆け寄ってきた。
「お、落としてくれ、ねばねばするんだ、これ！」
絢子に抱きつかれ、阿九斗は間近で彼女の顔を見た。どちらかといえば鋭い印象のある顔立ちなのだが、今はショックと白いねばつくものでぐちゃぐちゃになっている。
「わ、わかった。動かないで」
阿九斗は絢子の顔に慎重に指を這わせた。どうやら貼りついているのは白い繊維状のものだ。指で端から丹念につまむと少しずつだが剥がせる。

「特に毒とかはないはずだから大丈夫だよ。うん、顔も腫れていないし」
阿九斗は安心させるように言った。
「ほ、本当か？　とにかく早くとってくれ」
絢子は我を忘れているのか、阿九斗に必死にしがみついている。そのせいで手が動かしにくいことが気になった阿九斗は、空いている手で絢子の腕に触れた。
「ねぇ、怖いのはわかったから、もう少し離れて」
するとと、絢子はみるみる顔を真っ赤にして、ゆっくりと腕を阿九斗の身体から離した。
「ば、馬鹿な誤解をするんじゃないぞ」
「わかってるさ。怖かっただけだろ」
「そ、そういうことでもない！　馬鹿！　怖くても貴様に頼るか」
「それもわかってるさ。だけど、少し安心した。今日の海で遊んでる時の印象が、最初に逢ったときの服部さんの印象だったんだよ。学校ではどうもちゃんとしすぎていて気になってた」
阿九斗はふと思ったことを口にした。すると、絢子はもじもじと足踏みをはじめ、阿九斗に非難するような目を向けた。
「なんでそんなことを言う……。は、恥ずかしくてここに居づらいじゃないか。そ、そんな顔を見せたのは、君にだけだ。そもそも君が妙なことばかりするから、私も気が抜けんのだ」
「僕はいつも変わらないことをしているつもりなんだけどなぁ。周囲が妙なことになってるだけで」

「ならば貴様が最初から妙なのだ」

「それじゃあ、僕はどうにもできないな……っと、ほら、とれた」

阿九斗は指からナマコの内臓の最後の一本をはじき飛ばした。

絢子はなぜか残念そうな顔をして、さっきまで離れようとしていたのに、その場で立ちつくして、阿九斗を見上げた。

「どうしたの？」

阿九斗が聞くと、絢子はまずいところを見られたかのように首を振（ふ）った。

「い、いや……礼を言っていない、な……と」

「感謝されるようなことはないさ。そもそも、けーながやったことだし」

「け、けーながやったことは貴様の責任じゃないだろう？」

「そりゃそうだけど、なんか僕が監督（かんとく）してるような気がしてくるんだよね。けーなのことはさ」

阿九斗は笑う。と、絢子が思いがけず、真剣（しんけん）な顔をした。



「け、けーなのことは名前で呼ぶよな、君は。だ、だったら、友達の私のことは、どうして名前で呼ばない？」

絢子はそう言い終わると、顔を伏せた。

「そ、そりゃあ、なんか、服部さんはちゃんとしてて、だから、そんな感じで……」

阿九斗は困惑と胸にこみ上げてくる熱いものでしどろもどろになってしまう。

——でも、僕の前でだけ、素直な服部さんを見せてくれるのなら、それは確かに相応の呼び方があるような気もするし、それが礼儀だろうな……。

「絢子……さん」

いくぶんかの気恥ずかしさとともにそう口にすると、絢子は顔をあげて口をもごもごさせた。

「あ、阿九……」

そう絢子が口にした瞬間のことだった。あまりに唐突で阿九斗にも何が起こったのかわからないほどだった。まして絢子にとっては、なおのこと唐突だっただろう。

いつの間にか絢子の後ろには、ころねが忍び寄っていた。そして、いつもの無表情のままで、絢子の水着の肩に手をかけると、それをいきなり腹の辺りまでぺろりと引きずり降ろしたのだった。

「え？」

「は？」

阿九斗も絢子も言葉を失う。しばらく動くことができなかった。そのせいで、絢子の無防備な裸体の上半身が、たっぷり三秒間ほど阿九斗の目の前にさらされた。
「あ……」
「ひ……」
ようやく絢子が状況を把握した。
「ひぃいいやぁああああ！」
絢子は叫び声をあげてうずくまった。
「ちょ、ちょっと、何をしているんだよ、ころね！」
阿九斗はころねに言ったが、ころねは平然としている。
「雰囲気作りに協力しようかと思いまして」
「嘘をつくなよ。どうしてそんな嫌がらせをするのさ」
阿九斗は非難するが、ころねはまだよくわかっていないようだった。さすがに阿九斗も腹を立てる。
「監視員だからって、そんなことしていいわけないだろ？　そもそも監視員なら、僕の周囲の人には迷惑をかけないでくれよ。君はクラスメイトじゃないんだから、彼女に迷惑をかけていいはずがないだろ？」
「それは確かにそうです。私はクラスメイトではありません。あなたとも監視員と監視対象の関係です」
ころねは淡々と言った。その調子は、いつもの淡々さとは微妙に違っていた。
——あれ？

その異常は阿九斗にも知れた。いつものころねのそれと違い、確かに感情のこもった淡々さだったのだ。

「私があなたに干渉しようとしたのがまずかったのかもしれません。しかし、私はそういうことがうまくできないだけで、傷つけるつもりはありませんでした」

ころねはつぶやくようにそう漏らす。

「ちょ、ちょっと……」

阿九斗はこの異変に慌てる。が、ころねは相変わらず淡々と、しかしどこか寂しそうに続けた。

「気にしないでください。私のせいです。ただ、忘れないで欲しいのは、私はあなたのそばにいたいと考えています」

「え？　え？」

阿九斗がいきなりのことに戸惑っていると、そのままころねは振り返って歩き出してしまった。

さすがに絢子もころねの様子に戸惑い、水着を直すと毒気を抜かれた様子でころねを見送った。

「こ、ころねはどうしたんだ？」

「僕にもわからないけど……」

「だ、だが、あの様子は尋常じゃないぞ。そもそも最後の言葉なんて、まさか、ころねが君のことを……」

絢子が慌てたように言うと、その言葉にかぶさるように大きな声が聞こえてきた。

「あーちゃん！　変だよ！　ナマコがいっぱいいるよ！」

けーなが海からざばざばと音を立てて上がってきた。

ナマコ、という単語に絢子がびくりとする。

「うわ、けーな、ナマコは持ってくるんじゃないぞ！」

阿九斗は言ったが、けーなの返事はなかった。

それからすぐに先ほどとは別の色のナマコが岩の向こうから飛んできた。絢子が悲鳴をあげ、阿九斗はそれをなだめながらナマコをたたき落とすのに必死にならなくてはならなかった。結局、さっきまでのこともうやむやになってしまう。後になって何でそんなことをしたのか、とけーなに聞いたところ、

「さっきとは色の違(ちが)うナマコだから絢子ちゃんも大丈夫だと思った！」

と元気に答えた。

○

クラスメイトたちが海で遊んでいる間、ヒロシは里帰りをしていた。

学院の宿舎脇(わき)の小道をまっすぐ行くと村に入る。瓦葺(かわらぶ)きの屋根が特徴(とくちょう)の小さく背の低い家がいくつか並んでいて、集落というまとまりはないが、家々を繋(つな)ぐ道はよく手がかけられていて、住民が自分たちの土地を愛していることが伝わってくる。

奇妙(きみょう)なのは人気がまったくないことだったが、ヒロシは事情の想像がついていたので、ずんずんと自宅に進んでいく。

――だから嫌(いや)なんだ。まったく、魔王(まおう)に怯(おび)えて出てこないなんて……。
ヒロシは苦々しく思いながら、自宅の扉(とびら)を開けようとする。鍵(かぎ)がかかっていて、ヒロシはいらつく。普段(ふだん)は鍵をかける習慣などない村なのだ。

「母さん、帰ったよ」

声をかけてようやく内側から鍵が開けられた。

「お帰り。疲(つか)れたろう」

出てきた母は明るい声でヒロシを迎(むか)え入れた。さすがにヒロシも不機嫌(ふきげん)でばかりはいられなかった。

「ただいま、母さん」

嫌がってはいたものの、やはり家は家だ、とヒロシは思う。玄関(げんかん)をくぐっただけで、やはりくつろいだ気分になる。

家の中から、父と妹も出てきた。しかし、どういうわけか、母も父もそのまま玄関で靴(くつ)を履(は)く。

「どうしたの？　出かけるの？」

「お前も行くんだよ。公民館に一席もうけてある」

自明のことを聞くな、というように父が言った。

「ちょ、ちょっと。お茶ぐらい飲ませてよ」

「一席もうけてあると言っただろう。それに玄関を開けたままにしておけない。急げよ」

父はさっさと先に立って行ってしまう。

母もそれを仕方なく思っているのか、ヒロシに苦笑いを見せる。
「ホント、ああいうところ直らないよねぇ」
ヒロシはそれに答えなかったが、それでも回れ右して父に続く。と、妹のユキコにズボンを引っ張られた。
年が少しだけ離れていて、まだ十一歳だ。
「おかえり、お兄ちゃん」
「ああ、ただいま」
「みんなお兄ちゃんが帰ってくるって聞いて、かんげいの準備をしてたんだよ」
「そうか、すごいな」
適当に応じたが、ヒロシは気が重かった。村には若い人がいないから、歓迎といっても、村人ら本人のための歓迎に決まっている。案の定、公民館に入ると、すっかりできあがった老人達が赤ら顔を一斉にこちらに向ける。
「おお、未来の英雄が帰ってきたか」
「君がいれば村も安泰だ」
ふざけた声を老人たちはあげる。天井からは垂れ幕がかかっていた。
《歓迎、未来の司祭》とある。
ヒロシは不快感を顔に出さないようにするのが精一杯だった。料理と飲み物を出されたが味はほとんどわからなかった。適当に愛想笑いをしながら世間話をしたが、しばらくすると皆はヒロシに興味がなく

なったかのように他愛もない雑談に興じるようになった。
　——結局、僕が司祭になるかもしれないからいい顔してるだけなんだよな。
　ヒロシの考えもそれほどいじけたものでもない。老人たちの態度はあからさまだった。将来、村のために何か得になることをしてくれという冗談めかした言葉は『コンスタン魔術学院』に入学が決まったときから何度もかけられていたし、密かに「生活が苦しいので事業を斡旋してくれ」と頼んでくる者までいた。そういう嫌な部分を見せられるのは、ヒロシの性格からしても気持ちのいいものではない。
　宴会が終わりそうもないので、ヒロシは学校の都合だと言って途中退席させてもらうことにした。結局、家で落ち着くことはできそうもなかった。両親はつきあいがあるのか、ヒロシを見送ることはしなかった。ただ妹のユキコだけがついてきた。
「ねぇ、学校に魔王がいるって、ホント？」
　公民館を出てすぐにユキコが聞く。
「みんなが考えているような魔王はいないよ」
　ヒロシは否定した。
「みんな怖がってるんだよ。なんだか、言い伝えがあるんだって」
「嘘だよ、そういうのは」
　ヒロシはユキコと話すために座れるところを探そうと公民館の裏手に回った。壁際に煉瓦が積まれた花壇があり、そこがちょうどよかった。ユキコと並んで座る。

「だけど、実際に夜になにか変な音が聞こえてきて、通りを変な人が歩いていたり、遠くでオバケの声が聞こえたりするんだよ」

　ユキコが真面目（まじめ）な顔で言う。嘘だとも思わなかったが、子供のときはそういうことを考えるものだ、とヒロシは判断する。

「怖がってるからそう聞こえるんだよ」

「じゃあ、本当に魔王っていないの？　もうあたしはオバケとか怖がる歳じゃないけど、大人はみんな魔王が本当にいるって……」

「いや、魔王って言われている人はいるよ」

　どうやらユキコの言いようだと、本当に阿九斗の噂（うわさ）はひろく伝わっているらしい。いないという形での否定は難しいようだった。

「だけど、みんなが怖がっているような魔王じゃないってことだよ」

「どういうこと？」

「怖くない人だよ。兄ちゃんの友達（ともだち）だよ」

「そうなの？　お兄ちゃん、すごい！」

　ユキコが尊敬の眼差（まなざ）しでヒロシを見る。

「だから、怖くないだろ？」

「うん！」

ユキコはうなずいた。

その時、ヒロシたちの背後で声がした。後ろは公民館の壁だ。どうやら背後が喫煙所になっていて、タバコを吸いに来た村人がいたらしい。

「やっぱり三輪んとこの息子は青びょうたんだな」

「だな。あの様子じゃ学校の成績だって大したことあんめぇよ。魔術ってのは気合いだからなぁ」

声は外にいるヒロシには筒抜けになっているが、彼らは気づいていないらしい。このままだと都合が悪い話になるに決まっていたが、動けば気づかれてしまいそうだった。

「しかし、司祭になってもらわないと、村の将来は暗いからな」

「司祭が一人でもいると、補助金が違うって話だからな。まぁ、司祭なら学院の卒業生ってなれるんじゃねぇのか？　大司祭とかは別として」

「ただ学院にゃ魔王がいるってもっぱらの噂だが」

「ああ、ホントらしいな。学院でも暴れて大変らしい。すでに学院は牛耳られているとか。俺も島の伝説は信じちゃいないが、魔王ってのが、魔術が強くて反乱を起こすようなヤツってことなら実在もするだろうさ」

「実際、学院の奴らは気性が荒いのが普通だからな。騎士団を壊滅させたのが生徒会長やってるって話だ」

「村に入られたらたまらねぇな。そりゃ勇者でも出てこなきゃ話にならねぇ」

「魔獣とか勇者ってのが嘘だろうが。でも、三輪のところは自分のところの息子が勇者だって信じてたな、あははは」

「ふひひひ、ありえねぇ。昔から筋金入りの臆病者じゃねぇか。ここの育ちで泳げなかったのはあいつだけだ。何かっていやぁ泣いて、おどかしたら小便まで漏らして」

そんな笑い声を聞いていると、ヒロシは腹の中に重い物を埋め込まれたように感じられた。怒りとも情けなさともつかないものが顔を歪ませ、内側から涙を押しだそうとしてくるが、妹が見ている手前、こらえなくてはならない。

背後の二人がタバコを吸い終わってその場を去ったのを確認してから、ヒロシはユキコを連れて立ち上がった。

「お兄ちゃん……」

ユキコが心配そうな声をあげた。

ヒロシは笑顔を見せる。

「村の人は何もわかってないんだよ、本当のことを。だから、ユキコは本当のこと、わかってないと駄目だぞ」

ヒロシとユキコは自宅まで無言で帰った。ユキコは心配そうにしていたが、ヒロシは宿舎に戻らないといけなかったので、玄関で別れた。

宿舎に帰る道すがら、少し涙が出てきたので、立ち止まってそれをぬぐった。

その時、遠くから咆哮（ほうこう）が聞こえたような気がした。振（ふ）り返ると、島の真ん中あたりにある山から低いうなり声のようなものが出ているのだとすぐにわかった。

ヒロシも例の伝説については実は詳（くわ）しく知っていた。山の麓（ふもと）に湖があり、そこがちょうど島の中心部なのだ。魔獣はそこから出現するとされている。そして、勇者の武器と言われるものもそのすぐ近くにある。

しかし、同時にそれらがいかさまであるということも誰より詳しく知っていた。その咆哮に聞こえるものが偽物（にせもの）だとも。

——魔獣がいるんなら、本当に村を滅（ほろ）ぼしちまえばいいんだ。どっちにしろいるわけないけどさ。

ヒロシはそう思った。

○

ふと阿九斗は視線に気づいた。海から帰る道で振り返った茂（しげ）みの中に、宿舎の部屋で荷物を整理している部屋の窓に、あきらかに知り合いのものではない視線を感じる。

ここのところ感覚が鋭（するど）くなっているような気がしていた。マナを感知できる力が上がっているのかもしれない。だとすると、人知れずこちらを見張っている者がいるということは気のせいではないのかもしれなかった。

——誰かに迷惑（めいわく）をかける前に自分で突（つ）き止（と）めるか。

阿九斗は夕食前にわざと表を出歩いてみて、そこでも視線を感じたことでそう決意した。夕食後の自由時間になって、窓から抜け出せるように靴を持って部屋に戻った。さて、行くか、と窓を開けたところで、ころねと顔が会った。窓の外に突っ立っていたのだ。

「どうしたの?」

「いえ。気になることがありまして」

ころねはそう言った。

「気になる?」

「何者かがあなたの周囲を嗅ぎ回っています」

ここのところ少々おかしいころねだったが、そういうことについては信頼して良いことは阿九斗もよくわかっていた。

「僕も気になっていた。追跡してみようと思う」

「危険がないといいのですが、あなたが行くと言うのなら、行きましょう」

ころねも同意した。

３　暗い林でドッキリ？

「視線を感じるということは、マナの感知能力があがっているということでしょう」
　ころねが言った。
　それは阿九斗(あくと)の考えとも合致(がっち)していた。
「人間の体内のマナを感知できるようになったってこと？」
「そうです。個人の体内で変化する微妙(びみょう)なマナパターンを人間は感知、記憶(きおく)できるようです。そのため、いわゆる勘(かん)とか感覚で隠(かく)れた個人を認識(にんしき)できるようになるというわけでしょう」
「じゃあ、誰かが僕を監視(かんし)してるって感じは……」
「私のセンサーでも感知しています。気のせいではないですね」
　ころねは手に持っていたセンサーを示した。懐中(かいちゅう)時計のようなデザインの本体にレーダー画面が輝(かがや)いている。
「これぞマナ感知レーダーです。マナの動きをトレースできます。とはいえ、体内のマナ変化は魔術(まじゅつ)熟練者はマナの反応を隠すことも可能ですし、そもそもマナ含有量(がんゆうりょう)が少ない者は感知しにくいですから、一般(いっぱん)的(てき)にはほとんど意味のないものかもしれませんが、今回の場合は有効のようです」

ころねが見せてくれた画面には、地図と重ね合わせて小さな光の点が表示されている。その位置はここのすぐ近くだ。

「これを追えばいいのか」

阿九斗は光の点の位置に向かって足を踏(ふ)み出した。茂みを手でわけて行かなくてはならないような道だが、前進できないほどではない。ただ、さすがに夜の林の中は暗かったのでころねからライトを借りて前方を照らすと、浮(う)かんだ光の輪の中で、茂みががさりと動いた。確かに前方に何かがいるのだ。

「そっちか」

阿九斗は駆(か)け出す。すると、茂みの動きも遠ざかるように逃(に)げる。意外に速い。おぼつかない足下(あしもと)と、土(と)地勘(ちかん)のない不利な中、それでも限界まで速く走りはしたが、やがて相手を見失ってしまう。

「レーダーを」

阿九斗は息を切らしながら、後ろについてきていたころねに手を伸(の)ばす。

すると、ころねはレーダー画面を阿九斗に見せて、こう告げる。

「異常です。感知できません」

「なんだって?」

阿九斗は画面を覗(のぞ)き込むが、確かに画面が乱れているのがわかった。光の点どころか、地図も表示されていない。

「壊(こわ)れたってことかい?」

阿九斗が聞くと、ころねは首を横に振った。
「マナが乱れています。マナ使用機器に影響が出ているようです」
「君は大丈夫なのかい？」
「私は外部とマナ交換をしないモードに切り替えています」
「それは良かった……。とはいえ、それじゃ相手を見失ってしまったな」
「そのようです。現在位置もはっきりとは不明です」
「じゃあ、迷子に？」
「いいえ。私は現在地に来るまでの風景を完全に記憶しています。ですから、私といれば大丈夫です」
「じゃあ、帰ろうか」
阿九斗は追跡をあきらめることにした。
が、その瞬間、阿九斗はぞわりとした空気を首筋に感じた。
咄嗟に振り返るが何もない。
その気配はころねも感じたようだった。耳に手を当てて、何か音を聞いているような仕草をしている。
「何だろう？」
「逃げる者の音が聞こえました。もう少し後を追ってみましょう。私は暗視が可能ですので、ある程度は視界のみで追跡が可能です」
そう言うや否や、いきなりころねは駆け出す。

「え？　ちょっと……！」

阿九斗は慌てて後を追ったが、ころねはぐんぐん加速していく。

暗い林の中、阿九斗はライトひとつを持っているだけだ。ころねからはかなり引き離され、やがて自分がどこを走っているのかもわからなくなった。

やがて阿九斗は走るのもやめた。

「まいったなぁ……。どうせしばらくしたら、ころねが帰ってくるか……」

阿九斗は適当な木を見つけ、それに寄りかかって座った。

ころねが自分が追いつけないのに勝手に行ってしまうという体験ははじめてだった。少しまともになったかとも思ったが、やはり、ここのところ、ころねはおかしい。

――でも、ころねがいなくなったら、僕も相当に困るような気がする。ころねがなくてはならない存在になっていたんだなぁ……。

そんなことをぼんやり阿九斗は考えた。

その時、近くの茂みで、がさり、と音がした。

○

阿九斗たちが謎（なぞ）の人物の追跡をはじめたその少し前の時間、『コンスタン魔術学院』の地下において、不二子（ふじこ）はピーターハウゼンの眼前で悪戦苦闘（あくせんくとう）……してはいなかった。

「そうなんですのよ！　阿九斗様を専制君主にして、わたくしが后（きさき）！　反対者は毒ヘビを満たしたプールに放（ほう）り込んで、それを眺（なが）めながら血のワインで阿九斗様とディナーを楽しむのがわたくしの夢！」

不二子は興奮して話している。ピーターハウゼンは満足げにそれを聞いていた。

「夜は国中から美女を集め、裸（はだか）にして阿九斗様を誘惑（ゆうわく）させますの！　しかし、阿九斗様は当然、それには目もくれませんわ！　阿九斗様が臥所（ふしど）を共にするのはわたくしだけ！　女たちの嫉妬（しっと）の声が渦巻（うずま）く中、わたくしは阿九斗様との交わりを見せつけますの！　その嫉妬や敗北感、羨望（せんぼう）の入り混じった視線がわたくしをさらに美しくしますのよ！」



不二子は自分で語りながら感極まって身を震わせている。
「なかなか見所のある悪女だな。その実現に尽力することだ」
ピーターハウゼンは力強くうなずいた。
「そうですわ！　そのために、阿九斗様に尽くし、わたくしも全力で黒魔術師たちをまとめあげねばなりませんの！」
紅茶を飲みながら拳を握る不二子である。
あれからずっとピーターハウゼンの相手をさせられていた不二子だったが、さすがに数時間も一緒にいると恐怖も薄れてきた。そうなると、元々人を騙したり脅したりする話術には優れていた彼女である。ピーターハウゼンとうち解けるのはそれほど難しいことではなかった。もっとも、話術のせいだけではない。不二子の性格がとても良いものだとは言えないことがピーターハウゼンの気に入ったようでもある。
「そこはお前に頑張ってもらわねばな。大体が主は野心がなくていかん」
若い将軍を育てようとする老宰相のようなぼやきをピーターハウゼンは漏らす。
「野心がないというよりは善良なのだと思うけどなぁ」
不二子ではない声がピーターハウゼンに答えた。
ピーターハウゼンと不二子は同時にそちらを振り返る。

地下宮殿に歩み入ってきたのは、背の低い少女だった。正面に顔のついた小粋な帽子をかぶり、その下には中性的ないたずらっぽい顔が覗いている。

この学院の生徒会長、リリィ白石だ。

「あのときの小僧か」

ピーターハウゼンが鼻を鳴らす。

リリィは、額に青筋を立て、顔を険しくしたが、それでも暴れ出すことは自重したらしい。不機嫌さを隠している様子はないが、腕を組んだままの格好でピーターハウゼンの前に立つ。

「小僧はよせ。ボクはこれでも乙女で通っている。それに、キミたちに悪くない話を持ってきたんだ」

「話してみるがいい」

「偉そうだな、ホント。ま、いいや。生徒会が、いや、それだけじゃなく学院全体がキミたちをどう処遇するかが決定したんだ」

ピーターハウゼンは無関心そうだったが、不二子はさすがにその言葉に身体を強ばらせた。学院にピーターハウゼンがいることがあらゆる意味で問題であることは不二子も承知していたことだ。

「学院はどちらについたんですの?」

学院はこれまでは穏健派であり、現時点で阿九斗が魔王ではないことを理由に自由を与えている。だが、ピーターハウゼンの存在はさすがに強硬派への転換を決意させるものだったとしてもおかしくはな

い。
「結論から言えば、これまで通りだ。学院は生徒である紗伊阿九斗を保護する。ピーターハウゼンも違法な存在ではない。いや、それに適用できる法律が存在しないだけなんだけれどね」
　リリィの言葉に、不二子もひとまずほっとする。なんだかんだ言ってもリリィは生徒会長であり、すでに政府のために働いている人間である。ここでもめ事にならなかったのは非常にありがたい。
「それは助かりましたわ。確かに良い話ですわね」
「それだけじゃないよ。現状維持じゃ良い話とは言わない。ただボク個人は穏健派……つまりボクが本来属している主流派にも愛想が尽きたんだよ」
　リリィはにやりとした。少年っぽい顔立ちであるのに、そうして笑うと不二子の背筋を寒くさせるほどの迫力がある。
「愛想が尽きた……？」
「人造人間を使って、紗伊阿九斗を色仕掛けでなんとかしようとしているらしいんだ、あのジジイども」
　リリィの言葉に、不二子も驚く。
「ええっ、阿九斗様を……？」
「そういうのはボクの主義に反する。人造人間は命令には逆らえないからね。その上、任務に失敗したら解任されるとさ。あの朴念仁とはいえどうだろうな？　人造人間の本気の誘惑に屈しなかった男なんていないからね。過去、それでスキャンダルに巻き込まれた政治家も多い」

「ゆ……許せませんわ！」
「ま、ね。ボクもホントはそういうところ許せる大人にならないといけないんだけどさ。一度嫌いになると止まんなくてね。良い話ってのは、それだよ。ボクはこれから個人的にこの件にかかわらせてもらうよ」
「どういうこと……ですの？」
　不二子は聞いた。リリィの迫力からは、阿九斗に協力するという空気は微塵も感じられない。
「ボクは穏健派のようには活動しない、と言っているのさ。だけど、紗伊阿九斗のように強硬派に対しても何もしないってわけでもない。戦争を起こそうとしているヤツらの中枢の情報を掴んだ。阿九斗がどう言おうと、ボクはそいつらをぶち殺す！」
　リリィは胸の前で拳を打ち合わせた。
「戦争を起こそうとしているヤツらの中枢？」
「CIMO８」
「それがその人たちの名前ですの？」
「内閣魔術情報調査室。そこのエージェント八人だ。すでに行動を開始しているという情報もある。情報収集と対魔術戦のエキスパートだ」
「それは……確かに良い話ですわね」
　リリィはわざわざ情報を伝えに来てくれたようだ。おまけに当面の敵を潰してくれると言う。なんだかんだ言って彼女も阿九斗のことを気遣っているのだな、と不二子は思った。

が……。

「だけど、キミたちとは完全に敵対することになる」

リリィは言った。

「え？」

「あいつが黒魔術師の道具として使われるようなことがあったり、あいつが社会を乱す行いをしようものなら、穏健派が何と言おうと潰す。そういうことだよ。特にキミは気をつけて欲しいな、江藤不二子クン……」

残忍な表情でリリィは言った。

不二子は思わず身構えたが、自分の力では生徒会長にかなわないことは十分にわかっていた。どうにかしてピーターハウゼンに任せる策を脳内で巡らせる。

しかし、すぐにリリィは顔を崩した。

「キミじゃ美味しくない。彼に伝えてくれ。ボクは、まだキミに全部見せてないって」

「……わかりましたわ」

不二子がうなずくと、リリィは脅かすだけ脅して去って行った。

へたり込む不二子に、ピーターハウゼンが笑う。

「元気が良い子じゃないか」

「わたくしは喧嘩は知恵でやるタイプですのよ」

不二子は文句を言う。
「強がりも貫けば自らの長所となる。それでいいとは思うが、君も知恵で喧嘩をするタイプなら、せっかくの情報を主に伝えなくていいのかね？」
ピーターハウゼンは言った。
不二子は、はっとして、通信機能のついている生徒手帳を取り出す。
阿九斗に念話を入れるが、どういうわけか繋がらない。
「マナ障害……？」
不二子はピーターハウゼンを説明を求めるように見る。
「情報収集と対魔術戦のエキスパートというのが気になる。マナのジャミングは基本だからな」
「でも、臨海学校全体が影響下にあるなら、騒動は学院の教師たちに伝わってきていてもおかしくないですわ。ということは、阿九斗様だけが危ないのかしら……」
不二子は改めてけーなに念話を送る。
けーなは数コールで念話に出た。
《あー、先輩だー。どーもー》
「どーもー、じゃありませんわ！　大体、ピーターハウゼンのお相手についてはわたくしを騙しましたわね……って、それは後でたっぷり話して差し上げますわ！　ねぇ、阿九斗様はどうしているの？」
《え？　あーちゃん？　そーいえば、いないかも》

「いいこと？　よく聞きなさい……」

○

阿九斗は茂みが鳴ったのを聞いて、木から背中を離して身構えた。
もぞもぞと動く茂みに正対し、何があっても動けるようにしておく。
が……。

「あーちゃん……やっと見つけたー」
茂みからふらふらと現れたのは、けーなだった。

「けーな」

「先輩から念話が入ったから、それを伝えようと思って追いかけてきたんだよ」
けーなは阿九斗の前にぺたりと座り込んだ。

「ごめん。誰かが僕を見張っていたらしくて……。僕はそれをころねと追いかけてきたんだけど、ころねだけが先に行っちゃって……」

「そーなんだ。あたしが部屋に行ったとき、あーちゃんが茂みに入っていくのが見えたから、ライトを追いかけてきたんだ」
笑いながら言うけーなに、阿九斗は緊張していたのが馬鹿らしくなってきてしまう。

「それで、先輩の用件って、何なんだい？」
　そう聞くと、けーなは首をひねる。
「あれ？　えーと……いくつかあったんだけど……」
　けーなは上を見上げて何か思い出そうとしている風だった。けーなにしても鈍すぎる感じが阿九斗には気になった。
「大丈夫(だいじょうぶ)かい？」
　阿九斗はけーなの顔を覗(のぞ)き込む。
　けーなは顔を赤くして、息を荒(あら)くしていた。
「大丈夫……。ちょっと走ったり、飛んだりしたから……息が切れちゃって……。そうだ、ひとつは、サイモン5っていう悪人があーちゃんを狙(ねら)ってるって話だ！」
　けーなは、ぽん、と手を叩(たた)く。
「なんか、フォークデュオと五人兄弟コーラスがまざったような名前だね……」
「いや、名前は違(ちが)ったかもしんない。でも、悪人が狙ってる。魔術師(まじゅつし)を殺すのがうまいって聞いた。怖(こわ)いよね」
　けーなが言うと緊張感がないので、阿九斗としても反応に困る。が、冷静に考えれば、やはり厄介(やっかい)な話だ。
　――マナ使用機器の異常はそれか。

そうは思ったが、けーなに言っても仕方がないので一人で納得（なっとく）しておく。

「それと？」

「え、えーと……それを生徒会長さんが教えてくれたんだって。あと、なんだっけな？」

けーなの頭が悪すぎる。おまけに赤ら顔がひどい。

「それは？」

「もう、暑くてだめだね。でも大丈夫。あーちゃんと一緒（いっしょ）に飲もうと思って、これを持ってきていたから」

けーなは腰（こし）に吊（つ）していた水筒（すいとう）を取り出した。蓋（ふた）を取って、それにとろりとした白い液体を注ぐ。

「ふふふ……これは、あたしが作った新しい飲み物！　走ってくる間に喉（のど）が渇（かわ）いて飲んじゃったけど、その分、おいしさは保証済みだよ！」

けーなは水筒の蓋を高く掲（かか）げた。

「おいしいのはわかったけど……何なの？」

「これはお米のジュース！」

自信満々にけーなは胸を張った。そして、一気に蓋の中を飲み干す。

「おいしい！」

「……いや、おいしいって……まさか……」

阿九斗は不安になる。

「あーちゃんにも飲ませてあげるね！　あたしはずっとお米のジュースを作る方法を考えてて、最近、ようやく完成したんだよ！　それで臨海学校に持ってきたんだ……」

　けーなは蓋に新たな一杯を注ぎ、阿九斗に突き出す。

「……炊いて潰したお米を水で溶いてね、そんで、これがポイントなんだけど、麹とヨーグルトを入れて瓶に詰めて置いておくの！　二日くらいしたら良い匂いがしてきて上澄みが美味しくなるんだよ！　それでさらに大発見！　濾した上澄みを冷蔵庫に入れておくと、今度は炭酸が湧いてきてサイダーになるんだよ！」

　ぺらぺらとけーなは作り方を講釈する。

――ああ、それは……。やっぱり……。

　阿九斗は蓋を受け取り、匂いを嗅ぐ。確かにおいしそうな匂いはするが、かなり大人の香りだ。

「けーな、これは、アルコールが発生していて……」

　阿九斗が言うが、けーなはすでにまともに聞いていなかった。顔を真っ赤にして、左右に揺れている。

「えへへへへ……。あーちゃんがいっぱいいるねぇ……」

――走った後に一気に飲んじゃあなぁ……。

「ああ、ほら、もう飲んじゃ駄目だぞ。こっちに来て、休んでいな」

　阿九斗はけーなをさっきまで自分が寄りかかっていた木のところに座らせる。肩を抱いて位置を直してやると、中腰になっていたところを、いきなりけーなに引き込まれる。

「うわっ」

「えへへへ……。あーちゃん、こうしていると気持ちいいねぇ……」

けーなが頬（ほお）をこすりつけてきた。中腰になっていた阿九斗だったが、その体勢では苦しいので、けーなの横に座る。けーなは阿九斗の頭を抱（かか）えたまま、身体を完全に阿九斗に預けてきた。

「おにょにょにょにょにょ……」

ろれつの回らない舌で妙（みょう）な音を立てながら、けーなは阿九斗の耳をかみ始める。

「ちょ、こらっ！　くすぐったいよ……」

「えー、いいじゃん。こうしていると、なんか懐（なつ）かしくて……」

――懐かしい？　そういえば、僕はけーなと昔に会っていたんじゃないかと思うんだよなぁ……。

阿九斗は昔を思い出していた。孤児院（こじいん）を出るとき、入れ替（か）わりに入ってきた子があんまり泣くので、支度金（したくきん）全額をはたいて大人のするような髪飾（かみかざ）りを買（か）い与（あた）えたのだった。そして、それが、今、けーなの髪（かみ）についている鳥の意匠（いしょう）のそれなのだと思ったのだが、どうやらけーなはそれを憶（おぼ）えていないらしい。

「やっぱり、僕ら、昔に会っているんじゃないかな」

「そーかもねぇ。あーちゃんと出会う運命だったのかもねぇ。えへへへへ……」

けーなはそう言ってだらしなく笑ったが、阿九斗の望むような真面目（まじめ）な反応ではなかったため、いまひとつ期待していたような答えではない。

——とはいえ、それにこだわる理由もないんだよな。どうして僕は、それにこだわっているんだっけ……？

そう阿九斗は考え、昼間、絢子（じゅんこ）から言われたことをふと思い出した。

「けーなのことは名前で呼ぶよな、君は。だったら、友達（ともだち）の私のことは、どうして名前で呼ばない？」

あの時は絢子がちゃんとしているからだ、などと思ったが、考えてみれば、絢子が接しにくいわけでなく、自分がけーなといるとリラックスできるからではないだろうか？

——だとすると……。僕は、もうずっと前からけーなに一目惚（ひとめぼ）れしていたって？

そう考えはじめると、もう落ち着いていられなくなった。

けーなの身体は〝お米のジュース〟のせいで、ほんのりと焼けたお菓子（かし）のような香りを放っていた。もたれてくる無防備な身体は熱くてやわらかく、つきたての餅（もち）のよう……。

——そう考えること自体がけーなに毒されてる。

阿九斗は首を振（ふ）って冷静になろうとした。静かになっていたけーなの顔を見る。もう寝（ね）ているのだろうと思ったが、けーなは目を大きく開けてこちらを見ていた。

——うわっ……！

内心で驚（おどろ）きの声をあげる。なんとか目をそらさずに済んだ。どうにも目をそらすとけーなに失礼のような気がしていた。

けーなは優しく微笑んでいて、今日あった様々な心配事をすべて忘れさせてくれそうに感じられた。その瞳を覗き込んでいると、ふらふらとそちらに引き寄せられていきそうになる。
「あーちゃん、ちゅーしようとしてる。いけないんだぁ」
けーながいきなり言った。
心の中を見透かされたような気がして、阿九斗は慌てた。
「ば、馬鹿なこと言ってるんじゃないっ」
「んー、そうだよね、えっちなのはいけないよね。でも、ほっぺたならいいよ」
けーなは言って、真っ赤になっている頬を突き出した。
――そうだよな、それなら教義にも反しないし……。じゃなくて、そういうのは駄目だ。でも……。
阿九斗はいわゆる性愛よりも、心から安心するような何かを感じていた。ずっと求めていた家族的なもの。いや、求めつつも自ら拒否していた家族的な愛情を、けーなにだけは感じている。
――親愛の情を示すっていうことなら大丈夫なのかも……。
阿九斗はけーなに顔を寄せた。
「わーい」
けーなは嬉しそうな声をあげて阿九斗の首に腕をからませた。
阿九斗はけーなの頬に……。



「えいっ」

ドンっ！

激しい衝撃を受けて阿九斗は突き飛ばされた。頭から地面に転がる。

「ちょ……」

身体を起こして振り返ると、ころねがけーなの脇に立っていた。

「い、いきなり突き飛ばすことはないだろうに」

阿九斗は文句を言ったが、ころねは毎度の無表情で答える。

「回避行動をとったところに偶然あなたがいたのです」

「えいっ、って言ったじゃないか！」

その阿九斗の言葉をころねは無視した。

「回避行動と言ったはずです。そんな言い争いをしている余裕などありません」

「何を言ってるんだ……」

阿九斗がその言葉の真意を確認しようと、一歩前に踏み出した時だった。

キィン、という鋭い頭痛のような感覚が襲ってきたのだ。

その感覚に戸惑った一瞬後。

パン、と乾いた音が響いた。

その音とほとんど同時に、ころねの身体がゆっくりと崩（くず）れはじめる。

「ころね！」

阿九斗はころねに駆（か）け寄（よ）ろうとするが、膝（ひざ）を突いた姿勢のころねがそれを手で制した。

「来ないでください。私なら大丈夫（だいじょうぶ）。撃（う）たれただけです」

――撃たれた……？

そういえば、あの音には聞き覚えがある。詠唱銃（えいしょうじゅう）の発射音だ。

「追っていた奴（やつ）か？」

阿九斗が聞くと、ころねはうなずいた。ころねは頑丈（がんじょう）に出来ているようで、外見には変わりはないが、内部がどれだけ損傷しているかは阿九斗にはわからない。

阿九斗はしゃがみ込む。息を殺して周囲の気配を探（さぐ）るが、暗がりの中に誰が潜（ひそ）んでいるかは皆目（かいもく）わからない。

「敵の目星はついています」

ころねが言った。

「それは誰なんだ？」

阿九斗は聞き返すが、ころねは首を横に振った。

「言えません」

「どういうことさ？」

「それも言えません。ただ、今だからこそ聞いておかなくてはならないことがあります」
「え？」
　阿九斗が戸惑いの声をあげると、ころねは真剣な目をしてこう言った。
「けーなさんのことをどう思っていますか？」
　いきなりのことだったが、阿九斗はころねの目に普段と違う表情があることに気づいた。いつもは無感情なころねが感情をむき出しにしているように感じられる。
「こ、こんなときに何だよ……」
「大事なことなんです。私がここであなたのために敵と戦えるかどうかについて関係があるのです」
「それって、どういう……」
「それ以上の説明は必要ありません」
　ころねは真剣な口調で言った。
　——これは、もしかして……。
　いかに鈍い阿九斗とはいえ、さすがにころねの異常の原因に気づきはじめていた。いや、もしかしたら、阿九斗も酔っぱらったけーなとのやり取りで、ようやく〝恋〟という存在を認識しはじめたのかもしれなかった。
　——ころねは僕のことを好きで、そのために政府に逆らって何かしようとしているんじゃあるまいな？
そして、そのために僕の気持ちを確かめようとしている？　待てよ、そうだとしたら、僕はどうしたらいい

んだ？　ころねはそばに居てくれないと困るし、だからといってそういう関係はあり得ない。

「な、なぁ……。けーなと……ちょっとくっついていたこと、怒っているのかい？」

けーなが酔っぱらってへろへろになっているのをいいことに、阿九斗は聞く。

「怒ってはいません。しかし、私にとっては都合の悪いことです」

ころねは言った。

——そういえば、ころねは最近〝私〟って言葉を使うようになったな。人造人間はあまりそう言う言葉を使わないものだろうけれど……。自我が芽生えてくると〝私〟って言うようになる……。そういうことなんだろうな。って、ことは……やっぱり……。

「いや、ごめん。でも、君にとってあんまりそこは都合のいいことにはならないと思うんだ……今後とも」

阿九斗はしどろもどろになるが、それでもはっきり言っておかなければいけないと思っていた。

「だけど、それは君が嫌いとか必要ないとかそういうことじゃない。僕には君が必要なんだよ、今後とも。でも、君が望んでいるようなことは、やっぱり僕は不実だと思っているんだ」

阿九斗が言い終わると、ころねは立ち尽くした。

「それは、私にとって、悲しいことです」

ころねは顔を伏せた。そこには明らかに悲しげな表情があった。

阿九斗は胸が締め付けられるような思いがした。それは、阿九斗にとってもはじめての気持ちだった。

ころねは低く絞り出すような声で切なげにつぶやく。

「私は失敗したのだと判断します。だとすると、私は、ここにいられなくなるかもしれません」
「ちょっと、それはどういう……」
「それを言うわけにはいきません。ただ、もしかしたら顔を見られるのはこれが最後かもしれません。そうだったときのために、私はお別れを言わなくては」
「ちょっと待ってくれよ！」
　嫌な予感がして阿九斗はころねに向かって手を伸ばす。
　しかし、ころねは首を横に振った。
「最善は尽くします。ですが、期待されない方がいいでしょう。今までありがとうございました。さようなら……」
　ころねは言うと、ポシェットからドアノブのようなものを出し、それを掲げた。すると、まるで空中を切り裂いてドアが出現したかのように、空間に穴が開いた。その中にころねは身体を潜り込ませる。携帯型転送用魔法陣だろう。
「待ってくれ、なんの説明もなく行ってしまうって、どういうことだよ？　僕は君が必要なんだから……」
　ころねは身体の半ばまでをどこかの空間に入れ込んでしまっていた。阿九斗の言葉に振り返ると、哀しげに笑って手を振る。
「さようなら」
　そして何かを振り切るようにドアの中に消える。

ドアは空間にとけ込むように消え失せ、そこは何事もなかったかのように元の暗い林の中に戻っていたのだが、阿九斗は一瞬、その空間にころねが散らした涙が残っているように感じられた。

しかし、呆然としている暇はなかった。やや遠くの茂みの中で何かが蠢いている音が聞こえたからだ。

——ころねを撃った奴か……！

阿九斗はその茂みの方を見た。確かに誰かが逃げ出そうとしているように茂みが動いている。きっと、ころねを撃つまではよかったが、気づかれずに逃げ出す方法が見つからなかったに違いない。

——動きを止めるくらいならできるかも……！

魔術については失敗続きの阿九斗だが、この局面では使わざるを得ない。阿九斗は集中し、茂み全体を念動で止めようと手を伸ばす。

しかし、阿九斗はマナ異常、そしてころねが撃たれる直前に感じた頭痛について失念していた。何者かが魔術をまともに使用できない状況をこの近辺にもたらしていたのだと推測できてもよかったのだが、今の阿九斗は冷静ではなかった。

——しまっ……！

すでに手の中で暴れている力を制御できなくなっているのを阿九斗は認識した。しかし、認識したところでもう遅い。予想外の爆発が茂みを襲い、周囲を激しく揺らす。閃光が暗闇の中で激しく瞬いた。かなりの距離からでも見えたに違いない。

「きゃああ！」

茂みから声が響く。その声の子供っぽさに阿九斗は驚く。

「え……？」

慌てて茂みに駆け寄って覗き込み、ライトで照らす。

光の中に浮かび上がったのは、まだ十歳前後の少女の姿だった。

「だ、大丈夫かい？」

阿九斗は彼女を助け起こす。幸い、身体に傷は無かった。息もある。気絶しているだけだ。失敗に気づいた瞬間に魔術の威力だけは落とすようにしたのが功を奏したらしい。直撃しなかったのも幸いした。ただ間近での爆音は小さな女の子を気絶させるには十分な衝撃だっただろう。

少女を抱きかかえ、阿九斗はその顔を確認した。

――あ……。

その顔立ちに見覚えがあった。ヒロシにそっくりなのだ。元々が子供っぽい顔立ちのヒロシだから、見間違いようもない。

――だけど、この子が詠唱銃を撃つはずがない……。

阿九斗は身構えたが、周囲からはもう気配が消えていた。頭痛もなくなっている。

「けーな、君は大丈夫だったかい？」

阿九斗は振り返った。

「うん。だけど、あーちゃん……」

けーなが不安げな声を出しながら立ち上がった。

「ころねちゃん、いなくなっちゃったよね？」

「聞いていたかい？」

「なんか寝ちゃってたから、最後のほうだけちょっと……。そ、それで、ご、ごめんね。あたし、先輩から言われたこと、思い出したの」

　すっかり酔いが醒めた様子のけーなが、済まなそうに言う。

「何を思い出したって？」

「ころねちゃんが、その……あーちゃんを色仕掛けでなんとかしろって命令が出ていたんだって。それで、失敗したら監視員をクビにされちゃうって……」

　――なんだって……！

　阿九斗は言葉を失う。

　色仕掛けで自分をどうこうしようという汚い考えにうんざりし、同時に、そんなことでころねを悲しませる彼女の上司に嫌悪感を抱き、事前に知っていればどうにかできたかも知れないと後悔した。が、そんな雑多な感情が湧いては消え、残ったものは、ころねに対する申し訳なさだけだった。もう少しころねに何かしてやれなかったか、と、思う。

　しかし、その重くなった心を軽くするための時間は与えられないらしかった。爆発を聞きつけたであろう誰かが近づいてくる声がしたのだ。

「おーい!」

「ユキコ!　ユキコ!」

その声に、阿九斗の腕の中の少女が反応した。目を覚ますのを待って、阿九斗はユキコと呼ばれた少女を立たせる。

「大丈夫かい?　驚かせてごめん。君を迎えに来てくれた人がいるみたいだ」

ユキコは阿九斗をきょとんとした顔で見上げた。

「お兄ちゃんが、魔王なの?」

阿九斗はぎょっとしたが、さすがに子供相手に大人げない態度を取るわけにはいかない。

「いや……違う、よ。ただ……そう呼ぶ人もいるけど」

ユキコは不思議そうに阿九斗を見上げた。

と、その時、近づいてきた村人の声が緊迫したものになった。

「ユキコ!　危ない!」

「離れろ!」

しかし、村人達は近づいてはこなかった。距離を取って恐怖の表情を浮かべている。

それだけなら良かったのだが、ユキコが離れるのをぐずっているうち、彼らは手近な石を拾って阿九斗に向かって投げはじめた。

「うわっ……」

阿九斗は石を避(よ)けようとしたが、飛んできた石のひとつがユキコに当たりそうになっているのを見て、避けるのをやめてそれを手ではたき落とした。拳大(こぶしだい)の石が飛んでくるのを平手で払(はら)いのける。マナによって肉体を強化した阿九斗にとっては簡単なことだったが、簡単なことだけに、それが一般人(いっぱんじん)からどう見えるかについて気にしていなかったのがまずかった。

「ば……化け物だ！」

「逃げろ、ユキコ！」

――しまった……。

石はさらに激しく降ってくるようになった。ユキコをかばうために覆(おお)い被(かぶ)さるようにしなくてはならなかったが、それがさらに村人を刺激(しげき)したらしい。

「さ、さらわれるぞ！」

――そうじゃないんだけどなぁ……。

阿九斗は内心でぼやくが、村人の方は話してもわかってもらえそうもない。ユキコを説得することにする。

「帰ってくれないと、あのおじさんたち、石を投げてくるのをやめてくれそうにないんだ」

阿九斗は言ったが、ユキコはまだなにか言いたそうにしていた。

「……どうしたの？」

阿九斗が聞くと、ユキコが口を開いた。

「お兄ちゃんの友達なんですか？」
　ヒロシの妹であることには気づいていたから、その質問には素直（すなお）に答えることができた。
「三輪（みわ）ヒロシ君の妹さん？　だとしたら、そうだよ」
「じゃあ……」
　ユキコは手を握（にぎ）って力を込めた。
「ホントのことを教えてください！　お兄ちゃんは勇者じゃないんですか？」
　阿九斗はその質問の意味も、その必死さの意味もわかりかねた。
「そりゃあ違（ちが）うさ。本人もそんなこと望んでないだろうし」
　阿九斗がそうあっさりと答えると、ユキコにいきなり脛（すね）を蹴（け）りつけられた。
「あっ……」
　痛みはなかったが驚きに声をあげた。その隙（すき）にユキコは阿九斗の手の中をすり抜（ぬ）けて逃げていった。ユキコは泣き声をあげていた。
「ユキコが逃げてきたぞ！」
「こっちだ！　早く！　逃げるぞ！」
　そんな声が遠くから聞こえてくる。
「まいったな……」

こうなっては阿九斗も逃げ出すしかない。木の陰（かげ）に隠（かく）れていたけーなを連れて、急いでその場を立ち去ることにした。

「あーちゃん、大丈夫だった？」

「大丈夫だけど……。いろいろと気になることだらけだよ。ころねのことも……。まいったな、どうしたらいいのやら……」

4　伝説の勇者現る！

　ころねのこと、追跡者のこと、ヒロシのことといろいろあって、阿九斗はほとんど眠れなかった。元来が悩む性格であるから、阿九斗は一人、宿舎の個室のベッドでぼんやりとしていた。ころねがいた時ならば、どんなことがあっても阿九斗をからかったはずで、それが悩みがちな自分をこれまでずいぶん助けてくれていたのだと阿九斗は気づき、そのことがまたころねの不在を深刻に感じさせていた。

　そんな悪循環に疲れ、明け方には阿九斗はついウトウトとしてしまっていたのだが、早朝に部屋にやってきた絢子にいきなりたたき起こされる。

「馬鹿者！　いったい何をした！　宿舎の前を見てみろ！　村人が貴様を呼んでいるぞ！」

　そんな声でベッドに倒れ込んでいた阿九斗は跳ね起きた。

　寝起きのままやってきたのか、Tシャツにジャージ姿の絢子が血相を変えていた。どうやら事態が妙な方向に動き始めたらしい。

　阿九斗はすぐに昨日のことだと思い至る。ユキコのことで村人が怒っているのだろう。

「まいったな……。でも、それは確かに僕が悪いと思う」

「馬鹿！　何かやったんだな！」

「僕のせいじゃない……んだけど、誤解はされたと思う」
　時計を見る。朝の五時だ。廊下に出ると、美津子先生とヒロシがいた。
「いやー、なんか暴動って感じかしら？　こんな小さな島で大きい騒動なんてちょっと楽しい？　そんなことないか」
　美津子先生は寝起きのためか、生来のモラルがどこかに行ってしまった性格のためか、とてもテンションが高い。対照的にヒロシは硬い表情で出来る限り阿九斗とは目を合わせないようにしている。
　――まいったなぁ……。
　精神的に落ち込んではいるが、責任感と正義感にはあふれている阿九斗である。本心から反省し、自分から詫びることを決意した。
「僕がちゃんと村の人たちに説明します。説得すればわかってもらえるでしょう。騒動を起こすわけにもいきませんし」
「もう十分に騒動だわよ」
　美津子先生は茶化す。さらにヒロシは暗い顔になったが、おずおずと前を通り過ぎようとした阿九斗に声をかけた。
「すいません、アニキ。あっしの故郷の人が……」
「気にすることはないよ。今回のことは、僕もかなり誤解されるようなことをしてしまったんだからね。それでも、きっと話せばわかってくれるさ」

阿九斗は玄関に向かって歩いた。が、廊下の窓から外が見えてくると、さすがに事態がかなり異常なことになっているのは実感として理解できてきた。
玄関を囲むようにして立っている村人たちは男ばかり二十人ほどか。中年から高年の者ばかりだ。その全員が手にショットガンやらナタやらをぶら下げている。誰もが目を血走らせた尋常でない顔つきをしている。が、阿九斗にはその表情が闘志からのものでなく、恐怖からのものだと認識できた。
――怖がられてるなぁ……。でも、だからこそ誤解を解かないと。
阿九斗はツバを飲み込んだ。
覚悟を決めていかなくてはならない。恐怖にかられて何をするかわからない人々だ。自分だけならなんとかなるかもしれないが、周りに迷惑をかけるわけにはいかない。それに肉体的なダメージはどうにかなる体質だが、精神的なダメージはやはり堪える。
意を決して扉を開けた。ざわめきと視線が阿九斗を迎える。
ざ、と玄関を囲んでいた輪が拡がる。
「コンスタン魔術学院一年の紗伊阿九斗といいます。昨晩のことでいらしたのですね」
阿九斗は声をあげた。
すると、代表者らしき四十がらみの男が、ショットガンを肩にかけた格好で前に出てきた。角刈りで体格のいい男だが、足取りから緊張が見て取れる。

「うちの村の子供を襲ったのはお前か？」
「それがユキコという女の子のことなら、確かにそうです。ですが、僕はその子を襲おうとしたわけじゃないんです。人違いで少し脅かしてしまっただけです」
「人違い？　簡単に言ってくれるじゃないか。ユキコは泣いていたし、あんたは魔王だって言っていた」
「子供の言うことです」
　阿九斗が言うと、村人たちがざわついた。さすがにまずいことを言ったと阿九斗は気づいた。
「いえ、魔王の実在について、あり得ないと言ったまでです。それを子供らしい妄想だと」
　阿九斗は声をあげた。言いつくろっているに過ぎないのだが、生来の格好をつける性格と、朗々とした声によって、まことに堂々とした態度に周囲からは見えた。
　それでも角刈りの男はひるまない。
「ま、待て……。そいつは変だ。将来魔王になると予言されたんだろう？　それは外れたことがないって……。妄想じゃないんだろう？」
「予言こそが妄想です。皆、踊らされているに過ぎない。島の予言については聞きました。それに怯えていらっしゃるんでしょう？　しかし、見ての通り、僕はただの学生です。それほどの力があるわけでもない」
　阿九斗が言うと、周囲の者は黙り込んだ。そうまで断言されては、突っ込むところもない。それに阿九斗が体格が多少良いだけの少年ということも確かなのだ。阿九斗はこれに気をよくした。
「もちろんお詫びはいたします。ユキコちゃんを泣かせてしまったのは僕の責任です。すいませんでした」

阿九斗は深々と頭を下げた。

　そこまでされて、村人たちの間に流れていた緊張した空気もほぐれていく。角刈りの男も、阿九斗が話せる相手だと思ったのか、やや表情をやわらげて質問をしてくる。

「いや、こんな言い方ですまないが、ここの学生はならず者が多くてな。過去の臨海学校でもいくつかの騒動はあったものさ。だからこちらも警戒してしまった。そこで魔王と呼ばれてるなんて言われちゃあな。でも、確かに、普通に会話ができる君みたいのなら、それが魔王ってことはないやな。でも、村の者は気にしてるんだ。予言にある魔獣ってのが嘘だと思えなくなってきて、不安になってる」

「根拠があることなら、やはり不安にもなりますよね。何があったんです？」

　阿九斗も緊張を解いて話を聞く。

「昨日、魔獣がいるという伝説がある湖から咆哮が聞こえたとか、ごく狭い地域で地震があったとかだな。それより以前からは、怪しい男が歩いているのを見たというのもある。でも、どうやら君じゃないらしい。その男が通ると妙な音と頭痛がしたとか聞くからな」

　その男の話に思い当たるところがある。そこを正直に話せば、誤解も解きやすいだろうと阿九斗は判断する。

「冷静に検証すれば、原因はいろいろと見えてくると思います。それに、その怪しい男というのなら、僕も見たかもしれません。夜に僕の後をつけてきた者がいるんです。それを追っているうちに、ユキコちゃんを巻き込んでしまったわけです」

「そういうことだったのか」
「男のことも気になります。僕も協力しますよ」
　阿九斗は角刈りの男に微笑んだ。相手も笑顔を浮かべる。
「魔術に詳しい優秀な生徒さんが手伝ってくれるなら、なんとかなりそうだ。よろしく頼みま……」
　角刈りの男が、そう言って手を伸ばした時、周囲を囲んでいた村人たちの後ろから、甲高い声が響いてきた。
「嘘だっ！　そいつは嘘をついてるんだ！　だって、魔王がいなきゃ勇者もいないことになるんだもん！」
　ユキコの声だった。大人達の足をかきわけて前に出てくると、阿九斗をにらみつけた。
「え？」
　阿九斗は戸惑うが、村人たちはこれに笑い声をあげた。
「ははは！　いや、そうだった、そうだった。魔王がいるってことになれば、勇者もいなくちゃならないものな！　だから、逆に勇者がいないんだから、魔王もいないよ」
　角刈りの男は、そう言って笑い、ユキコの頭をなでた。ユキコは悔しげな顔でそれを聞いていた。今にも泣き出しそうな顔だ。
　不思議そうな顔でいる阿九斗に、村人たちが説明をしてくれる。
「この子の家では、この子のお兄さんが予言の勇者だと思ってるらしいんだ」
「ただ、そこは俺たちも信じちゃいなかった。悪いけど、とてもそんなタマにゃ見えなくてね」

「あいつは弱っちぃからなぁ」
「そりゃ勇者ってガラじゃない。ガキの頃から極端なビビリだった」
「頭もあまり良くはなかった」
　村人たちがゲラゲラと笑う。
　ユキコは泣き出していた。しゃくりあげながらも、小さく抗議の声をあげる。
「なんだよ、みんな馬鹿にして……。この魔術学院に入ったんだから、お兄ちゃんだってすごいんだ……。それに、偉くなったらどうせお兄ちゃんに頼るくせに……」
　その声は小さくて、村人たちには聞こえなかったらしい。それでも、阿九斗には聞こえてきた。耳が良くなっているのかもしれない。
　ともかく、阿九斗は様々な事情を察してしまった。
「笑うのは良くないでしょう」
　阿九斗は声をあげていた。自分では小さい声のつもりだったが、村人たちは一斉に阿九斗を振り返った。
「あ？　いや……不快だったかい？」
「不快と言えば不快ですね。あなた方は島から離れて努力している者を笑っている」
　阿九斗の声は、大きく低いものになっていた。

村人たちが阿九斗の周囲から距離（きょり）を取った。怯えていただけではない。実際に圧力が上がっていた。阿九斗の足下（あしもと）で、マナの光が弾（はじ）け、輪になって一瞬（いっしゅん）、拡がった。気が昂（たか）ぶって制御（せいぎょ）できなくなった力が漏（も）れたのだ。

「い、いや……冗談（じょうだん）みたいなものだろうに。誰だってそんな陰口（かげぐち）は言うものさ。親愛の情ってのもある……」

村人たちはしどろもどろになっていた。

「そこに不快感を持っているわけじゃない。他人を弱いと言うけれど、誰より弱いのはあなたたちでしょうに。あなたたちは伝説を信じる。だが自分たちの村から出るという勇者のことは信じず、自分たちを不安にする魔王の伝説だけは信じる。これを弱さと言わずになんと言うのか！　生活も政治頼み。行動は集団だ。目先の気の弱い者は叩（たた）き、強そうな者には媚（こ）びる。不快といえば、そんな態度のことだろうが！」

阿九斗はいつしか大声をあげていた。こうなると止まらないのが阿九斗である。

「こんな村、誰が手を下すでもなく滅（ほろ）びるに決まっている！　大体が学生相手に武器を持ちだして、その臆病（おくびょう）さを滑稽（こっけい）とも思っていないのが腹立たしい！」

阿九斗は手近なショットガンの銃身（じゅうしん）を握（にぎ）り、それを払（はら）いのけようとした。ところが、怯えた相手は、反射的に引き金を引いていた。

ドン、と炸裂音（さくれつおん）が響き渡（わた）った。銃口は阿九斗の腹を向いていた。散弾（さんだん）を至近距離で喰（く）らうと人体には大穴が空くことになるだろう。だが、今、銃弾を受けた腹の持ち主は阿九斗である。阿九斗は身体を震（ふる）わ

せただけで、平然としていた。焦げて破れたシャツの下から鉛の粒がパラパラと地面に落ちていく。
「う、うわ！　化け物だ！」
村人たちが悲鳴をあげた。
おまけに、なんというタイミングか、はるか遠くから獣の咆哮が聞こえてきた。村人が言っていた湖の魔獣とやらを想起させる声だ。その声の主が本当に魔獣かどうかはわからないが「オオオオオオ！」という咆哮は、誰の耳にもはっきりと聞こえた。
――しまった……。何の音か知らないが、なんというタイミングなんだ……。これじゃ、僕がまるっきり魔王みたいじゃないか！
ここでようやく阿九斗は冷静になった。村人たちは阿九斗を囲んだまま動きを止めていた。さすがにあからさまに敵対することには恐怖を感じているのか、銃やナタは控えめに自分に向けられている。それは悪い兆候だった。せめて一斉に突きかかって来てくれるならば無力化できる自信もあるが、何かのきっかけで一斉に逃げ出してしまえば、その後の事態の処理はひどくやっかいなものになるだろう。
――こういう引っ込みがつかなくなる性格をなんとかしたいものだけどな……。ああ、こういうときにころねがいてくれたら、事態を収拾してくれるんだろうけど……。
阿九斗は叶わぬ願いを脳裏に浮かべた。と、救いは意外なところから現れた。
「み、みんなには……手を出さないでください」
阿九斗の背後から声がした。玄関から歩み出てきたのはヒロシだった。

——助かった。ここでヒロシが強く出てくれて、僕が折れれば万事上手くいくな。

阿九斗は内心でほっとした。

ユキコがヒロシに駆け寄る。

「お兄ちゃん！　お兄ちゃん、助けて！　お兄ちゃんは強いよね？　ホントはあの魔王と友達なんかじゃなくて、島であいつを倒すために友達のフリをしてただけなんだよね？」

ユキコは泣きながら訴えた。

村人たちは「まさか……？」「いや、本当に……？」とでも言いたげな目をヒロシに向けていた。

ヒロシは明らかに困惑していた。自分に自信がないため、村人が自分に向ける目に怯えているのだろう。そのせいでユキコの言葉を否定も肯定もできないでいる。どちらかはっきりすればユキコもこれから悲しまずに済むというのに。

——そんな態度だから……！

阿九斗はよせばいいのにヒロシの態度に苛立ってしまっていた。またも漏れだした力が身体の周囲に激しい渦を作る。十五メートルの龍と素手で殴り合いができる男である。そんな彼が苛立っているところに近づけるのは、相当な剛の者だけだ。

もちろんヒロシも怯えてしまっていた。それがさらに阿九斗の神経を逆なでした。

阿九斗はヒロシに一歩踏み出した。文句を言ってやるつもりだった。が、傍から見れば、それは文句を言ってやろうなんて軽いものじゃあなかった。ヒロシとユキコを骨も残らないように焼き尽くしてやろうとし

ているようにしか見えなかった。
「う、うわぁあああ！」
　もはや自棄(やけ)になったのか、それとも単に押(お)しのけようとしただけか、ヒロシはユキコを左手で抱(だ)いたまま、右手を前に突き出した。それが阿九斗の胸に当たる。
　ぽすり。
　間抜(まぬ)けな音がした。その音で、再び阿九斗は我に返った。
――あー、えーと……。またやってしまった……。どうすればいいんだ……？　そうだ、ここで僕が喧嘩(けんか)に負けたことにすればいいんだ……！
　それは阿九斗には良い思いつきのように思えた。
「や、やられた」
　阿九斗は、へろへろと後ろに崩(くず)れた。目を閉じて横たわる。
――うまくいった……。
　周囲が静かになったことを成功だと思っていたのは阿九斗だけだった。
　いや、事態が収拾したという意味では成功だったのかも知れない。
「な、なんだ……」
「薄気味(うすきみ)の悪いヤツだな……」
　村人たちは阿九斗から離れはじめた。

「そうだ、三輪(みわ)んとこの息子(むすこ)が魔術(まじゅつ)が強いこいつに金を渡したに違(ちが)いない」
「なんだ、じゃあ妹の方も襲(おそ)われたってのは狂言(きょうげん)か」
「他のこともなんか裏があるに違いない……」
彼らは口々にそんなことを言っている。
――あ……あれ……？　いや？　なんだ、これはまずい。ヒロシにはとても済まないことをしたような……。
阿九斗は目を開けた。
まずユキコが泣きながら走って行った。
ヒロシは倒れている阿九斗の方に目をやった。その涙(なみだ)を浮(う)かべた目を阿九斗は正面から見てしまった。なんとも言えない表情をしていた。そんな目を阿九斗はこれまでに見たことがなかった。できれば一刻も早く忘れたい、しかし忘れられない目だった。思い出すたびに後悔(こうかい)の念が浮かんでくることになるだろう。
だが、阿九斗とヒロシが目を合わせていたのも一瞬のことだった。ヒロシは人目もはばからずに泣きながらユキコの後を追っていった。
――しまった……。
この臨海学校で何度目かの後悔で最大のものを阿九斗は噛(か)みしめていた。

○

「馬鹿者（ばかもの）！　貴様は本当に最低のことをしたんだぞ！」
　絢子の平手打ちが阿九斗を襲った。殴られたことも蹴（け）られたこともあるが、そのような感情のこもった平手打ちをもらったのははじめてだった。
「後悔は……している」
　阿九斗はうなだれた。絢子はまなじりを上げて阿九斗の前で腰（こし）に手を当てている。
「今になって後悔できるなら、あのときになぜ感情を爆発（ばくはつ）させてしまったんだ？　誤解であっても村人に非はなかった。村の子供のために抗議に来るのは正当なことだ。問題は、君が正しいことにこだわって、弱者を許せなかったことだ！」
「わかってる……。いや、さっきはじめてわかった。僕は知らなかったんだ。うまく言えないけれど……」
　阿九斗は目を伏（ふ）せながら言った。
　村人たちはアホらしくなって帰ってしまった。ヒロシのことはけーなが追いかけてくれている。彼女ならうまくヒロシを連（つ）れ戻（もど）してくれるだろう。そして阿九斗は、宿舎の部屋で絢子から説教を受けている最中だった。
「弱い者の気持ちがわからないってことだろう？　そりゃ貴様にはわからないだろうさ！」
「いや……わかっている……つもりだった。僕は孤児（こじ）で貧乏（びんぼう）だったし、いろいろと不幸だったから」

阿九斗がひどく落ち込んでいるので、絢子もそれ以上は言いにくくなったらしい。頭に手をやりながら、阿九斗から目をそらし、他人事のように話しはじめた。

「お父様が言っていたことだが……。修行（しゅぎょう）している最中の者は、弱い者が許せなくなるのだそうだ。そもそも君は寛容（かんよう）な性格じゃないからな」

「僕は寛容じゃなかったのか」

阿九斗は真面目（まじめ）な声で言った。絢子は苦笑いを浮かべる。

「正しいことをしなくちゃいけないといつも思っているような奴（やつ）が寛容なはずがあるか」

「そうか……なるほど」

はじめてそこに気づいた、というように阿九斗が顎（あご）に手を当てた。

さすがに絢子は吹（ふ）き出した。

「馬鹿（ばか）。何を真面目に聞いているんだ。君らしくもない」

「笑うなよ。僕と君が似ているところはそこだろうに」

阿九斗が言うと、絢子はどきりとしたのか、顔を赤くして動きを止めた。そして、口をもごもごさせながら小声で言う。

「よせ。だからこそ放っておけないんだろ」

ところが、それが聞こえていた阿九斗がうなずく。

「いつもありがたく思っているよ」

絢子は完全に直立不動の姿勢になってしまう。

「私は、き、貴様に、説教をしているんだぞ」

「だから、ありがたく聞いているし、感謝しているよ」

「それでは説教している感じがしない。もう少し泣くとかなんかあるだろう」

絢子はわざわざ声を荒(あら)らげる。

「真面目には聞いているじゃないか。良い態度だと思うけれど」

「いや、考えてみればそれが悪い気がしてきたぞ。反抗(はんこう)するとかすれば、説教している方も殴りがいがある」

「反抗しろと言われてできるはずないよ」

絢子は咳払(せきばら)いをして話題を変えた。

「それもそうだ……。もう話は終わりだよ。君はもう少し寛容になるべきだ、ということだ。後でヒロシには謝(あやま)りに行かないとな」

「ところで、ころねがいないようだけれど？　彼女がいればもっと簡単に事態が収まっただろうに」

阿九斗はそれを聞くと、深刻な顔になった。そして絢子に経緯(けいい)を説明する。

「色仕掛(いろじか)け？　解任？　そうか……様子がおかしいとは思ったが……」

絢子はこれまでのことを思い出したのか顔を赤くする。

「……と、ともかく、そんな卑劣なことが行われていたのは許せない。正式に抗議して戻してもらうべきだ」

　その絢子の言葉に阿九斗もうなずく。が、「だけど……」と口を開く。

「だけど、色仕掛けのことはともかく、解任が政治的な決定なら、僕らは従わなくちゃいけないことになる。どうするのが正しいんだろう？」

　絢子はため息をつく。

「君が言ったんだぞ、〝全部うまくやってみせる〟って」

　阿九斗はまたも、はじめて気づいた、という表情を見せた。

「ああ……そうだったね。僕はそう決めたんだった。とはいえ、どうにも僕を政府に反抗させたいとしか思えない……。僕はそういうことから逃れられないのかな？」

　悩む顔を見せた阿九斗に、絢子は軽い声で告げる。

「力の強い者には相応の責任が伴う。君が魔王になりたくないなら、きちんと勉強して政府の中枢にでも入るんだな。さて、ともかくヒロシに謝りに行くんだろ」

　絢子はそう言って阿九斗に部屋を出ようと手を振った。

○

一方、ヒロシはけーなに追いつかれていた。村には戻れず、宿舎にも戻れないとなると、その辺の林の中をふらふらするしかなかったものだから、すぐに見つかってしまったのも当然といえば当然だった。

「ねぇ、あーちゃんも悪気があってしたわけじゃないんだしさ」

けーなはうつむいて歩くヒロシのすぐ後ろをついて行く。

「それがわかってるからつらいんすよ」

ヒロシは落ち込んだ声をあげ、もう歩きたくないというようにへたりこんだ。

「自分が弱いから駄目(だめ)なのはわかってるんすよ。だからアニキの言っていることが正しいし、みんなが笑ってるのもわかるんすよ」

「だけど、ヒロシ君はあたしより魔術もうまいし、あたしより友達(ともだち)も多いじゃない」

けーなはヒロシの前にしゃがむ。

「そういうことじゃないんすよ。期待されているのが嫌(いや)なのかもしんないっすね。その期待ほどには強くないって意味っす」

「期待?」

「村の期待が重いっていうのもあるんすけど……。あっしはその……変な言い方だけど、正義ってやつが嫌(きら)いなんす」

ヒロシはそう言って顔をあげた。

「正義?」

けーなは首をかしげる。

「いや、正確には正義ってやつを押しつけてくる人が。村の人たちも大半はそういう感じで……狭い村っすからね、村を守るための変なルールが正義なんす。だけど、そのせいで狭い村なのにギスギスしてるところがあって……」

「あー、なんかわかるな、そういうの」

「だから、強くなったら、自分もそういうのを作る側に回っちゃうんだろうな、って……。いや、強くもないのにそんなことを考えても仕方ないんすけど」

ヒロシは力なく笑う。

「ううん。だってヒロシ君、やっぱり強いと思うよ。だけど、優しいから、自分が強くなって、誰かを傷つけちゃうことが嫌なんだよね」

けーなは微笑んだ。

ヒロシは照れたように顔をそむける。

「よ、よしてくださいや。そんなことはないんすから」

「だけど、強くて優しいから、あーちゃんのために戦ってくれてたんでしょ？　怪我したこともあったのに」



「怪我したのは、強くないからでしょうに」
「違うよ。相手を怪我させないようにしてたんでしょ?」
「過大評価っすよ……」
「え?　だって、勇者なんでしょ?」
「あっしが勇者なはずないでしょうが。大体、それが嫌だからあっしは……」
　ヒロシはずけずけとものを言ってくるけーなにひるんだが、そこで何かを思いついたように立ち上がった。
「……それじゃ、あっしがその伝説とかがいかにいい加減なものか証明してあげますよ。一緒に来てください。その伝説の場所に連れて行ってあげやす」
　ヒロシはそう言って先に立った。

○

　その頃の学院。不二子は絢子からの連絡によって起こされた。まだ朝の七時である。
《先輩、調べて頂きたいことがあるんですが……》
　絢子の願いというのは、ころねの解任について調べて欲しいということだった。起きたばかりで気分が悪いところに加えて、自分とはあまりかかわりがないころねについての事情となれば、引き受ける理由もな

い。

「とーんでもございませんわ。あんな邪魔者の人造人間のために、なんでわたくしが……」

文句を言うと、念話の相手が変わった。絢子の策略である。

《先輩、是非ともお願いしたいんですが……》

「阿九斗様！」

不二子の態度がころっと変わった。

「はい！　それはもう！　完璧に突き止めて見せますわ……！」

そして、不二子は地下宮殿に向かった。

「……というわけですのよ」

ピーターハウゼンに阿九斗から聞いた事の経緯を話す。自分のネットワークを使っても政府の中枢のことはわからない。それならば、神と同等の機能を持っているピーターハウゼンに聞くのが手っ取り早い。この世界のかなりのことを知っているピーターハウゼンであるが、情報量が膨大であるだけに、どうやら質問したこと以外には答えてくれないらしい。それが彼の機能の問題なのか、性格の問題なのかはわからなかったが、不二子はともかく彼との会話からそんな性質をつかんでいた。

「政府の中枢の者のログは手に入らぬ」

この場合のログというのは、脳内のマナを通じて神に転送される人間の行動記録のことである。これによって神は人間の行動を評価することが可能になっている。そして、ピーターハウゼンはそれに反対する

黒魔術師たちの神である。あらゆる人間のログを取るキャパシティを秘めているとされている。
「全員のログを取れるんじゃなかったんですの？」
「現時点でそれが可能であれば、とっくに政府は転覆している。神に信者として登録する、いわゆる洗礼という行為がある。私にログを捧げるには洗礼は不要だが、私を認識し、私にログを捧げる気になっていることが必要なのだ」
「そういうことですのね……」
「それでも、噂は広まっている。ログは少しずつ集まっている。とはいえ、ころねに関係した者の情報はないな。いや、知っていても私には告げられないがな」
「どうしてですの？」
　不二子が聞くと、ピーターハウゼンはにやりとした。
「私にも神と同じ義務が生じている。人権を守るために、ログを他言することは禁じられている」
「意外、ですわね」
「黒魔術師は平等を謳っている。政府のようにログの盗み見や利用はしない。お前も黒魔術師だろうに」
「わたくしは裏口とか、非常手段とか、そういう言葉が好きですの」
「困った子だ……。ところで質問はそれだけか？」
「そうですわね。ころねのことは仕方ないから自分のネットワークで調べますわ。個人的には、あとは阿九斗様のことが知りたいくらいかしら？　村をその力で牛耳っていてもおかしくないと思いますけれど」

「その件については、多少、困ったこともある」

「え？」

不二子はピーターハウゼンの奇妙な態度に戸惑う。

「あなたに困ることとなんてあるんですの？」

ピーターハウゼンはうなずいた。

「私が主を決めるのは、主に私を制御する権限を与えるためだ。私は本来は自律しては動かない。だが、主は私を完全に制御しようという意志がない。故に私は不完全なのだ」

――と、いうことは……！

不二子はその説明で様々なことを理解した。

「阿九斗様が魔王になるというのは……。あの方が、自ら魔王になるという意志を固めた時に……」

その不二子のつぶやきをピーターハウゼンは肯定する。

「主が現体制の破壊と新たな秩序の構築を決意する。それこそが私の待ち望んでいる瞬間なのだよ」

――それこそが魔王誕生の瞬間……！

不二子は驚きに身を震わせた。阿九斗はまだ魔王ではないが、その鍵は彼の意志ひとつなのだ。

「それは、色仕掛けでもなんでも使いたくなりますわね」

不二子は舌なめずりした。

「革命の意志はわたくしとてまだ持っておりますもの。ますます阿九斗様の心がわたくしに傾（かたむ）くように尽（つ）くさなくては……」
「頼（たの）もしいな。私もその瞬間を待ち望んでいる。今のままだと問題もあるしな……」
「問題？」
「それはな……」

○

「ここがその湖なの？」
けーなは綺麗（きれい）な湖を前にして、歓声（かんせい）をあげた。
湖は真っ青な色をしていた。ほとりは白い砂地で、そこに立って首を左右に動かすと全貌（ぜんぼう）が見える程度の大きさだ。山あいの緑の中に白と青の輪が美しい。
「そうっす。ここが伝説の湖」
「綺麗だね。変な伝説があっても不思議じゃないよ！」
けーなは興奮した声をあげた。
しかし、ヒロシは首を横に振（ふ）る。
「いや、ここが島の真ん中の湖なのに、白い砂浜（すなはま）とこんな水の青さ、変だと思いやせん？」

「そーかな？　よくわかんない」

「それじゃ答えを言いやすと、要するにここは海なんす。地下に洞窟があって、そこが海と繋がってるんす」

「そーなんだ」

　けーながそう言ったとき、湖の脇の山から突然、あの「オオオオオ！」という咆哮が聞こえてきた。

「きゃあ！」

　けーなは耳を押さえてうずくまる。だが、ヒロシは平然として説明する。

「地下洞窟には空洞があって、山のほうに繋がってる穴もあるんすよ。それでそこには空気が入っている。だから、一年に一回くらい、朝夕とか波の具合とかで音が出るときがあるんです。今年は特別大きい。だから、みんな魔獣とか信じてたんすね」

「え？　そーなの？」

　けーなは顔をあげてヒロシを見た。

「ええ。実は、あっしは泳ぎが苦手で……って、知ってやしたね。だから、伝説のせいでみんなが来ないこの湖で妹と練習をしてたことがあったんす。そしたら、見事におぼれたんですが……　そのとき、中に洞窟を見つけて、危なく命が助かったことがあったんすよ。その時に、音の秘密に気づいたんすよ。中に入ったら、ウォンウォンうなってやしたからね」

　ははは、とヒロシは笑う。

「それに、前も言いやしたけど、この島の歴史は百年くらい。もう死んでますけど、あっしのお祖父（じい）さんが最初の入植者ですからね。だから、もうひとつだけ、みんなの知らない秘密を知ってるんす」

「秘密？」

　けーなが問いかけると、ヒロシは湖を回る細い道を指さした。

「あの道の先に、さっき言った洞窟があるんす。そこに祠（ほこら）があって、そこに勇者の証が置いてあるんすよ」

「え？　勇者の証が？」

「馬鹿馬鹿（ばかばか）しいでしょ？　その祠、作ったあっしのお祖父さんの名前が入っているんすから。しかも、そこにある勇者の証ってのが岩にはまった小さい剣（けん）なんですから。勇者にしか抜（ぬ）けない剣ってことっすよ。あっしもふざけて抜いてみようとしたけど、駄目（だめ）でしたよ。それを父さんに話したら、なんか変な怒（おこ）られ方をしたなぁ。勉強しろ、みたいな。それであっしはこの学院に来ることになったんすけどね。でも、すべて茶番だってことも、これでわかってもらえると思うんすよね。だって、あっしの一族が勝手に伝説を作ってるようなもんでしょう？　馬鹿馬鹿しい……」

　ヒロシはそう言って笑っていたが、それが段々と涙声（なみだごえ）になっていく。

「だから、あっしは……勇者だって言われるのもつらくて……。だって、あっしの家の自作自演みたいなもんじゃないすか。それに、あっしはあの入学時の適性検査、遅刻（ちこく）してみんなから遅（おく）れて受けたんすけど、その結果知ってやす？」

「どうしたの？　ヒロシ君。ううん、結果は知らないけど」

「あっしの結果、勇者、って出たんすよ。だけど、その時は先生が秘密にしてくれたんす。それは……魔王のときと違って、信じてなかったからだと思うんす。おかしいでしょ？」

ヒロシは沈んだ声を出し、情けない顔でけーなを見た。

しかし、けーなはまっすぐな目でヒロシを見ていた。

「ううん。おかしくないよ」

「えっ……」

「だって、ヒロシ君は、あーちゃんが魔王だってのも信じたじゃない。あれって、ホントは自分も勇者だって信じたいんでしょ？」

けーなの言葉にヒロシは戸惑う。

「い、いや……だって、そのときは……」

否定しようとしたが、否定の理由は見つからなかった。

本当はあこがれていた。それが善悪どちらであるかにかかわらず、強さに憧れていた。だから、阿九斗の堂々とした態度が気に入っていた。一緒にいれば、強くなれるような気がしていた。ただ、自分の弱さに気づいてしまうような局面になると、いつも逃げ出していたのだ。

そのことに気づいてヒロシは言葉を失っていた。そんなヒロシにけーなは笑いかける。

「ね？　その祠に行ってみようよ」

「え……だって、あれは……」

「気にしないで。ね？　ほら、ほら」
けーなは渋るヒロシの手を引いた。ヒロシが言っていた小道を駆けていく。
人気のない細い道はしばらく行くと、その先にややひらけた場所があった。そこに祠のある洞窟の地上からの入り口があるのだろう。
しかし、ヒロシとけーなは、そこに人影を認めて立ち止まった。
「あれ？」
ヒロシもけーなもいぶかしむ。そこにいた人物の怪しさが思わず声をひそめさせた。
その男は湖を見つめて立っていた。こちらには背を向けているのだが、背中からでもその異様さはわかる。夏に白いロングコートを着ている。長身で引き締まった身体をしていることがコートの上からでもわかる。
「な、なんすかね、あれは？」
「うーん、かなり変わった人なんじゃないかと思うんだけど」
けーなは自分の事を棚に上げてそう言う。
「村にはあんなのいないっす」
「そうだろうねぇ……」
ヒロシとけーなは道の脇の茂みに身を潜めた。
と、男はいきなり湖に向けてコートの前を開いた。

「ねぇ、あれは……」
「まるっきり変態のやることでやんすね……」
　すると、男は大声で湖に叫びはじめる。
「湖よ！　俺の叫びを聞け！」
　男は、その言葉通りに叫びはじめた。大声を出しているというのではない。叫びである。意味のない嗚咽のような声だ。しかも腹式呼吸が完璧にできている。率直に言って、かなりやかましい。
「にしゅうぎゅうおううわっしゃああぎょおいいもううどぃいえまおっとおうううこぉるぽのおおじぼつがももるえおどつりろぉふうううええまどいいもどおおめどおおおお！」
　村からかなり離れているうえ、今は湖に村人が近寄る気遣いはない。そのためかどうかは知らないが、男は思う存分声をあげているようだ。
　男がようやく叫び終わったので、ヒロシとけーなは顔を見合わせる。
「な、なんなんだろう……」
「ほ、ホントに危ない人でやんす……」
　と、叫び終わった男が驚きの一言を放った。
「さて、今日は声の調子もいい。準備運動はこのくらいにしようか」
　そして、男は開いたコートを揺すった。

すると、なんとコートが音を発しはじめた。内側にスピーカーが仕込まれているのだろう。しかもかなり大出力の。
思わずヒロシとけーなは耳を押(お)さえた。それも無理はない。その音は男が発した声以上に意味のない不快なものだった。
金属同士をこすり合わせるような音、破裂音(はれつおん)、電子音、適当にチューニングしたラジオから流れてくる雑音、それらを混ぜ合わせたようなノイズが大音響(だいおんきょう)で響(ひび)き渡(わた)る。
さらに、それに加えて再び男が叫びはじめた。
「むはぁおうぅぅうわこおおとっとおおじょぽおおされええだふぉおんぁあをおおえあ！」
しかも叫びながらのけぞり、地面に倒(たお)れのたうち回っている。電気ショックでも与(あた)えられたかのようだ。
さすがにヒロシもけーなも言葉を失っていた。
そうでなければ断末魔(だんまつま)だ。
だが、さらに言葉を失わせる事態が目の前で起こる。
男はやがてノイズを出して叫ぶのをやめ、体力を使い果たしたかのように荒(あら)い息をしながら立ち上がった。
「これからが本番だ」
ヒロシもけーなもずっこけそうになるが、続いた男の言葉はヒロシとけーなを別の意味で絶句させた。
「魔王のノイズのパターンは手に入れた。さぁ、聞くがいい！　哀(あわ)れな魔獣よ！」

○

「問題というのは、覚醒していない状態の魔王が私を使うことだ」
　ピーターハウゼンは言った。
「どういうことですの？」
　不二子が聞く。
「私はあまねく人類に魔術を与えるために生み出された。だが、それは人類だけでなく他の生物にも及んでしまう。そのことがいわば深刻なバグを生物に与えてしまうのだ」
　何を言わんとしているかは不二子にも想像できた。
「それはまさか……」
　不二子は息をのむ。ピーターハウゼンはうなずいた。
「生物の体内のマナが暴走し、その形質を変化させてしまったものが魔獣だ。覚醒した魔王ならば、私を制御できるが、そうでない場合、各地で魔獣が発生することになる。あるいは過去に封印されていた魔獣が復活するやもしれん」
　ピーターハウゼンはさらに続ける。

「魔獣は魔王の体内マナの波長によって活性化する。故（ゆえ）に、魔獣は魔王の命令に従う。現在の主であっても、それは同じだろう」

「そういえば、阿九斗様が裏山の魔獣からマナを取り除くという離れ技（わざ）を行ったと聞いたことがありましたわ」

「戦（いくさ）の際には魔獣を使うこともできるが、完全に魔王でない状態の主は、徒（むだ）に哀れな魔獣を生み出すだけなのだよ」

○

「オオオオオ！」

咆哮（ほうこう）が湖から響いてきた。それは明らかに生物の咆哮だった。

「これは……いつものとは違う……」

ヒロシもこれには狼狽（ろうばい）した。

「違うって？」

けーなが聞く。ヒロシは顔を青くした。

「あっしが知っているあの音じゃないんです。これは、まさか本物の……」

ドン！

湖の中心が爆発（ばくはつ）した。水柱が十メートル以上も立ち上がる。咆哮がその水柱の中心で響き、それが水柱となった湖水をさらに周囲に吹（ふ）き飛（と）ばした。

　ヒロシとけーなのいるところまで大雨のように飛沫（しぶき）が飛んでくる。

「ひゃっはははは！　復活したな！」

　変質者らしき男が叫んだ。彼も飛沫でびしょ濡（ぬ）れになっているのだが、そんなことも気にせずに、爽快（そうかい）そのものという仕草で両手を拡（ひろ）げている。

　男が見ている湖の中央には、魔獣（まじゅう）がその全貌（ぜんぼう）を現していた。

　巨大（きょだい）な円筒形（えんとうけい）のタワーのように見える。その太さは人間三人が囲んでもまだ足りないほどだろう。高さは五階建てのビルほどもある。先端（せんたん）には穴のような開口部があり、そこからヒゲ状の触手（しょくしゅ）のようなものが伸（の）びている。全体は茶褐色（ちゃかっしょく）でヒョウ柄（がら）の紋様（もんよう）がそこに浮（う）いている。

「ナマコだ……」

　けーなはつぶやいていた。

「この海にいるナマコ……あれが魔獣になったんでやんすか？　と、ともかく逃げてこのことを伝えないと……」

　ヒロシがそうけーなに告げて踵（きびす）を返そうとしたその時だった。

「きゃあああ！」

　甲高（かんだか）い悲鳴があがった。

その声はヒロシが聞き間違(まちが)いようのないものだった。
「ユキコ……」
ヒロシが振(ふ)り返ると、魔獣を見たユキコが驚(おどろ)きの声をあげていたのだった。魔獣を見て悲鳴をあげたのであれば、一緒に逃げれば良いだけの話だが、その悲鳴のせいで、あの男に見つかってしまっていた。
振り返った変態男は、浅黒い肌(はだ)に刈(か)り込んだ髪(かみ)の持ち主で、サングラスをかけていた。それだけなら別段異常なところはないが、その表情が尋常(じんじょう)ではなかった。何かにとりつかれたような笑顔(えがお)なのがサングラスをしていてもわかる。
「見たな！」
変態男はそう言うとユキコの方にじりじりと進んでいった。あれだけの大声で魔獣を呼びだしておいて「見たな」もないものだが、変態のセリフとしては堂に入っている。
「い、いやぁああ……」
ユキコは足がすくんで動けなくなってしまっている。
変態男は手を拡げた格好で前進していく。
「ま、待て！」
ヒロシは声を張り上げた。
変態男が妙(みょう)な角度にくるりと首を回した。ヒロシの方とユキコの方を交互(こうご)に見やる。
「あー、なんか同じ様な顔のがおっきいのとちっちゃいの。おっきいのったって、それほど大きくないけど」

変態男はそう言うと、思わぬ速度でユキコに迫（せま）った。
「やめろ！」
ヒロシは叫ぶ。
「お兄ちゃん！」
ユキコの悲鳴が響く。
変態男はユキコを抱（かか）え上げていた。
「ちっちゃいのを人質（ひとじち）にさせてもらう。おっきいの、そこから逃（に）げるなよ……。しかし、そりゃ普通（ふつう）の悪党のやり方でつまらないな。この際仕方ないが。やっぱり、誰も考えつかないような作戦じゃないとアートじゃない。そう思うだろ？」
変態男はなれなれしくヒロシに語りかけてきた。
――畜生（ちくしょう）、なんだこいつは……。
ヒロシは怒（いか）りと恐怖（きょうふ）に身体を震（ふる）わせていた。が、ユキコだけは守らないといけない。
「妹を放せ」
「いいや、放さない。これもアートじゃなくてつまらないが、見られたからには消さなきゃならない。もちろん、君もだ」
変態男は明らかに「消す」という言葉を使った。ヒロシの身体に緊張（きんちょう）が走る。
――けーなちゃんは……！

振り返るとそこにはけーなの服だけが落ちていた。うまく姿を消すことに成功したらしい。もしかしたら、けーながうまくユキコを助ける役に立ってくれるかもしれない。

――あの変態が魔術がそれほど得意でなければなんとか……。

ヒロシは身構えたままじりじりと前進した。

それを変態男は笑い飛ばす。

「学院の生徒か？　ということは魔術を使うわけだな」

「何がおかしい！」

「それが無謀なことだからだ。とはいえ、本気でやってくれなきゃ困る。無謀なことを本気でやるところにアートがある。こっちは君の挑戦を無謀なことにするために努力しなくちゃならない」

奇怪な理屈を変態男は述べた。

「ふざける……な！」

ヒロシは後ろ手にマナ球を作りだそうとした。彼の見えない位置で攻撃準備を整えておき、隙があればそれを撃ち込もうと考えたのだ。

しかし……。

――なんだ……？

ヒロシは呆然とした。そもそもマナ球が作り出せないのだ。

「あり得ない……」

緊張からしくじったはずもない。だがマナを集めることができない。

「はははははっはぁ！」

唐突に変態男が笑う。

ぎょっとするヒロシに、変態男は後方を指さした。湖の方向である。

あの魔獣はまだ湖の中央にいた。まるでそびえる塔のようにも見える。その魔獣が胴体を脈動させていた。まるで何かを体内に取り入れているかのようだ。

「……ああっ！」

ヒロシは気づいた。魔獣の口のあたりに光が集まっている。

「まさか……マナを……」

「そうさ！　マナを吸い取る魔獣なんだよ！　この世界じゃ、ほとんどのことがマナなしじゃやっていけない。そこにあいつが出現すれば……」

変態男は楽しそうに笑う。

「それで何をするつもりだ？」

ヒロシが聞くと、さらに大きな声で変態男は笑った。

「教える必要はないさ。だが、個人的には破壊と無秩序があればそれでいいと思うぜ。それでこそアナーキー！　それでこそアートだ！」

「おかしいぞ、こいつ……」

ヒロシが呟くと、変態男は凄まじい剣幕で絶叫しはじめた。

「おかしいだと？　これだからモノのわからねぇヤツはよぉ！　ノイズってもんの本質をまるでわかってねぇ！　破壊ってのは壊しゃいいってもんじゃねぇんだよ！　安直なヤツが壊したって安直な壊し方しかできねぇだろうが！　無秩序が最も人間の本質が表に出てくるんだよ！」

その様子にさらにヒロシは顔を青くしたが、そう叫んだ後、変態男はすぐさま今までのことが嘘だったかのように表情を平静に戻した。

「ま、一般人にアートを語ってもわからない。アートは自分自身で一度実行してみないとアートについて語られた言葉も理解できないからな。さて、御託はここまでだ」

変態男はヒロシににじり寄りはじめた。ヒロシはそのことの意味に気づいて背筋が冷たくなった。

――本当に見た者を消す気なんだ……。

ユキコは変態男に抱きかかえられたままだ。しかし助けようにも魔術は使えない。そして、ここで逃げるほどにはヒロシは弱くない。

――魔術が使えなくても、ユキコを逃がすくらいのことは……。

ヒロシは決意を固めた。しかし、さらに事態の悪化を予見させることが起きようとしていた。ヒロシの視界の端に肌色のものがよぎったのである。

――！

全裸のけーなが変態男の背後にそろりそろりと近寄っているところだったのだ。おそらく先ほどの会話が聞こえていなかったのだろう。まだ自分の姿が消えていると思いこんでいるのだ。変態男のすぐ近くに忍び寄ると、ユキコを奪い取ろうと手を伸ばしている。

姿が消えていたなら、ユキコを奪い返し、隙を作ることもできただろう。そしてけーなが姿を消せることを知っていたヒロシなら、そこを攻撃することもできたはずだが、マナを吸い取られた結果、けーなの身体は丸見えだった。

――あああ……。

心配するヒロシの表情にけーなは気づいたらしい。ヒロシに向かって「大丈夫」と親指を立てて見せた。そして、ゆっくりと変態男の背後からユキコを取り返しやすい前に回り込もうとしている。

「おい」

変態男が声を発して、ようやくけーなは自分の姿が見えていることに気づいた。

「ええっ！　なんで！」

変態男は空いている手でけーなの手首を素早く捕まえた。

「なんでだかなんだかしらないが、どういうわけで裸なんだ？」

「いやぁああ！」

けーなは抵抗したが、変態男の力にはかなわない。変態男は興奮した様子でまたもわけのわからない持論を語りはじめた。

「人の背後から全裸で迫ってくるってのはいいな！　その有り様はアートだ！　全裸アーティストの系譜に加えてもいい！　彼らは全裸で平和と調和、なにより困惑を都市に与えてきた！」

　変態男は笑いながらユキコとけーなを両手に抱えて振り回した。

「きゃああ！」

「いやぁああ！」

　ユキコとけーなは泣き叫ぶ。

「ユキコ！」

　ヒロシは叫んだ。

「お兄ちゃん、助けて！」

「ははは、そいつは無謀だ！　だが、無謀なだけにやってみろとしか言えないな！」

　変態男はヒロシの方を見た。

　明らかにかなわないのはなんとなくわかっている。魔術は使えない。体格が違う。さらには、相手は魔術が使えなくなることをあらかじめ知っていた。魔術なしで戦うための対策はされているのだろう。

　——畜生……。

　ヒロシはこの状況に絶望していた。なにより自分の弱さに絶望していた。向かっていく勇気がないわけではない。相手が明らかに理不尽なら戦う勇気は持ち合わせている。だが、自分の力量が決定的に状況

を左右するようなことだけはこれまでも避けてきた。そのせいで強くなる機会をいままでもフイにしてきていたのだ。

「お兄ちゃんは勇者なんだぞ！　お前なんかすぐにやっつけてやるから！」

ユキコが変態男に怒鳴っていた。

——そうじゃない。

ヒロシは内心で否定していた。

自分は強くない。誰か強い人が何かを決定してくれて、それに従うことが好きだった。そのために命を捨てるなら簡単だった。ただ、自分が誰かの命を左右するような決定を行うことは、それこそ死んでも嫌だった。

——勇者なんかじゃない。

ヒロシは立ち尽くしていた。

そこに変態男が迫ってきた。彼の両手は完全にふさがっている。だが、ヒロシは動けなかった。

変態男の長い足が弧を描いた。蹴りがヒロシの頭を揺らす。

ヒロシの視界の天地が入れ替わった。衝撃で世界が振動した一瞬後、目の前には傾いた地面があった。

「お兄ちゃん！」

ユキコの声がした。

「勇者ってのがこいつのことか」

変態男の声が続く。
「だがな、勇者が生まれるのを阻止するために俺はこの場所にいたんだよ。勇者が誕生する予定を狂わせる。そいつも仕事のうちなんだ」
――な、何を言ってるんだ、こいつ……。予定？　そういえば、魔獣が生まれることも知っていた……？
奇妙に冷静になった頭がそんな疑問を抱く。もうほとんど自暴自棄になっているのかもしれなかった。
無意識のうちにヒロシは立ち上がった。
「いいね！　立ち上がってくれた！　それでこそ無謀さが際立つ！」
変態男はさらに蹴りを打ち込んできた。
「だが、決定的に状況は変わらない！　そいつはお前が弱いからだ！　そいつはお前が世間の常識に縛られているからだ！　そいつはお前がアートを理解できないからだ！」
勝手な自説を変態男は叫んでいたが、ヒロシが芯から堪えたのは次の一撃とそれに続く言葉だった。
器用に片足で立った変態男は、前蹴りをヒロシに打ち込んでいた。
ヒロシのみぞおちにかかとの部分がねじ込まれる。ヒロシの身体がくの字に曲がる。
そのまま変態男は足を高く持ち上げていった。ヒロシは腹にめり込んだかかとで空中に持ち上げられてしまう。
変態男のバランス感覚と筋力は見事だった。二人を抱えたまま、一人の男を片足で高く持ち上げているのである。

「そして、お前は自分の本質を表に出していない。それを隠すためなら命も捨てようってハラだ。残念ながらそういうヤツはどれだけ理不尽なことをされても文句を言えねぇ。俺を恨む資格すらねぇってことだ。アバヨ」

そう言うと、変態男は高くあげた足を振った。

ヒロシは宙に飛んで、湖に落ちる。

「お兄ちゃん！」

「ヒロシ君！」

ユキコとけーなが悲鳴のような声をあげる。ヒロシの身体は激しい水音を立てた。そして、その波紋が消えても、彼は浮かんではこなかった。

それを見て満足そうに変態男はうなずいた。

「さて……それじゃ、二人とも順次始末させてもらうか」

けーなとユキコは、そのどちらもすでに悲鳴をあげる気力すら失っていた。

変態男はにやりとして手の中の二人を交互に見た。

「どちらからにするか……」

楽しむような口調でそう言った変態男だったが、その時、何かを感じたようにはっとして視線を遠くに向けた。

「ちぃ……予測よりも魔王様の動きが早いな……。こいつらを追ってきたのか……。同じ始末するなら、彼の目の前でしてやるのがアートってもんだ……」

変態男はそう言うと、弱々しく抵抗するけーなと、もはやぐったりとしているユキコを抱えたまま歩きはじめた。

○

魔獣は湖を出て村へと移動を開始していた。マナの濃いところを求めているらしい。その様子はかなり遠くからでも見て取れた。

ヒロシを捜そうとしていた阿九斗と絢子はそれを見てしばらく絶句していた。

阿九斗にはそれを見た瞬間に胸騒ぎのようなものがあった。

——あの怪物……僕に何か呼びかけているような……。

「あ、あれはなんなんだ？　知っているのか？」

阿九斗の様子に気づいた絢子が聞く。

「いや、わからない」

そう答えて、阿九斗は絢子を見た。彼女はひどく怯えているようだった。なにしろ巨大なナマコなのである。完全にナマコはトラウマになっているようだ。

「怖(こわ)いなら帰ってもいいよ。僕はあれを確かめに行くけれど」
阿九斗は言った。絢子は顔を強(こわ)ばらせていたが、即座(そくざ)に首を横に振った。
「私も行く。足手まといにはならない……けど……できれば……」
しかし、最初は勢い込んでいた言葉は段々と元気がなくなっていく。それを見て阿九斗は笑った。
「いいよ、無理はしなくて」
「ち、違う！」
絢子は即座に否定し、また小声に戻った。
「君が……君がいてくれるなら、なんとかなると思う」
阿九斗はそれを聞いて微笑(ほほえ)んだ。
「じゃあ、行こう。何か妙(みょう)な感じがあの怪物からするんだ」
阿九斗はそう言って歩きはじめた。
魔獣を見つけたとき、すでに宿舎からはかなり離(はな)れた位置まで来ていた。宿舎に戻って状況を確認(かくにん)するよりも、まっすぐに行ったほうが早いように思えた。
しかし、ほどなく阿九斗は立ち止まることになった。林の中の小道の向こうに背の高い男が立っていた。
浅黒い肌(はだ)にサングラス。そして白いロングコート。
「誰だ？」
阿九斗は警戒(けいかい)しつつ聞いた。あからさまに相手の格好が怪(あや)しい。

「自分でつけた名だが名乗っておこう！　俺はミスターＸ！」
　変態男はそう名乗った。
　その妙な態度に阿九斗は戸惑う。なによりその名前の間抜けさに戸惑う。
「……自分でつけた名前がそれなのか？」
　横合いから絢子も口を挟む。
「気をつけろ。きっと変質者だ」
「やかましい！　まったくアートを理解しないヤツだ！」
　ミスターＸは叫んだ。
「アート？」
「そうだ。魔王ってのは、もっとアートを理解するもんだと思ってた」
　ミスターＸは言い、立っていた場所から一歩横に動いた。彼の背後に隠されていた二人の人質が露わになった。
「あーちゃん！」
　泣き声をあげたのは全裸のけーなだった。ユキコもその横にいる。彼女らは首輪をかけられ、そこから伸びる鎖をミスターＸに握られていた。
「あんたが誰かとか聞く必要はまったくなかったようだな」

　阿九斗は声を低くした。その視線はまっすぐにミスターXを射抜いている。魔術師であろうとそうでなかろうと焼き尽くされそうな熱さのある視線だった。だが、ミスターXはにやりとしただけだった。

「怒ってるね。そういう感情の発露、好きだぜ」

「貴様、けーなに何をした！」

　絢子が叫ぶ。

「何もしてやしないさ。まだ、な。ただ、これからぶち殺すのを魔王様に見てもらおうと思ってさ。ここに来る前にちょいと始末してきた小僧はどうにも面白くなかったんでな」

　そうあざ笑うミスターXの言葉に絢子は顔を青くする。けーなはヒロシを追っていたはずだし、なにより妹のユキコまで一緒にいるということは……。

「まさか……」

　一方、阿九斗の顔からは完全に怒りの表情が消えた。穏やかな声になって聞く。

「その小僧とかをあんたが殺したってことか？」

「そうさ。知り合いか？　蹴って、蹴って、蹴って、湖に放り込んだ。泳げりゃ死んでないかもしれねぇが、ま、普通は泳げたところで泳ぐ体力が残るような蹴り方はしてねぇ」



「じゃあ、そのようにしよう」

「はぁ?」

「同じような目に遭（あ）わせてやるって言ってる。だけど、おぼれる水がこのあたりにないから、胃液でも借りるかな」

「何を言って……」

ミスターXはその言葉を言い終えることができなかった。身体がくの字に曲がっていた。みぞおちに阿九斗の前蹴りがめり込んでいる。

「ぐっ……くはっ……」

阿九斗が足を引くと、ミスターXは身体を折り曲げて胃の中のものを吐（は）いた。

「そこに顔を突っ込めって言ってるんだ!」

阿九斗はミスターXの後頭部にさらに蹴りを打ち込もうとする。

が、吐きながらもミスターXは後ろに跳（と）んで一撃をかわした。

——っ!

思わぬ速さに阿九斗は驚（おどろ）く。

そして、どうやら驚いていたのはミスターXも同じようだった。吐瀉物（としゃぶつ）を吐き終わると、心底から楽しそうに笑いはじめた。

「ひゃあああはははは！　こいつはすげぇ！　データより速いし、データよりもずいぶん気が短い！　そうでなくちゃアートじゃねぇ！　最初の言葉は訂正しよう！　さすが魔王はアートがわかってるぜぇ！」

ミスターXはけーなとユキコを繋いでいた鎖を引き寄せた。

「だが、どうやらあんたをなんとかしないうちはこいつらを始末できないって気づいたぜ。さてと、人質ってのは好きじゃないんだが、おとなしくして……」

ミスターXは最後までその言葉を言い終わることができなかった。阿九斗は先ほどよりも速く動いていた。ミスターXを殴りつけ、その身体を数メートルも吹き飛ばしている。

「ぐぅはっ！」

ミスターXは地面に叩きつけられた。

「いい加減、喧嘩慣れしたくはないんだけど、友達を殺したなんて聞いて、平然ともしていられないんだ」

阿九斗は言うと、殴った瞬間に奪い取っていた鎖を手で簡単に引きちぎった。

「あーちゃん！」

泣きながらすがりついてくるけーなの頭を軽く撫でてから、二人の首輪の鍵を指で壊して外した。

「待っててくれ。いろいろあいつから聞き出す」

阿九斗は言う。が、けーなは心配そうな目を阿九斗に向けた。

「あーちゃん……」

「ん？　大丈夫だよ、あんなのに負けるはずが……」

「違うよ」

「え？」

「殺しちゃ駄目だよ？」

　その言葉で阿九斗は我に返った。

——まいったな、言われるまで気づかなかった。どうやら、僕はあいつを殺すのを当然のことだと考えていたようだ。

「わかった」

　阿九斗はけーなに微笑んでうなずいた。そして、自分のシャツを脱いでけーなに被せ、絢子に目配せをする。絢子はうなずいて、けーなとユキコを連れてその場から少し距離を取った。

　そして阿九斗はミスターXに顔を戻した。

「何が目的だ？　ふざけたことをしやがって」

　ミスターXはようやく立ち上がったところだった。彼はまたも笑っていた。心底楽しそうな様子だった。

「いやぁ、凄い！　こりゃまったく普通にやってたんじゃかなわねぇや！」

「何がおかしい」

「いや、アートなことを体験すると、おかしくなっちまう性質なんだ！　あんたも笑いたくなるだろ、そういう時さ！」

「知らないね。僕はあんたが何をするつもりかを聞いている」
「ははっ！　朴念仁ぶりも相当なもんだ！　そいつもアートだぜ！　いやね、質問に答えるなら簡単な話なんだ」
　ミスターXは背後を指さした。魔獣が咆哮を上げながら前進していくのが見える。
「あれが村を滅ぼすのを黙って見てろ。俺はあんたをここで足止めすりゃいいのさ」
「何だって？　そんなことをして何の意味がある」
　さすがに阿九斗もその目的に疑問の声を出す。
「意味？　あるとしても教えるわけにはいかねぇ」
　ミスターXはあざ笑った。
「ともかく、通すわけにはいかねぇってこった」
「二度も蹴られたヤツが大きな口をきくじゃないか。殺しはしないが、二度と笑えないようにはしてやるさ」
　阿九斗は一歩踏み出した。
　このままだと魔獣は村を襲うだろう。そうなる前にここを突破しないといけない。
　と、そのときだった。
　ふと上空から聞こえてくる音に気づいた絢子が顔をあげ、声をあげた。
「あ！　あれは……！」

　阿九斗も空を見上げる。青空をクラスメイトたちが飛んで行くのが見えた。飛翔魔法が使えるいずれも腕自慢の生徒ばかりだ。それが五人編隊を組んでいる。宿舎からも魔獣が見えたのだろう。そして先生から攻撃の許可が出たに違いない。

「化け物に暴れさせるって？　そいつが目的なら意味がなかったな。どうやらみんなが何とかしてくれる」

　阿九斗は言ったが、ミスターXに目を移すと、彼の態度はまったく変わっていなかった。その不自然な余裕ぶりに阿九斗は疑問を抱く。

「まさか他に仲間がいるのか？」

　阿九斗は思わずそう言ったが、それをミスターXは否定した。

「違うね。結果がわかってるってだけだ」

　ミスターXは振り返らず、親指で魔獣の方を示した。

「ああっ！」

　絢子は息をのんだ。

　飛んで行った生徒たちが次々と失速し、地上に落ちていく。

「撃墜……？　いや、マナが……」

　阿九斗は魔獣がマナを吸収していることにすぐに気づいた。

「あの魔獣、周囲のマナを吸い取るのか！」

「そういうことだ。魔術師は勝てない。この島のナマコが魔獣になるとああいう特質を持つものになるらしい。実に素晴(すば)らしいじゃないか。自然の驚異(きょうい)というのはアートだな！」

「そこまでして村を壊滅(かいめつ)させたいってのか？　いや……」

阿九斗は考えをめぐらせた。

――相手が村を壊滅させる意味はなんだ？　壊滅そのものが狙(ねら)いではないだろう。ここに価値があるとも思えない。それならば魔獣を使うことが目的なのか？　だがマナを吸収するのだから彼もあれを制(せい)御(ぎょ)できていないことになる。だが、あいつに僕を近づけたくないってことは……。

阿九斗はひらめいた。

「つまり、僕はあの怪物(かいぶつ)に対抗(たいこう)する力があるんだな」

そう言ってから、先ほどから抱いていた不思議な感覚の意味に改めて気づいた。

――あの怪物に僕はシンパシーを感じている。考えたくはないけれど、あれと僕にはなんらかの関係がある……！

「あいつと、僕に関係がある……。つまり、僕が村を壊滅させたことにしたいんだな！」

阿九斗は、はっとして叫んだ。

「正解」

ミスターXは手を叩く。

「だが、そこまでわかっているなら、おとなしくしているがいいさ。こちとら基本的にはあんたの思い通りになるようにコトを進めてるだけだ。あんたはホントは魔王なんだ。そいつを認めなくちゃいけない」
ミスターXは、にやにやとしながら言った。
「ふざけるな。僕はそんなもんじゃない！」
阿九斗は否定したが、ミスターXはその抗議を聞いてはいなかった。
「あんたは素直に自分を出して生きちゃいるが、まだ気づいちゃいねぇ。あんたの心の奥底にこそホントのことがあるのさ。こっちはそいつを引き出す手伝いをしてるってわけさ。素直になるんだな」
「こっちの気持ちをわかっているようなことを言うじゃないか」
悪態をつきながらも、その言葉に、阿九斗は嫌な感覚がしていた。気づきたくないことに気づいてしまったような、そんな感覚だ。
——どちらにせよ僕を魔王に仕立て上げようとしている者が背後にいるわけだ。そして、そいつが立てた計画は、事前にあらゆることがわかっていなければ不可能なようにしか思えない……。未来予知とか、そういう……。
「あんたの背後には誰がいるんだ？　ころねの解任、様々な手回し。帝国政府がからんでいるとしか思えない。それに僕が魔王だと予言したシステム……。そういうことがすべて関係しているんだな？」
「そいつに答えるわけにいくか。それにしても、あんたは勘が良い。いい魔王になれるぜ」

「黙れ！　だったら、力ずくで聞き出してやる。それに、あの化け物も止めてみせるさ。どのみち、あんたをぶち倒すのは簡単だ」

阿九斗は突っ込んでいく。

「おっと！」

と、ミスターXは白いコートの前を開いた。

「なんだ？」

「へ、変態？」

突然のことに阿九斗は驚き、絢子は顔を赤らめた。

しかし、本当に驚くのはそこから先のことだった。白いコートの中は通常の服装だったが、コートの裏地にはスピーカーがずらりと並んでおり、そこからノイズ音が響いてきたのである。

金属同士をこする音、電子音、サンプリングされた肉声などが不規則な音となって、周囲に放たれる。

「ノイズ……？」

「ははっはぁ！　そうだ、こいつがノイズミュージックだ！　アートの最高峰、音楽の極みだ！」

ミスターXは自信たっぷりに言い、身体を痙攣のように動かしはじめた。

「やかましい、この変態が！」

阿九斗はミスターXに殴りかかる。が、その一撃をミスターXは簡単にかわした。

「何！」

阿九斗はたたらを踏む。

「ははははっはぁ！　なんの対策もなく魔王と戦うかよ！」

「どういう……」

阿九斗はミスターXに正対しようとした。しかし、今度はミスターXの方が速かった。その蹴りをみぞおちに食らってしまう。

「げふっ……！」

痛みと苦しみに悶絶した。呼吸ができず、内臓が痙攣するのを感じる。

——馬鹿な……マナを集中できない……。

本来なら、阿九斗の身体はマナで強化されている。どれだけ殴られても平然としていられるはずだった。

「これがノイズだ。俺は対魔術師戦闘のエキスパートでね」

「ノイズ……？」

阿九斗は顔をあげた。

「そうさ、人は予測できない音には心を乱される。つまり魔術の使用は、俺の音楽を聴いている限りは無理ってことさ！　どんなささいな魔術でも集中を乱されては使えない！」

ミスターXは阿九斗への追撃の手をゆるめなかった。さらに蹴りを加えてくる。みぞおちへの再びの一撃はクロスした両腕でガードしたが、即座に蹴りは顔面へと変化した。阿九斗は吹き飛ばされて背中から

地面に落ちる。
「そして、俺は俺のノイズを愛している！　これぞ至高の音楽だ！　つまり、俺だけは魔術的に身体を強化できる！」
かろうじて身体を起こした阿九斗に、今度は回し蹴りが飛んできた。なんとか後ろに跳んでかわしたが、そのまま回転したミスターＸは後ろ回し蹴りを放つ。これが見事に阿九斗の腹に突き刺さった。
「最後に魔術が無い状況下でも戦えるように鍛えた格闘技！　俺が俺のアートを駆使して戦うとき、魔王だって地を這う！」
ミスターＸは最後だと言わんばかりに、渾身の蹴りを阿九斗にたたき込んだ。さすがの阿九斗も頭から地面に倒れ込む。
「あーちゃん！」
「阿九斗！」
けーなと絢子が悲鳴をあげた。
ミスターＸは笑い声をあげた。
「心配するな！　魔王様だけは殺さねぇ！　この村を全滅させ、その罪をかぶってもらわなくちゃならないからな！　とはいっても、俺を目撃したヤツだけは殺さなくちゃならねぇけれど」
視線をけーなたちに移したミスターＸに、絢子は緊張の面持ちで身構えた。
「絢子ちゃん……」

心配そうな声をけーながあげる。

「魔術使用前提だが、体術は人より多く学んでいる。できるさ」

絢子はそう言ったが、震えている足は隠しようもなかった。

ミスターXは前進をはじめた。

「可哀想だが、構えを見れば俺には勝てないことくらいわかる。さて、一方的に痛めつけるのはアーティスティックじゃないが、やろうかね……」

○

湖に沈んでいくヒロシには、しかし、意識はあった。

――悔しいけれど、弱い自分を隠したかったのは本当だ……。

こんな状況なのに、浮かんでくるのは自分に対する悔やみ事ばかりだった。

強くなれなかった。いや、強くなることで責任が生まれるのが嫌だった。結局のところ、あらゆる言葉を尽くして逃げてきたのがこれまでの自分だった。

――ユキコ……。

妹の顔とあの言葉が脳裏に浮かぶ。

「お兄ちゃんは勇者だよね？」

そんなはずがない、と否定していたのは、みんなから馬鹿にされたくなかったからだ。大きな期待と責任を背負(せお)いたくなかったからだ。だが、そのことがユキコの期待を裏切ってきた。伝説を信じようと信じまいと、ユキコの期待を裏切ったことには変わりない。

——アニキ……。

阿九斗の顔も浮かんでくる。

自分が阿九斗に抱いていた期待も自分にだけ都合のいいものだった。阿九斗といれば強くならずに済んだというだけのことだ。伝説を信じていようといまいと、阿九斗に様々な勝手な期待を押(お)しつけていたことに変わりはない。

自分の実力よりも立場を低くすることで弱い自分でも大丈夫(だいじょうぶ)だと思いこんでいた。そうやってこれまでやってきたのだ。

その結果がこれだ。

目を開いた。青い湖が目に飛び込んでくる。今は湖の中は静かだった。

——ここでおぼれ死んでいいのか？　泳げればまだなんとかなるのに！

ヒロシはもがいた。

——泳げるようになりたい！　泳げなくてもいいなんて思ってたのは馬鹿だった！

苦しみにもがいているうち、ヒロシはそこがかつて見た場所だったことに気づいた。そこはあの祠(ほこら)につながる洞窟(どうくつ)がある場所だった。水中から地上に通じる穴があるのだ。

――泳げなくてもいい仕事につこうなんて思うより、泳げた方がいい。今からだってできる！　今からだって変われる！

目指す場所は決まった。洞窟に向かって必死に水を掻く。ほとんど意識を失いかけたが、水流が手助けをしてくれた。水は洞窟に向かって流れていたのだ。

洞窟の酸素がある場所に出て、ヒロシは大きく息を吸い込んだ。

まだ生きている。

人ひとり分しか通れないほどの広さしかないうす暗い洞窟の中で、ヒロシは決意を固めていた。

――生まれ変わろう。強くなろう。

ヒロシは歩きはじめた。

昔の記憶の通りだった。洞窟を行くと、光が見えてきた。外に通じている証拠だ。

そして、その道の途中に祠がある。勇者の証である剣が刺さっている岩がまつってある。

祠の前に立った。祠は自分の身長ほどの大きさしかない。その中にある勇者の証も、剣というには小さく、岩というには小さかった。ナイフが石に突き立っているだけだ。

ヒロシはそれに手をかけた。引く。抜けない。ただの石に見えたが、しっかりと地面にめり込んでいるようだ。

――やっぱり勇者になんて、なれないのか？

どれだけ力を込めても駄目だった。

――強くなろうと決意しただけじゃ駄目なのか？
そう考え、あきらめようとして、そのとき、その思考すら否定する新たな考えが自然と浮かんできた。
――いや、違う。すでに勇者なんだ。そう考えないと駄目なんだ。
再び剣を握る手に力を込めた。
――勇者なんだ。これが抜けたから勇者なんじゃない。
ずるり、と剣が抜ける感触があった。
――〝俺〟はすでに勇者なんだ。だが、そいつにふさわしい力がまだないだけだ。
「その力をこれから手に入れる」
ヒロシはつぶやいた。
それに応える声があった。
《認証終了。ようこそブレイブ》
――え？
その声は明らかに剣から聞こえてきていた。そのナイフほどしかない大きさの剣から。
「なんだ……？」
ヒロシが戸惑っていると、そのナイフは手の中で変形をはじめた。まるで甲虫の羽のように刃が開き、中から機械仕掛けの構造が覗く。驚いて見ているうち、それはヒロシの手首にまとわりつくように動いた。
「わっ！」

その変形はほどなく終了した。それは腕輪となってヒロシの手首にセットされた。

《私は対魔術戦闘専用ユニットD13。起動コマンドをご指定ください。デフォルトはブレイブ。変更ナシの場合は「ブレイブ」とお告げください》

「ブレイブ?」

《コマンド認証。起動テストを行ってください。コマンドは再度「ブレイブ」です》

その言葉が自分の脳裏に直接聞こえてくることにヒロシは驚いていた。だが、これはいわゆる魔術の念話とも微妙に異なっていた。そもそもこの場所にマナはないはずだ。自分の体内からもマナは消えている。

——これが勇者の力?　対魔術戦闘専用ユニット?

ヒロシは次の一言を口にした。

「ブレイブ」

《ユニット起動します。次元断層発生。使用者より五センチ以内の空間にある異物を排除》

ドン、という音とともに、ヒロシの身体の周囲を光が覆った。

「うわっ!」

《ユニット本体転送。転送に0.2秒を要します。転送終了》

何が起こったのかヒロシにはわからなかった。だが、まぶしさを感じた一瞬後には、視界が半透明な何かで覆われていることに気づいた。

——眼の前にバイザーがあるような……。

どうやらヘルメットをかぶせられたようだ、と、思うと、光の粒子（りゅうし）がその眼前のバイザーに映し出された。それが文字を形作る。半透明の文字表示が視界に浮かんでいるように見える。

《電装系正常。生命維持（いじ）装置正常。外気循環（じゅんかん）モード選択（せんたく）。核融合（かくゆうごう）エンジン起動は思考入力を行ってください》

脳裏に聞こえてくる言葉は、眼前に浮かぶ文字と同じだった。

——つまり、これは何かスーツを着せられたってことか。

ヒロシはそれを確かめるべく外に歩いていき、湖の水面に自らの姿を映した。

口のあたりがむき出しになったヘルメットをかぶっている。傍（はた）から見てそれがヒロシだとはわからないだろう。身体にぴったりのライダースーツをつけているようにも見えるが、素材がなんだかはわからない。手首のあたりに盛り上がったパーツがあり、そこにいくつか穴が空いている。

——これは、武装……？

手を顔の前にかざしてみる。どうやらそこに武器が内蔵されているような物騒（ぶっそう）な感じがする。後ろを向いて首を回してみると、背中にも武装らしき盛り上がりがある。

——こいつは、何だ？

そう考えると、再び声が聞こえてきた。

《マニュアル表示します。ヘルプは右下のイルカに思考入力を行ってください》

視界に文字表示が飛び込んでくる。今度はその右下にイルカのキャラクターまで表示されていた。うっとうしいな、と思いながらそれを見ると、イルカの表示は消えた。

《武装の起動には核融合エンジンの起動が必要です。核融合エンジンの起動には思考入力を行ってください》

――なるほど、思考入力というのは、考えればそのように動いてくれるのか。そして、核融合エンジンということは……。

《本ユニットはマナがない場所での行動が可能です。さらにマナの吸収、破壊（はかい）の機能も使用することができます。対魔術戦闘に役立つことを保証いたします》

――マナを使用しない独立したユニットなんだ！

ヒロシは興奮した。

――これがあればあの変態男も、あの魔獣（まじゅう）も……！

○

「……一方的に痛めつけるのはアーティスティックじゃないが、やろうかね」

ミスターXはそう言って絢子たちに迫（せま）った。コートの前を開きながら。

絢子は額に汗（あせ）の球を浮かべながらも身構える。

「絢子ちゃん……」
けーなが心配そうな声をあげる。勝てないのは誰の目から見ても明らかだった。だが、絢子は強がる。
「うるさい！　あいつの見ている前でだけは死にたくないじゃない。あんたも私も！」
あいつ、というのは阿九斗のことなのは、けーなにもわかった。けーなは力強くうなずく。と、その声が聞こえていたのか、ミスターXの背後で阿九斗がむくりと起きあがった。
「……僕がまだ動いているうちに勝手なことをするんじゃない」
阿九斗が声をあげると、ミスターXは阿九斗の方を見やり、嬉しそうに笑う。
「やったね！　こりゃ予想外だ！　予想外のことはすべて素晴らしいアートだ！」
「予想外のことが好きなら、予想通りに事を進めるもんじゃないよ。予言とか、何を仕込んでいるのか知らないが、あんたの上司に言っておいてくれ」
阿九斗はぼやく。そして身構えた。
「予言については俺も気に入ってないさ。それでも、やるしかないんだよ。だが、その中でも不確定なことは起きるし、これからやってくるのは混沌だ。俺はそいつが嬉しくてならないな！」
ミスターXはにやついている。
「さて、立ったのはいいが、対策はできてるのか？　楽しませてくれないと嫌だぜ。俺はあんたを始末できないんだから」
そう言われて阿九斗は両手で耳を塞いだ。

「はっはぁ！　そいつはいいアイデアだ！　ノイズが聞こえなければ勝てるってか？」

ミスターXは阿九斗に向かって前進。蹴りを放つ。阿九斗はそれを防御できなかった。両耳を塞いでいた手ごとはじき飛ばされる。

「ぐっ！」

「聞こえなきゃいいってわけじゃないのさ！　俺のノイズは全身で感じることができる振動でもある！　そいつこそが一流のノイズの証！　俺は音を出さずともノイズを生み出せる！　あんたも感じたはずだ！　あの夜の林で俺があんたの体内マナの固有振動を写し取ったときに！」

ミスターXは足を振りながら奇妙な痙攣ダンスをはじめた。身体を反らせ、叫び、ぐるぐると回転する。

――そうか、あの夜の頭痛は……。

阿九斗はユキコを巻き込んでしまった夜のことを思い出していた。あれはミスターXの仕業だったらしい。だが、それが今わかったところで、問題は別にある。

――畜生……もうどうにもできないのか？

阿九斗は地面に転がったまま天を見上げた。その視界の端に魔獣が暴れているのが見える。やかましく聞こえてくるノイズに混じって、遠くから村人たちの悲鳴が聞こえてくる。おそらく村は魔獣に踏みつぶされているのだろう。魔獣の下方には火の手が見える。村にも腕自慢はいたろうが、マナが使えない状況ではどうにもなるまい。この状況ではクラスメイトたちも逃げ出しているだろう。魔獣は暴れるがまま

に暴れ、破壊の限りを尽くしている。まさに地獄絵図だ。しかも、それを生み出している原因の一端は自分にもある。

――いや、身体が動くうちは、なんとかしないとな……。

指を動かしてみたら動いたので、阿九斗はなんとかしなければ、と思うが、どうにも立ち上がるほどの力はない。

――しかし、立ち上がったところで、なんとかする手段がない……。

まずはどうすべきか考えようとしたが、ノイズのせいで集中できない。苛立ちだけが強まっていく。周囲で行われている破壊と、その中で何もできないもどかしさと恐怖に叫び出したくなる。

ミスターXは再びターゲットを絢子とけーなに絞ったらしい。そちらににじり寄っていく変態の姿が見える。

――あの二人だけは守らないと……。僕が魔王と言われようと普通に接してくれたけーなや、僕のことを理解してくれた絢子まで失うわけにはいかない。

自分が殺されようとしているのに、けーなも絢子も阿九斗の方を心配そうに見ていた。

その二人の顔を見ていると、阿九斗にふと考えが浮かんだ。

――そうか！

「待て」

阿九斗は立ち上がった。

驚いてミスターXが振り返る。

「まだ立つのか！　だがそろそろ不快になってきたぜ。同じフレーズのリフレインはノイズじゃねぇ！　つまりアートじゃねぇってこったからな！」

「ふふ……ふふふ……ははは……あはははは……」

阿九斗は肩を震わせて笑いはじめた。

「あん？」

ミスターXはいぶかしむ。

しかし、阿九斗の笑い声はさらに高くなった。

「ひゃあはっはっははははは！」

「な、なにを笑っていやがる、こいつ！」

さすがのミスターXの顔にも狼狽の色が見える。

ひとしきり笑った阿九斗は、口元に不敵な笑みを浮かべた。

「よくわかった。あんたの言うノイズってやつのことが。つまり、こいつはあんたの音楽であり、あんたの魂の叫びなんだ」

「そ、そいつはその通りだ。だが、それがわかったからどうした」

「ということは、僕の魂の叫びの方が大きければ、何の問題もなく行動できるってことだ」

阿九斗は堂々と言い放った。

　しかし、それを聞いたミスターXの顔からは狼狽の色が消え去る。ほっとしたように笑みを浮かべると、阿九斗をあざ笑った。

「それでノイズが消せるなら誰も苦労しねぇ！　何人もそんなことを言いながら俺に倒（たお）されたんだよ！　ノイズは予測不可能！」

「予測不可能なら気にしなければいい！　どっちにしろ僕の声で消してやる！　魔王だかなんだか知らないが僕は僕だ。そのことだけはもう譲（ゆず）らない。気に入らないことはぶっ飛ばす。もちろんあんたも気に入らない」

　阿九斗は前進した。

「無駄（むだ）だ！　ノイズの海に沈（しず）め！」

　ミスターXは阿九斗に何度目かの蹴りを打ち込む。その蹴りは阿九斗に命中した。いや、阿九斗は避（よ）けもしなかった。

「あんたをぶっ壊（こわ）してその身体地中に埋（う）めてやる！　あんたが泣こうがわめこうがそう決めた！」

　阿九斗は叫んだ。

　ミスターXの顔色が変わる。足に伝わる感触（かんしょく）が明らかに異常だった。阿九斗の身体が金属のように感じられていた。

「魔力（まりょく）のコントロールができているってのか！」

「そういうことだ！　あんたに感謝することもある。心からの絶叫ってやつを教えてくれた。だからといってぶちのめすのをやめたりはしないがな！」

阿九斗の声量は自らの身体全体を振動させ、ノイズによるそれを打ち消していた。

「ちぃいい！」

ミスターＸはノイズの音量を上げる。阿九斗はさらに叫び声を大きくした。

「いいからぶっ倒れろ！　あんたが蹴り飛ばした分を殴り飛ばしてやる！」

阿九斗の一撃がミスターＸの顔面に炸裂した。

ミスターＸは回転しながら吹き飛び、背中から地面に叩きつけられる。

「がっはあぁ！」

苦しげな息を吐き出したミスターＸだが、やがて呼吸を取り戻すと、仰向けのままでいきなり空に向かって笑いはじめた。

「はははははは！　アートを理解してくれたとは嬉しいぜ。だがこっちはなんと言われようと大きな目的のために動いているんだ。そいつは最大のアートさ。あんたもきっと気に入るぜ。戦争と戦争と戦争！　そいつがアートの最後の表現だ。心に響くアートはすべて戦争が生み出した。あんたも魔王とか以前にそういうタイプの人間なんだ。仕組まれた運命から逃れようとしても生き方は曲げられねぇ。過去の独裁者の大半は天才で、魅力的で、すべて芸術を理解した。あんたもその系譜に連なる一人だ！　あんたは知

らず知らずのうちに周囲の者を犠牲にしていく！　今だってあんたが我を張るたびに女が順番に犠牲になっていくんだ！　ははははは！」

ミスターXのその叫びは、おそらくは敗北を覚悟しての負け惜しみのようなものだっただろう。だが、その言葉は阿九斗を動揺させた。

「ふざけたことを言うな！」

阿九斗は叫ぶが、その声には先ほどまでの張りがなかった。ミスターXは倒れたままだったが、それでもその動揺を見抜いていた。

「なるほど、そこが弱点か。ノイズだけでなく、精神戦ならこっちの方が上でね」

ミスターXは顔をあげた。

阿九斗はミスターXの言葉でころねのことを思い出してしまっていた。

――僕のせいで犠牲になる人がいる……。

動けなくなってしまっていた阿九斗に、再びノイズの効果が現れる。立ち上がったミスターXの攻撃は、先ほど阿九斗に殴られたダメージが抜けていないのか、さして威力のあるものではないが、それでも阿九斗は耐えきれずにうずくまる。

それを見た絢子が声をあげる。

「やめろ！　私が相手になる！」

しかし、そう言った絢子の足は震えていた。

ミスターXはもはや相手をするのも面倒だというように肩をすくめた。
「俺もそろそろ付き合いきれなくなってきた。簡単にいかせてもらうぜ。こんなやり方アートじゃないが」
白いコートの懐からミスターXは詠唱銃を抜き出した。今、魔術が使えない絢子相手には致命傷になりうる武器だ。
「やめろ！」
絢子がけーなをかばい、けーながユキコをかばって身体を丸めた。
それに気づいて顔をあげた阿九斗が叫ぶ。
「やめろったって、言われた通りにしないのがノイズの真髄さ」
ミスターXは引き金を引いた。
発射音が響き、銃弾は絢子目指して飛翔。爆発の魔術が仕込まれたその銃弾が絢子たちの目前で炸裂し、その爆炎が絢子たちを飲み込む。
阿九斗は声にならない叫びをあげた。
が……。
「情けないことです。やはり私がいないと何もできないんですか」
淡々とした声がどこからか聞こえてきた。
「な……誰だ？」
ミスターXが戸惑いの声をあげる。

阿九斗にはもちろんその声に聞き覚えがあった。
「こ、ころね……帰ってきてくれたのか……？」
「ええ、帰ってきました」
ころねは爆炎の中から、ぬう、と現れた。手に持っていたマント状の布を一振(ひとふ)りすると、炎と煙(けむり)が消し飛んでいく。ころねの背後には絢子たちが無傷でうずくまっている。
「持っていて安心の防災マントです」
ころねは防災マントを高く掲(かか)げた。
「ころね！」
「ころねちゃん……！」
絢子とけーなが声をあげる。ころねは振(ふ)り返って無表情のままVサインを出した。
「話せば長くなりますが、司法取引の末に帰ってきました」
そして、ころねはミスターXの方を指さす。
「C-MO8、コードネーム、ミスターX。あなたの現在の行動は情報官の関知するところでないとされました。故(ゆえ)に私は、紗伊阿九斗の監視員(かんしいん)として、紗伊阿九斗を保護するために、あなたを無力化します」
「あの詠唱弾(えいしょうだん)は人造人間の頭脳をいかれさせるものだったはずだ！　そいつを喰(く)らっておきながら無事だったとは！」
ミスターXが驚(おどろ)きの声をあげる。


火の
安全第

「私は特別製なのです」
ころねは言うと、ミスターXに歩み寄る。ミスターXはコートの前を拡(ひろ)げ、ノイズをころねに浴びせかけた。
「無駄です。私はそれには影響(えいきょう)されません」
ころねはミスターXのすぐ前に迫(せま)る。
「ちぃ！」
ミスターXは得意の蹴(け)りをころねに放った。
「無駄です」
ころねはそれを片手で受け止める。
「私が片づけてもいいのですが、ここはやはり阿九斗さんに譲ります」
そう言って、ころねはポシェットから新たな道具を出した。棒状のそれを高く掲げる。
「マジカルバット！　これは一見ただの金属バットですが、結局のところやはり金属バットです」
「なんだよそれ……」
阿九斗は苦笑いを浮かべるが、その笑みは余裕(よゆう)を取り戻したものだった。
「道具はいらないよ。君が帰ってきて落ち着いたから」
「話はあとでゆっくりと。今はひとつだけ。私はあなたのために苦しい思いをしたことはありません。これからもないでしょう」

「そんな言葉を聞ければ、あとは大丈夫」
阿九斗はころねを下がらせ、ミスターXの前に立った。
「続きをやろう。女の子に任せておくわけにはいかない」
にやりとする阿九斗に、ミスターXはこれを最期と決めたか、あの奇妙な絶叫を天に向かって放ち、ノイズを最大にして向かってきた。
阿九斗とミスターXは突きと蹴りを激しく打ち合わせた。
しかし、ノイズを打ち消す集中力を発揮しはじめた阿九斗の敵ではなかった。
やがてミスターXのノイズが飲み込まれる時が来た。
阿九斗の一撃がミスターXの腹部に打ち込まれていた。ミスターXの絶叫が止まり、スピーカーからのノイズも消えていった。
「負けた……。見事なアートだった。だが、もうこっちの作戦は成功したも同然だ。村人たちは魔王の恐怖を広め、やがて学院からお前を追い出す。そうなったら、お前は死ぬか帝国に抵抗して反乱するかを選ばなきゃならなくなるぞ」
ミスターXは途切れがちな声で告げる。
「大丈夫さ。どうやら僕だって一人じゃない」
阿九斗はころねたちの方を見ながら言った。
「けっ……女ったらしが……」

捨て台詞を残してミスターＸは崩れ落ちた。

「終わりましたね」

ころねが近寄ってきて阿九斗を見上げた。

阿九斗はその目を見ていると、ようやく落ち着いてきた。それと同時に照れくさい感情が一気にわき上がってくる。

「よ、よく帰ってきてくれたね」

「はい」

ころねはうなずいた。その表情には喜びのようなものが感じられた。

「え、えーと……」

阿九斗がなんと言っていいのか困っていると、ころねはすべてわかっているというようにうなずいてから、

「でも、挨拶の前に、あちらのことも残っていますよ」

ころねが魔獣の方向を指さした。

――そうだ。まだあれが残っていた。

阿九斗は魔獣が村を破壊しているのを見た。筒状の身体の頂点から白い線が束ねられたようなものを吐き出している。内臓なのだろう。さすがにナマコの形をしているだけある。ただ、それがナマコと違うのは、内臓をかけられた建物が内臓とともに溶け始めていることだ。さらには、内臓の再生速度も尋常ではないらしい。すぐさま次の内臓が吐き出されている。

「ちょ、ちょっとあれは……」
　絢子が恐怖の声をあげる。
　故郷の村を破壊されているユキコは泣き出していて、それをけーなが慰めている。
「早く行きましょう」
　ころねが言った。
　阿九斗はうなずいたが、その時、魔獣の方向の空に、昼間であるのに流星のような光を見つけた。
　——なんだ、あれは？
　それは空からやってきて、確実に魔獣に向かって突き進んでいた。

○

《出力は左上のゲージを参照してください。エネルギー転送が不良の際は再起動が必要です。本体バッテリーは飛翔時には五分の容量を持っています》
　ヒロシはその解説を聞きながら、このスーツが魔術文明の産物でないことを実感としてわかりはじめていた。マナのそれと違い、身体に力がわいてくるような感覚はない。さらに大気中のマナを制御して飛翔しているときの風に乗るような感触とは違い、重力から解放されたような浮遊感がある。スタイルや人間

が使うことを前提として作られているからには異文明というほどの差違はない。マナを使用することを前提として作られている文明以前に研究されていたもののように思える。

——どれほどの力があるんだろう？

ヒロシはそれを疑問に思った。なにしろ身体にわいてくる力を感じない以上、体感としては戦闘能力を測れない。それでも下方に魔獣が見え、それが村を破壊しているのを見ると、なんとかしなくては、と思う。

——やれるのか？　やるしかないか。

変態男を追わねば、とは思ったが、今まさに実家が魔獣に押しつぶされようとしていた。それを放っておけるはずがない。両親は家から少しだけ離れたところから魔獣に向かって猟銃を撃っていた。もちろん魔獣に効いている様子はない。

ヒロシはそちらに向かって加速した。スーツはイメージをそのまま実行してくれる力があった。重力がないかのように飛翔するスーツは一気に魔獣への距離を縮めてくれる。

——速い！

しかも身体にはほとんど負担を感じなかった。これはいける、とヒロシは思う。

「武器はないのか？」

ヒロシがそう口にすると音声が答える。

《右手に高周波ブレード。振動の制御により対人の殴打武器としても使用できます。対象の捕縛など命を奪わず無力化したい時にお勧めです。左手に単分子カッター。非生物の切断に使用できます。生物への使用は確実に対象の命を奪うため注意が必要です。さらにこの武器は他次元の本体からの転送が必要です。背中にはレーザーが六門。一門ずつの発射も可能です。六発ごとにエネルギーの転送が必要です。再発射までに一分を要します。以上が基本装備です。オプションについてはリンク先を参照してください》

「大体のところは理解できた」

ヒロシは魔獣の眼前を横切るように飛んだ。注意を惹きつけるためだ。もっとも目の位置はわからなかったから、前進していく方を横切っただけだ。

すると魔獣はヒロシの存在に気づいたらしい。筒状の身体をよじって頭をヒロシの方に向けてくる。

——よし、こっちだ！

ヒロシは魔獣の誘導に成功したことに満足する。両親の姿をちらりと確認する。母は驚いた顔をしていたが、父はそうではなかった。どこか落ち着いた顔でこちらを見ていた。

——やっぱり、何か知っているのか。

そうヒロシは思ったが、考えている暇はなかった。魔獣がその口から白い線状の内臓を吹き出してきたのだ。

——っと！

ヒロシはそれをかわす。イメージだけでそれが成し遂げられたことに感嘆する。

――これは馴染む！

内臓は独立した生き物のように動き、ほとんど予測不可能な動きでヒロシを追ってきたが、バイザーに映し出される映像が後方までもカバーしていた。後方視界がバックミラーのようなものだと気づくと、三百六十度の立体映像を脳裏に思い浮かべることができた。内臓の動きを見てからかわすことが可能だった。さらに高速で接近するものを自動で避ける機能もあるようだ。気づかなかった内臓の接近もいつのまにか回避していた。下からは触手のような内臓の間を縫うように飛ぶ光の線のように見えたはずだ。

――レーザー！

ヒロシは念じた。光り輝く一門のレーザーが背中から後方に向けて放たれ、跳びかかる前のヘビが首をもたげるかのごとくにぐにゃりと曲がると、そこからは一直線に魔獣に向かっていく。

魔獣が咆えた。そのヒョウ柄の体表に焼け焦げが浮かび、体液が蒸発する煙がそこから立ちのぼりはじめる。そこから横なぎにレーザーが奔ると傷口は拡がり、レーザーの軌道を横切った内臓はやはり煙をあげて切断され、地面に落ちた。

――すげぇ！

ヒロシは興奮していた。が、一瞬後に、その興奮を自らでいさめる。

――いや、調子に乗ってもしょうがない。下手にやると被害は拡がる。

魔獣は苦しみにのたうっていた。そのために結局、実家が巻き込まれていた。さらに落ちた内臓が周囲の建物を溶かしはじめている。

――一気にケリをつけないと……。

「大型物体破壊のための兵器はないのか？」

《対物兵器は二種類。どちらもオプションとなっています。ひとつは核融合爆弾。転送して装備します。半径三キロを焦土にします。投下後は五秒以内に三キロメートル離れてください。上空三キロメートルからの使用をお勧めします。放射線シールドされていない半径五キロ以内の生物は生命の危険があります》

「……もうひとつは？」

《高温プラズマ球。プラズマを力場で圧縮した球体をスーツの周囲に展開、対象に接触した瞬間に力場を解放することで対象を溶解します。スーツのバッテリーでは使用できません。再使用には五分を要します》

「そっちにしよう」

《耐熱マント転送》

そう告げられた次の瞬間、スーツの周囲に布製のように見えるマントが出現する。

《プラズマ球転送》

マントのさらに周囲に光の球体が出現した。これを接触させればいいらしい。

――つまり、これはこのまま相手に突っ込めってことか。

ヒロシは下でのたうっている魔獣を見た。あの身体の中を突き抜けるように移動すれば、ナマコの化け物を熱で溶かしてしまうことができるらしい。



——やってみるか。

ヒロシは一旦(いったん)スーツを上昇(じょうしょう)させ、その後反転、一気に魔獣に向かって加速した。

スーツを包(つつ)むマントがひるがえり、プラズマ球がその周囲で回転をはじめる。やがてヒロシは激しく回転するエネルギーの塊(かたまり)となった。

《プラズマ球固定力場良好。接触後解放までの時間を一ナノセカンドにセット。対閃光(せんこう)バイザーの可視光透過率(とうかりつ)を現在の二十三パーセントから一パーセント以下へ。次元断層フィールド展開。五秒後に対象に接触します》

急速に魔獣に接近しているが、不思議と恐怖(きょうふ)はなかった。

——これが、力を持つってことか。

ヒロシはそう思った。

魔獣の口から中にエネルギーの塊となって突っ込み、数秒も経(た)たずに再び上空に戻(もど)る。振(ふ)り返ると魔獣は内側から弾(はじ)け、断末魔(だんまつま)の叫(さけ)びをあげることもなく蒸発する褐色(かっしょく)の物体と化していた。

——これがあれば、誰かを片づけるなんて簡単なことじゃないか!

ぞっとするものをヒロシは感じていた。明らかに自分には過ぎた力だった。

しかし……。

——誰かを守ることも簡単なことだ!

下を見ると、村人たちが疲（つか）れ切（き）ってはいるものの、驚愕（きょうがく）と安堵（あんど）の入り交じった不思議な表情でこちらを見ていた。その顔からするに、空を飛んでいる謎（なぞ）の勇者がヒロシと気づいている者はいないようだ。

皆（みな）が救われたことを感謝しつつも、勇者が何者かを不安に思っている姿を見て、ヒロシは何か言わなくてはと思った。

《スーツ着用者の保護のため、音声は変換（へんかん）できます》

思考を読み取ったらしく、サポートの声がかかる。

ヒロシはやや迷った後、手を振ってこう呼びかけた。

「俺はブレイブ。伝説の勇者だ」

○

離れた位置からではあったが、阿九斗は何が起こったのかを認識（にんしき）していた。周囲にマナがないというのに空を飛ぶことができる何者かが魔獣（まじゅう）を倒（たお）したのだ。

「なんだ、あれは？」

阿九斗は誰に聞くともなく言ったが、もちろんそれに答える者はいなかった。

絢子もけーなも、ころねさえもが驚（おどろ）いてそちらを見ている。

「まさか、あれが伝説の勇者ってことは……」

絢子がつぶやく。

阿九斗もそれを否定はできなかった。

「だけど、予言が本当なんて……」

だが、そう言った次の瞬間には、阿九斗も言葉を失う事態が起こった。その勇者が空を飛んで近づいてきたのだ。

重力がないかのように飛翔してきた勇者は、阿九斗たちが見守る目の前に着地した。

ヘルメットと全身をぴったりと覆うスーツ姿の男だ。背は低いが、その攻撃力は先ほど見ての通りだ。

阿九斗は緊張して身体を強ばらせる。

「君は……？」

阿九斗がそう呼びかけたが、勇者はそれには答えなかった。が、勇者の目線が阿九斗の背後に倒れているミスターXの方を向いたかと思った刹那、勇者の姿は阿九斗の視界から消えていた。

「え？」

阿九斗が周囲を確認し、再び勇者の姿を見つけた時には遅かった。勇者はミスターXの身体を高く蹴り上げていた。息はあったがすでにその力を失っていたミスターXは天高く舞う。

——いけない！

阿九斗は止めようとしたが、どうにもできなかった。その次の瞬間には、勇者は地上からその姿を消していた。蹴り上げたミスターXのすぐ横の空中に浮いている。そのまま勇者は横蹴りをミスターXに見舞

う。ミスターXの身体は宙を遙か彼方まで飛んでいった。

遠くで水音がした。ミスターXは海に落ちたのだろう。

——殺した？

阿九斗はそう直感した。

「何をするんだ！」

怒りが瞬間的にこみ上げてくる。理由がなんであれ人殺しは阿九斗の嫌うところだった。

再び地上に降りてくる勇者に阿九斗は大股で歩み寄る。

阿九斗と勇者はにらみ合った。

それを見ていた絢子は、その二人の間に流れる空気が今まで感じたことのないものであることに戸惑う。これまで阿九斗と殴り合った者たちの間にあった緊張感は、良くも悪くもすべてをぶつけ合うような熱さにあふれたものだったが、この二人の間の緊張感は、一度殴り合いをはじめてしまうと取り返しがつかなくなってしまうような冷たさがあった。

「なぜ彼を襲った？」

阿九斗は言った。

「皆を守るために望んで手に入れた力だ。彼を消し去らなければこの島は守れない」

勇者が答えた。阿九斗はその言葉に反発を感じた。

「そいつは間違ってるよ。もっとうまいやり方はあったはずだ」

それから二人は無言で向かい合った。

「あ！」

と、その時、それまで呆然(ぼうぜん)としていたユキコが声をあげた。姿形と振る舞い、そしてその行動から勇者の正体に気づいたのだ。だが、その声が二人の間の緊張を弾けさせてしまった。阿九斗と勇者の右拳(こぶし)が交錯(こうさく)する。

ギィン！

乾(かわ)いた音が響(ひび)く。

阿九斗の拳を勇者の左手が受け止めていた。

勇者の拳を阿九斗の左手が受け止めていた。

やがてどちらからともなく二人は距離(きょり)を取った。

無言で勇者は空に浮(う)かぶ。そして阿九斗が見ている前で、遙か上空まで飛び上がり、やがてその姿は青空へ消えた。

――終わった……のか？

阿九斗は皆の顔を見る。絢子もけーなも安堵した表情をしていた。そして、傍(そば)にころねもいる。あとは足りないのはヒロシだけだ。

――まさか、こんなところで死んでしまうなんて……。

阿九斗がそう思ったとき、道の向こうからもう聞けないかと思っていたその声が聞こえてきた。

「アニキぃ！　ユキコぉ！」
はっとして阿九斗はそちらを見る。
ヒロシが手を振って走ってきていた。
「お兄ちゃん！」
ユキコが顔をほころばせた。ヒロシに向かって走っていく。
「生きていたのか……良かった……」
阿九斗は抱き合うヒロシとユキコを見て、ほっとしてその場にへたり込んだ。
すると、そんな阿九斗の前にころねが立つ。へたり込んだ阿九斗に手を貸して立たせると、そのまま阿九斗の腰に手を回してしっかりと阿九斗に抱きついた。
「帰ってくるまでには、それなりに大変だったんですよ？」
ころねは上目遣いで言った。その口調には少しからかうような色があったが、阿九斗はそれを照れ隠しだと思った。
「わかってるよ。褒めて欲しいんだろ？」
阿九斗はころねの頭に手を置いた。

5　まだトラブルは続く？

「すごいね、あれは誰だったんだろうね！」
　村への道すがら、けーなは興奮してユキコに話していた。
　本当にわかっていないのかな？　という目でユキコはけーなを見返した。確かにけーなは本当にわかっていないようだった。
　ヒロシは、ユキコとけーなとともに村に戻っていた。けーなを連れてきたのは自分の秘密に気づいているだろうと思ったからだったが、どうやら杞憂だったらしい。これなら、学校の人々にはスーツのことを秘密にしておける。
「父さん……」
　そして壊れた家の前で、ヒロシは両親と顔を合わせた。
　ヒロシが近づくと、父はユキコとけーなを母に任せ、壊れた家の裏にヒロシを連れて行った。そして誰も聞いていないのを確認すると、ヒロシの手をとった。
「あれは、お前だな？」
　ヒロシが無言でうなずくと、父は秘密を話しはじめた。

「あれはお前のお祖父さんが残したものだ。伝説もお祖父さんが残した。だが、詳しいことを知っているわけじゃないんだ。ふらりと島に現れた男が、あのスーツと伝説を託して去っていったというんだからね。いずれ家の血筋の人間がそのスーツを使うだろうと言われていた。小さい時に自分もあのスーツを見ていたからね。信じる他はなかったよ」

「でも、それじゃあ、本物の予知能力者がいたってことに……」

ヒロシは戸惑って聞いた。

「それはわからない。予知なんてあり得ないとされているからね。あの男が適当に我が家を選んだのか、勇者の血筋なんてものが本当にあるのかはわからない。ただ、あのスーツの危険性を考えれば、私はそのまま伝説を守り続けるしかなかった。それで負担をかけたとは思うが、あれは今はお前しか使えないものだ。使い方はお前が考えろ」

父はそう言ってヒロシを送り出した。

それから父は島の人々に聞かれても、ヒロシが勇者だとは認めなかった。やがて村人もそのことは問わなくなったが、ヒロシのことを陰で馬鹿にする者はいなくなった。

島から学院に戻る時、見送りに来たユキコが何か言いたげにしていたので、ヒロシはユキコの頭を撫でて「秘密だぞ」とだけ言った。それですべて通じたようだった。

しかし、ヒロシの気分は晴れはしなかった。ミスターXの処遇について阿九斗と対立したことが引っかかっていた。第一、自分には過ぎた力だ。あの予言のこともある。最終的には、勇者は魔王を倒すのだ。

——まさか、そんなことはないよな。だってアニキと戦わなければいい話なんだし。
ヒロシはそう考えて暗い気分を振り払おうとした。
それでも気になっていたのは、父から聞いたスーツを島に持ち込んだ男の名だ。
その男の名前は大和望一郎といったのだそうだ。

○

「……というわけで帰ってきたのです」

宿舎に帰ってきたころねが説明を終えた。今はヒロシがけーなを連れて実家に戻っている最中だ。阿九斗の部屋にいるのはあとは絢子だけだ。

つまりはこういうことだった。内閣魔術情報調査室の噂を知っていたころねは、林で阿九斗を襲ってきた相手に気づき、内閣府に行くとその情報を元に彼らの上司である情報官を脅迫したのだった。情報官は、情報調査室の暴走を知らなかったようで、詫びるとともに、ころねたちマークト教会の阿九斗監視に対する権限を認めざるを得なくなったらしい。

「そもそも情報調査室の暴走を陰で操っている何者かがいるという話です。困ったもので、このように裏では政治的な駆け引きが行われているのです」

確かに阿九斗には話の大半の部分は理解できなかったが、どうやら阿九斗の起こすとされている騒動が政治の話なのか、治安維持の話なのかで部署が違い、それがやり合っているということのようだ。

だが、その話だけでは、林でのころねの態度の意味は説明できなかった。

「じゃあ、解任というのは？」

そう聞くと、ころねはうなずいた。

「大まかには解決したのですが、実はまだ課題が残っています」

「え？」

「内閣府に向かった際に伺ったのですが、あなた方は例の命令について知ってしまったとのこと。どうやら学院側より抗議があったという事情を伺いました。江藤さんのルートから漏れたのでしょうか」

「じゃあ、あの色仕掛けってやつは、もう無効に……」

「それがまだ無効にはなっていません。私には命令が下されたままです。方針を変えるつもりはないようです」

「え？」

さすがにこれには阿九斗も驚く。

「だって、僕が知ってしまったら、それが通用するはずもないじゃないか」

するとそれを聞いたころねが、なぜか阿九斗への疑問を口にする。

「何か誤解してはいませんか？」

「誤解？」
「はい。計画は、あなたを女性関係でコントロールすることです。露呈したとて、あなたがその気になればいいのです」
　ころねは真面目な顔で言った。
「だからさ。それを聞いたら僕が君にその気になるってことはないだろうに」
　阿九斗が言うと、ころねは即座に反論した。
「そこが誤解なのです。私は、あなたが女性関係に疎いので性的に教育しようとしていただけです。相手は私ではありません」
「は？」
　阿九斗もこれには絶句する。
　すると、ころねは続けた。
「家柄が良い女性と結婚させるのが計画です。ばれてしまったからには直接にお願いします。阿九斗さん、絢子さんと結婚してください。お見合いの席は来月にでも用意させて頂きます」
「な……」
「は……」
　これには阿九斗も絢子も顔を強ばらせた。そんな二人の様子を知ってか知らずか、ころねはさらに続ける。

「あの林での様子で阿九斗さんはけーなさんが好きなのだと思い、失敗したかと思いました。けーなさんは家柄がないため、彼女と関係を持っても阿九斗さんの現状が変わらないからです。しかし、どうやら進展はなかった様子。それならば絢子さんと結婚して、彼女の家に入ってください。問題はすべて解決します。けーなさんを忘れられないなら、二号さんとして囲ってください。それだけの収入は得られるでしょう」

ころねは凄(すさ)まじいことを平然と言った。

阿九斗はまだ混乱していたが、それでころねの謎(なぞ)の行動の意味は理解できた。

——とはいえ……。

絢子の方をちらりと見た。絢子はなぜか正座して、口を真一文字にして硬直(こうちょく)していたが、阿九斗の視線に気づくと、痙攣(けいれん)したように口をぴくぴくさせはじめた。

「ね、ねぇ……そんな無茶(むちゃ)なこと……」

阿九斗がそう口を開くと、絢子は口をもごもごさせ、わけのわからぬ言葉を漏らしはじめた。

「ひゃっ……ひょっ……にょ……け、け、結婚?」

そして絢子は、阿九斗の顔を見据(みす)えると、もう何を言っていいかわからないという顔になり、突然(とつぜん)に絶叫(ぜっきょう)して部屋を出て行ってしまう。

「う、う、うわぁああ!」

「ちょ、ちょっと……!」

阿九斗もさすがにこれを引き留めることはできなかった。

○

逃げ出した絢子は一人喫茶室の自動販売機コーナーの前に座って悶々としていた。

——結婚？　け、け、けけっけけっけっこん？

考えてもいなかったことである。服部の一族は命を賭けて国家の要人に仕えることが多く、ほとんどの者は幸せな家庭など持ったことがなかった。長子ならば政略結婚、そうでないものは要人のためにすべてを捧げるのが普通だ。特に要人のためにすべてを捧げるというのは、主人が異性だった場合、堪え忍ぶ愛というような倒錯的なものになるしかない。またそうなるように服部家の家庭教育は行われていた。

もちろん絢子も、夜寝る前についつい阿九斗のことを考えてしまうことがあったが、そんな際に定番の妄想は、阿九斗が寝ているベッドの下に潜んで、阿九斗の体温を感じつつ、彼を守っているという実感を得るという屈折したものだった。

——結婚というと、ベッドの下じゃなくて、横に寝るわけだよな。よ、横に……。

絢子は動揺のあまり吹き出しそうになり、心を落ち着けるためにジュースを買い、荒い息を吐きながら紙コップから一気に飲み干した。

——いや、夫婦生活というのは横になるだけではないわけで……。むしろその先が……。

ジュースにむせた絢子はそれからたっぷり五分間、椅子（いす）の上でのたうち回った。
それを遠巻きに眺（なが）めていたクラスメイトたちは、また阿九斗が学院の評判を落とすようなことをしたので、心を痛めているのだろう、と漠然（ばくぜん）と考えていた。

○

「な……なんだよ、どうするつもりだよ」
絢子が逃げ出してしまい、残された阿九斗はころねに文句を言った。
しかし、ころねは平然としたものだ。
「それですべてが解決するのです。何か問題が？」
「だから……僕らの気持ちはどうなるのさ」
阿九斗が至極（しごく）当然のことを聞くと、ころねは突然に口元をほころばせた。
——え……。
阿九斗もそれには虚（きょ）を衝（つ）かれる。
「それなら私にも感情はあります。私もこれでも自分の気持ちを抑（おさ）えているんですよ」
ころねは言った。
その表情は感情にあふれた生き生きとしたものだった。

阿九斗が絶句していると、ころねは自らの口元に手を当てた。そして、顔を赤らめ、言いづらそうにもじもじとしてから口を開く。

「私だって、この命令がつらかったことだけは本当です。だって、私も、本当はあなたのことが……」

ころねの表情は恋(こい)する少女のそれだった。驚きに阿九斗が動けずにいると、ころねは阿九斗の顔に自らの顔を寄せていく。軽く唇(くちびる)を突き出し、その唇を重ねようとする。

そして、唇同士が触(ふ)れあう直前……。

「こういう迫(せま)り方がお好みだったのですね」

ころねはまた無表情に戻(もど)り、冷たく言い放った。

「ちょ……からかったな!」

阿九斗は顔を赤くして思わず立ち上がる。

ころねは再び表情を取り戻して笑った。

「ふふふ……ほんの冗談(じょうだん)です」

それはあまりに自然な笑顔(えがお)だった。

阿九斗は完全にまいってしまって、もうころねのことを許すしかなくなっていた。



あとがき

毎度ありがとうございます。水城正太郎です。あとがきを書いている現在は夏真っ盛りでして、あまりに熱いので冷やし甘酒を飲みながら書いています。これもお米のジュースです。

三巻目をお送りします。これもイラストの伊藤さんのおかげか、各地でご好評頂きまして、本作もいろいろな展開を行うことができました。時期がずれて手に取られた方は申し訳ないのですが、二〇〇八年九月発売の『チャンピオンRED』誌（秋田書店・刊）でコミックの連載がはじまります。執筆は伊藤宗一さん本人です。イラストレーター本人によるコミック化には原作者すら期待度最高潮でして、早く時間が過ぎぬかと部屋の中をぐるぐる回っている日々です。いや、早く時間が過ぎたら伊藤さんはその分だけ大変なので、部屋の中を回る速度はゆるめなくてはなりません。

そして、現在は発表できないものの、その他の展開もあります。本文をお読みの時期によっては発表されているものも終わっているものもあるでしょうが、期待してお待ち下さいませ。

んで、無駄話。

今回、執筆中、ずっとノイズミュージックを聴きながら書いていたわけです。これがまぁ凄まじいというかなんというか。文章では表現できない絶叫と電子音がスピーカーからぎゃんぎゃん響いているだけという状態。当然ながらやかましくてしょうがないわけですが、しばらく我慢していると、不思議なことにこれが眠たくなってくるのです。そういえば、大抵の曲は頭の中でリズムを追って聞いているわけですが、ノイズはそのようなことができないわけで、つまるところ認識不可能な音は、いかに騒音だろうと、脳が聞くことをやめてしまい、眠れてしまうという新しい発見をすることができました。で、興味を持ってライブ映像も見たのですが、「絶叫と激しい動きで体力を消耗するので、ライブは長くても五分ほどしかない」という凄まじい説明が。実際、凄まじい痙攣とジャンプでした。真似したら首を痛めました。そうか、ノイズミュージシャンは鍛えているから大丈夫なんだね！　と納得した後にアーティスト情報を見たら、その人も身体痛めてやんの。ノイズミュージックは危険だよ！

　とまぁ、そんなノイズに感動したので、俺もいずれノイズ・ライトノベルを書こうかと思います。長くても五ページとかの。つっても、内容はまったく思い浮かびませんが。それにいずれっていつだよって感じですなあ。

　さてさて作品の話です。

　とはいえ、今回も説明は不要かと。ただ、珍しく注意事項がありまして、「作中に登場する行為の真似はしないでね」ということ。具体的にはお米のジュース制作と変態行為です。両方ともやるとつかまりま

す。変態行為の方はしないって？　そりゃあ、まぁ、言われてみればそうでしょうなぁ。でも、ある種の変態行為はお外でやりたくなるもんなのか、この間、ヒワイな言葉を叫びながら小川の中をざぶざぶと歩いている小学生を見ました。あいつは将来、ムツゴロウさんみたいになるかもしれません。

　そんな話の後でアレですが、皆様に謝辞を。

　イラストの伊藤宗一さん。どぎゃーんと忙しいとは思いますが、共に戦いましょう。今回は、やはりころねの表情が絶品です。自分で設定した性格のくせに、この顔で卑語を言うのかよ！　と思わずにはいられません。まぁ小川を歩きながら叫ぶ小学生も存在するので、卑語は見かけによらない、とか言ってみたりして（上手く言ったつもりか！）。

　担当のO橋さん。今回もお疲れ様でした。今度は少々楽が出来る時期に仕上げたいです。何度も同じ言葉を繰り返すつもりかと問われれば、そのつもりはないと答えますが、それでも作業に時間がかかるのが不思議です。いつか早くなると祈りながら仕事をしています。お気づきの方もおられるかと思いますが、二巻とまったく同じ言葉です。まさに成長しない作家を体現する俺でございますが、見捨てないでくださいませ。

　そして様々な分野の関係者の皆様にも感謝を。いろいろお世話になっております。

　さて、まだまだ一緒に楽しめそうですぜ！

◆ご意見、ご感想をお寄せください……ファンレターのあて先◆

〒151―0053

東京都渋谷区代々木2―15―8

(株)ホビージャパン　HJ文庫編集部

水城正太郎先生／伊藤宗一先生

PROFILE

水城正太郎 みずきしょうたろう

『東京タブロイド』シリーズ（富士見ミステリー文庫）、『せんすいかん』シリーズ（ＨＪ文庫）。『ホビー・データ』を経て、現在ライター集団『Ａ－ＴＥＡＭ』主催。唐突に「占い師になってみよう！」とアホなことを思い立ち、ちょいと占い方を勉強してみたら、毎日少しずつデータを集めなければいけないってことに気づく。もちろん、その瞬間に挫折。昔から毎日やる作業と干しシイタケだけは嫌いだったのです。

伊藤宗一 いとうそういち

兵庫県在住のイラストレーター兼漫画家。
一般向けから成年向けまで幅広く活動中。
好物は、熱血・筋肉・萌え・エロ・爺。

<一言>
「大魔王」コミック化の作画を担当させてもらうことになりました。大変光栄なのですが、震　え　が　と　ま　り　ま　せ　ん　（武者的な意味で)。

HJ文庫

いちばんうしろの大魔王 ACT3

2008年9月1日　初版発行

著者―― 水城正太郎

カバーイラスト―― 伊藤宗一　　装丁―― 西村 大

発行者―松下大介
発行所―株式会社ホビージャパン　〒151-0053　東京都渋谷区代々木2-15-8